

392

189



始



392-189



大正御録

大正  
10 4.25  
内交



天啓

天啓

天啓

天啓

天啓

天啓



# 南天棒行脚録

## 目次

一人に勤められて坊主にはならぬ……………	(一)
二サー許すか死ぬか何方でも……………	(四)
三天保錢二枚で女郎買を脱れる……………	(七)
四是れぞ衲が投宿の皮切り……………	(一〇)
五第一が庭詰關なら第二は且過關……………	(一三)
六此の南天棒もまるで猫の前の鼠……………	(一六)
七天下の雲衲の仲間入り……………	(一八)
八此の「無」が中々解らんぢや……………	(二〇)
九山城の八幡の奥にも春は來た……………	(二三)
一〇萬寧和尚の横面を張り倒す……………	(二四)
一一遠州奥山半僧坊大權現の出現……………	(二六)
一二往復十二里を日通ひの入室……………	(三〇)

- 一三 二本差の武士を取占める……………(三)
- 一四 八幡に植えた南天棒誓詞の松……………(三)
- 一五 掃部の首一つ宙に飛んで伊勢の難義……………(三)
- 一六 二十二歳にして蘇山の下で典座……………(三)
- 一七 溪川の中へどんぶりこ……………(四)
- 一八 關山國師の五百遠年諱……………(四)
- 一九 首山綱宗の如きは作麼生……………(四)
- 二〇 井桁へ簀子を敷いて坐り込んだ……………(四)
- 二一 「牛過窓櫺」には泣いた……………(五)
- 二二 作務でも人に負けるのが大嫌ひ……………(五)
- 二三 汝は日本の黄檗ぢや……………(五)
- 二四 あんな心持の好い事はなかつた……………(六)
- 二五 六年間横に寝た事がない……………(六)
- 二六 鯉や鮒と一處に入浴……………(六)
- 二七 昔にも魚に就いての問答がある……………(六)
- 二八 辨慶の勸進帳も宣敷と云ふ見得……………(七)

- 二九 猫ヶ嶽で逢ふた一丈五尺餘の大蛇……………(七)
- 三〇 「南山に一條の鼈鼻蛇有り」……………(八)
- 三一 七十九代の佛祖位に入る……………(八)
- 三二 印可の賢造が無くなつた……………(八)
- 三三 紫衣の大和尚に拜をさせる……………(八)
- 三四 命懸で「槐安國語」を借りに行く……………(九)
- 三五 モウ此方もまるりさう……………(九)
- 三六 「忠一ッぢやないか」「ヤア觀座か」……………(九)
- 三七 坊主としての光輝江湖に滿つ……………(九)
- 三八 恩師羅山老師遷化の前後……………(九)
- 三九 お通夜に禾山さんと遣り合ふ……………(九)
- 四〇 ビシャツと一掌を與へた……………(一〇)
- 四一 蚤のやうに頭隠して尻隠さず……………(一〇)
- 四二 一大接心して深思を報謝せん……………(一〇)
- 四三 惟庵さんを迎ひの役……………(一〇)
- 四四 三十一歳で初めて寺持……………(一〇)

四五 雲水同様な遣方ぢや住持とは云へぬ……………(三三)

四六 衲が僧兵の大將ぢやつた……………(三四)

四七 戦争中に寺を建て禪堂も開く……………(三五)

四八 提唱は相撲の寄せ太鼓サ……………(三六)

四九 ウフン入歯がゆるんだ……………(三〇)

五〇 諸國を巡つて説教の検査をする……………(三三)

五一 頓狂な落書が出たもの……………(三六)

五二 南天棒找出しの一條……………(三六)

五三 雲衲時代に遍參の師家二十四人……………(四一)

五四 南天棒を提けて天下の道場破り……………(四四)

五五 梅林で初めて「無門關」を講じた……………(四七)

五六 勤と云ふ字に二つはない……………(四九)

五七 デモ主義なら眞平御免ぢや……………(五一)

五八 東京には禪道の跡を絶つたかも知れぬ……………(五四)

五九 越溪さんと入替つて天授を引受ける……………(五七)

六〇 禪堂建立を怒鳴つたが聞入れぬ……………(六〇)

六一 眞正の師家なら舌を嚙んで死ぬ……………(六三)

六二 圓福の廣庭で學校道具を焼拂ふ……………(六五)

六三 辨慶と日蓮と鄧州和尚とは……………(六九)

六四 茶見世の腰掛けて一寸飲み五升……………(七一)

六五 招魂祭を遣つたのは衲が始め……………(七三)

六六 石の塔婆を天王山へ建つ……………(七六)

六七 管内を廻つて日供を申込む……………(七六)

六八 物の命を取る丈が殺生ぢやない……………(七九)

六九 警策でスツバリ遣られて落命……………(八一)

七〇 衲は其の無功德を遣つた……………(八三)

七一 庭詰で歎願すること一週間……………(八五)

七二 今度こそ愈々時節到来……………(八六)

七三 初めて山岡鐵舟居士に逢ふた……………(八九)

七四 曹溪寺を退山の句が祟る……………(九一)

七五 衲は自讃他毀ぢやない……………(九四)

七六 酒五升と握飯と澤庵漬とで晋山式……………(九八)

七七 納が問答に負けたら校合する……………(一七)

七八 鐵舟居士と金玉均と書法の大議論……………(一〇〇)

七九 陛下御座の禪床を設けて行幸を仰がん……………(一〇)

八〇 事實ぢや通らぬとはヒョンなもの……………(一〇五)

八一 兒玉もムツとしたらしい顔……………(一〇七)

八二 劍をすらしと抜いて乃木さん目掛け……………(一一〇)

八三 新江戸ッ子が皆んな參禪に來た……………(一一三)

八四 愈々江湖道場の公稱を出願……………(一一五)

八五 花園禪院選佛場を移す迄……………(一二)

八六 山岡が書いた「龜鑑」と「日用規則」……………(一二)

八七 ムームーに探偵が付け廻る……………(一二)

八八 三遊亭圓朝と守田寶丹と横綱小錦……………(一二)

八九 山岡は微笑して瞑目した……………(一二)

九〇 富士へ登つて草鞋で餅を焼く……………(一二)

九一 禪會廻りではてんで相手にならぬ……………(一二)

九二 無字をトンボ返りさせよ……………(一二)

九三 私が修するは國家を守護する禪ぢや……………(二四)

九四 南天棒は無―無―と云はせら……………(二四)

九五 サ―八個の無字は即今如何ぢや……………(二五)

九六 乃木さんの苦んだ露刃劍……………(二八)

九七 欄隱は男泣きにシクシク泣出す……………(二九)

九八 納の熱血を濺いだ「碧巖集」……………(二九)

九九 玄關には何時も借金取りが一人や二人……………(二九)

一〇〇 道林寺から松島の瑞巖寺へ……………(三五)

一〇一 雲水姿の草鞋掛で晋山式……………(三五)

一〇二 山岡の春風館を聖僧堂にした……………(三六)

一〇三 松島島めぐりの「いろは」都々逸……………(三六)

一〇四 三十年來の苦辛たる宗匠檢定法……………(三七)

一〇五 納は宗派議會で堂々と喋舌つた……………(三七)

一〇六 納を煽て上げてベタンにかけた……………(三七)

一〇七 乃木將軍と紀念の撮影……………(三七)

一〇八 南天の棒より高き鼻の先……………(三七)

一〇九 どうしてお寺では此の年を越すか……………(二八二)

一一〇 南天棒と萩の棒は八幡僧堂へ……………(二八八)

一一一 喰へぬから頭を剃るデモ坊サン……………(二八八)

一一二 納が在家接衆の會の始め……………(二九一)

一一三 海清の風月一層高し……………(二九三)

一一四 觀世清廉と長田秋濤……………(二九六)

一四五 觀世の四打太鼓は南天禪の觸太鼓……………(二九八)

一五六 利巧を剃いて馬鹿になれば好い……………(三〇〇)

一五七 伊丹町の拈華會と無門會……………(三〇一)

一五八 イヤハヤ得難い代物ぢや……………(三〇三)

一五九 會の名は楠田醫院接心會……………(三〇六)

一六〇 死んで死んで死切つて仕舞へ……………(三〇八)

一六一 將軍も奥さんも納も無言ぢや……………(三〇九)

一六二 坊主の好きな乃木さん……………(三一〇)

一六三 奥さんが手作りの米で祝餅……………(三一三)

一六四 乞食坊主の様な納と大臣の寺内さん……………(三一六)

一二五 因果を知るには因果になり切れ……………(三二七)

一二六 長沙問答を實地に現して居る……………(三二九)

一二七 黒門出の禪學士も如何やら下落……………(三三二)

一二八 南天棒で持ち切つた再住式……………(三三四)

一二九 楠田不識居士が死んだ……………(三五五)

一三〇 南天棒に打たれて室内を逃げ出す……………(三五七)

一三一 無字が透つたら本も讀むが好い……………(三六〇)

一三二 今は三道樂の二を缺いた……………(三六四)

一三三 提唱を聞く丈なら蓄音器でも濟む……………(三六五)

一三四 弟子の師匠檢定に及弟……………(三七七)

一三五 羅漢を畫いて見よ納に似て居る……………(三三九)

一三六 其處へ行くと小兒は偉いよ……………(三四一)

一三七 願心さへ有れば向ふから悟らせる……………(三四二)

一三八 乃木邸で年頭の合作……………(三四四)

一三九 一撃せん勢ひでサー看よく……………(三四六)

一四〇 乃木將軍が自ら海清寺へ……………(三四九)



- 一四一 和尚ぢや左様も行かんでのう……………(三五)
- 一四二 是れには一番辟易したよ……………(三五)
- 一四三 明治天皇御追悼接心……………(三五六)
- 一四四 時候遅れの奈良晒一疋……………(三五七)
- 一四五 納が聲を呑んで萬歳を唱へた意は……………(三五九)
- 一四六 納は乃木を葬りに來たのぢや……………(三六)
- 一四七 乃木大將の遺品と夫妻の位牌……………(三六四)
- 一四八 納のことを手紙鄧州と綽名……………(三六七)
- 一四九 達磨の姿を見た様な事を吐す……………(三六八)
- 一五〇 何んでも其の職業々々が禪ぢや……………(三六九)
- 一五一 無字は四十五則妾の鬚は四十五束……………(七一)
- 一五二 誠無いとほそりや嘘よ……………(三七)
- 一五三 一喝に桂の巨頭を打ち碎いた……………(三七)
- 一五四 納が一生一代の大字……………(三七)
- 一五五 字を書くには息を次いで駄目……………(三七)
- 一五六 盜坊を怖れる様ぢや禪坊主とは云はれぬ……………(三七)

- 一五七 百五十二歳と書いたのは一枚……………(三八)
- 一五八 乃木大將和韻の草稿……………(三八)
- 一五九 チャンと用意が出來てるよ……………(三八)
- 一六〇 正受老人に逢ふてやつた……………(三八)
- 一六一 遊ぶ間のない處に安樂がある……………(三九)
- 一六二 醫者が歸れば蒲團から出る……………(三九)
- 一六三 入定前の禪堂巡り先づ京都から……………(三九五)
- 一六四 師家大家引つ括めて婆子一人……………(三九七)
- 一六五 六十年前に掛けた大願の願解き……………(三九八)
- 一六六 深紅の楓樹から一足飛に屋根と電柱……………(四〇〇)
- 一六七 法子の養成を怠るは佛種を斷つぢや……………(四〇一)
- 一六八 どんな者がひよろりひよっくり……………(四〇三)
- 一六九 今日虎になりましたと管長の挨拶……………(四〇五)
- 一七〇 今の人には自分の腹で産出さぬ……………(四〇七)
- 一七一 百里懸けて出掛けても是れぢや……………(四〇九)
- 一七二 今見ても青龍の四五疋は居さう……………(四二)

一七三 扶桑城初禪窟の古刹……………(四二四)

一七四 愈々古稀とは永の離別……………(四二六)

一七五 明治維新の暇は是れぢや……………(四二八)

一七六 入定までに安名した居士大姉……………(四三二)

一七七 關山一派の宗風の存する處〔遠諱と入定 其一〕……………(四三四)

一七八 とても大會の人を容れられぬ〔同 其二〕……………(四三六)

一七九 老僧八十氣崢嶸〔同 其三〕……………(四三八)

一八〇 末後も矢ッ張り大騒ぎ〔同 其四〕……………(四四〇)

一八一 一應化度を改める爲めに入定〔同 其五〕……………(四四二)

目次終

南天棒行脚録

南天棒 中原鄧州著



人に勧められ坊主にあらぬ

一人に勧められて坊主にはならぬ

初發心が違ふわい——坊主嫌ひの坊主——圓い頭に怒の角を生して——七歳の時母が死んだ——人の死ねと云ふ事が解らぬ——出家の道念が萌す——五年間墓地へ日参——有り觸れた坊主なら父母の面汚し——十一歳で出家——雄香寺の麗宗和尚——得度式——全忠と安名——眞實の報恩者たらん

ナニ、衲の行脚か。衲の行脚と來たら、佛祖も跣足で逃げ出すぞ。なぜと云へばサ、初發心が違ふわい。昔でも今でもちやが、大方の坊主どもには、坊主が嫌ひで坊主になつた者が多い。坊主が嫌ひで坊主になつたのぢやから、碌な行脚が出来ぬ。産の親や師匠に壓迫けられて、厭や々々ながら、せうことなしの坊主ぢや。願心が有つて衆生無邊誓願度と出立した譯ぢやない。マア

坊主になつて大きな寺でも持ちたい、又た持たせたいと云ふ位が本望ぢや。それぢやから、師兄がなければ直に後住ぢやがなぞと、圓い頭に慾の角を生じて、長い袖の下から下司張つた寺産争ひを起すぢや。ソレデ寺の賣買まで遣ると云ふ、イヤハヤ土根性の曲つた奴等ばかりぢやから、禪宗坊主で居ながら禪を知らぬ坊主どもがざらぢや。皆な贗坊主ぢやないか。納はサ、人に勧められたりなぞして坊主になつたのぢやない。

納が七歳の時母が死んだ。ソレデ人間の死ぬと云ふことが解らぬ。どうして母は死んだのか、なぜ母は物を云はぬのか、なぜ身體は冷え切つて仕舞つたのか、人間は皆斯うしたものかと、所謂世の無常を観ずると共に、此の死の根源が分明になつたら、全く母 供養することが出来るぢやらうと、ソコデ出家の道念が萌したのぢや。

確か十一歳の時ぢやつた。納は父に向つて、

「私は出家して生死の根源を明め、人天濟度の本願に乗じて母の菩提を吊ひたい。」

と切に請ふた。正可十一歳の小僧が斯んな小六ヶ敷いことを云ふた譯ぢやないがサ、意味合は斯うぢや。併し父は中々許さなかつたが、此の母の菩提と云ふことで心を傾けた。納は平素母を慕ふの念慮が厚く、母が死んでからと云ふものは、觀音寺(唐津西寺町)に在る墓地へ日參して、

五年の間一日たりとも缺かしたことがなかつた。それで父も遂に納の出家を許してくれた。納の喜びは譬へやうに物もない。納が今日斯うしてゐるのも、全く當時母に對する孝の一念からぢや。孝は萬善の本とは誠に此の事ぢや。

ソコデ父は納の志を容れるからには、そんじよそこらに有り觸れた坊主となるやうなら却つて父母の面汚しぢや、必らず一方の知識にしよう、そこはまた親の慾ぢやから、先づ第一に師を撰ばねばならぬと、松山寺と云ふ寺の元務首座に、納の得度の師を撰ばせた。ソコデ其の頃平戸の城主松浦侯の菩提所雄香寺の麗宗和尚こそ全くの師僧たりと云ふので、父と元務首座に連れられて雄香寺へ行つた。納の産れた處か。それは隣藩の小笠原藩で、肥後の唐津ぢや。さて麗宗和尚に初相見して、坊主になりたいと願ふた。スルト和尚は納の願心を見抜いてからに、即座に徒弟のことを許諾されてサ、直に雜髮して假得度を行ひ、是れ迄の孝次郎と云ふ名を改めて全忠と安名せられた。實に是れ嘉永二年九月八日であつた。

それから經陀羅尼は勿論、四書、五經、其の他内典の「句双紙」や「四部録」を一生涯懸命に素讀した。「句双紙」などは宙録點で讀んだものぢや。左様してゐる中に其の翌年の九月十八日、雄香寺の中興開山佛燈明光禪師正當の日、愈々得度式を擧げた。其の時は納の他に、全和と全覺

と、都合三人ぢやつた。(得度式の日が本山への届は誤つて十月五日となつてをる)。此の得度の「度」は渡る、渡すと云ふ義ぢや。生死流轉の海原を渡つて、常樂涅槃の彼の岸へ到ると云ふのぢや。得度の時、本師(麗宗和尚)の垂示の中に云ふのに、

「圓顯は是れ出纏の相、方服は是れ解脱の幢。見聞悉く巨益を蒙り、親族同じく昇抜に沾ふ。是の故に云ふ、流轉三界の中、恩愛は斷つ能はず、思を棄て、無爲に入る、眞實の報恩者と。」是れを聞いて大いに感奮し、柄こそ眞實の報恩者たらんと誓つたのぢや。古人にも母の深恩に酬ゆる爲めに出家したものが多し。六祖も母を棄て、黃梅山に登り、黃檗も渡頭に母の死を顧みなんだ。洞山も亦た母を棄てた。そこに報恩底があるぢや、聞き違ひをせまいぞ。

二 サ一許すか死ねか何方ても

早や七ヶ年の星霜——「臨濟錄」を讀んで感發——畫に描いた餅で腹にたまらん——ムラノと湧いた行脚の一念——天下に横行して正師を捜み——人天濟度の那一人を打出——平凡な坊主で終るのはいや——血涙を流して懇請——其の大願力に乗じて——達磨の再來——今日まで不斷行脚底

柄は初發心が如何か生死の根源を突き留めたいと思ふたのぢやから、刻苦精勵して歲月の移り

行くも覺えなんだ位ぢやが、雄香寺に入つて得度以來、早や七ヶ年の星霜を経た。晝は終日作務法要に心身を勞し、夜は多く祖錄經典に眼を曝した。處が一夜解定の後、燈を剪つて、平常好んで讀んでをる「臨濟錄」を開くと、出たのが丁度四十四枚目で、

「道流、出家兒は且らく學道を要せよ。祇だ山僧が如きんば、往日曾つて毘尼の中に向つて心を留め、亦た曾つて經論に於て尋討す。後ち方に是れ濟世の藥、表顯の説なることを知つて、遂に乃ち一時に抛却して、即ち道を訪ひ禪に參す。後に大善知識に遇ふて、方に乃ち道眼分明にして、初めて天下の老和尚を識得して、其の邪正を知る。是れ娘生下にして便ち會するに不らず、還つて是れ體究練磨して、一朝に自ら省す。」

と讀終つて、忽然として謂へらくサ、全く臨濟の云ふ如く、佛經祖錄は理事兼説するも、漫りに學相を探るに止る。何程讀んでも講じても遂に他山の石ぢや。畢竟畫に描いた餅ぢやわい、腹にやたまらん。斯んな物に拘泥してをつては、人天衆前、安心は得られぬわいと、奮起一番、ムラノと湧いた當時血氣の一念。何んでも天下に横行して正師を撰み、祖師傳来の不立文字の禪を參得してサ、立處に安心立命せなけりや措かぬと思ひ立つたら、實にハヤ矢も楯もたまらぬ、師を尋ね道を訪ふ行脚の念勃々として、其の夜の中にもと思ふたがサ、本師の許可を受けねばな

らぬので、翌朝本師の許に茶禮に出て、そこで行脚の事を請ふた。併し本師は、「まだ早い〜。」と云ふばかりで許さぬ。再三再四請ふたが矢ッ張り許さぬ。と云ふて、衲の初一念はいつかな留らぬ。衲は此の儘平凡に此の寺に居るなら、死んだ方が勝しぢや。今一度根限り願ふてみやうと、最後に本師の室を叩いて、

「衲は平凡な坊主で終るのは可厭で御座る。是非一方の師家となつて、人天を濟度せねば措かぬ。衲は若し一方の師とならぬなら、再び此の山の土は踏まぬ覺悟で御座る。本師願くは人天濟度の那一人を打出して、宗風を舉揚する御所存はないか。若し有るならば衲の行脚を御許し下さい。碌々として光陰を送らんよりは寧ろ死するに如かず。サー許すか、死ねか、何方とでも仰有つて下さい。」

と、全く血涙を流して懇請した。本師麗宗和尚も流石に衲の志の堅實にして奪ふことの出来ぬのを見て取つてか、

「諾、汝が大願心に免じて、望み通り行脚を許してやらう。此の上は必らず一方の師となるのを待つぞよ。」

と、遂とう許可された。實に嬉しかつた。其の時のことは今でも忘れぬ。此の一步こそ、衲が今日ある所以ぢやもの。忘れて好いものかよ。

それから本師は衲の手を取つて、

「汝は是れ達磨の再來ぢや。其の大願力に乗じて宗風を挽回せよ。我は汝の師たるに足りない。汝こそ是れ我が師である。」

と、老眼に慈涙を垂れ、更に指示して云はれるのに、

「達磨の再來たる汝は宜しく山城八幡の達磨堂へ行くが好い。」

と。是れは衲が十八の歳で、安政三年の八月二日ぢやつた。それから八十二歳の今日まで、不斷行脚底ぢや。足、實地を踏んだ話ぢやぞ。能く看るが好い。

### 三 天保錢二枚で女郎買を脱れる

住み馴れた寺門を後に——二度と此の山門を跨がじ——松浦侯の御用船に便乗——下の關の惣嫁女郎——お前には用はない——衲も途方に暮れた——船中で坐禪——何日何時如何な悪魔の手に逢看——のろくさい船旅——伏見の喰はんか船——天下の道場圓福寺——蟲の聲が萩の根元に

サ一本師の許諾を受けたので、袈裟文庫や襪子や、其の他の準備も整ふたから、本師に御暇乞をし、兄弟等にもそれ／＼別れを告げて、いざ出立と云ふ時、幸にも今夜松浦侯の御用船が、大阪へ向けて出船すると聞いて、急いで其れに便船を乞ふた處が、直に許された。其の時丁度文靜と云ふ同行が出来て（是れは例の鬼文靜とは違ふ）、共に昏鐘前に雄香寺を出立したちや。七ヶ年住み馴れた寺門を後にしてサ、兩三箇の兄弟等とは山門の前で手を握り合つて別れを惜んだ。そして納は後方を振り返つて山門を拜し、且つ本師の書院の方をも拜して、我れ天下の宗匠とならねば二度と此の山門を跨がじと、再び心に誓つたちや。

それから、肩には八九貫目もあらうと思ふ襖子を負ひ、右手に網代笠を持つて濱手へ行き、御用船に乗り込んだ。此の船は今で云へば郵便船ちや、三百石積の船で、赤く塗つてあるから、其の頃は赤船々々と呼んたものちや。津々浦々へ寄つて行く。やがて小倉の沖も過ぎ立海灘を渡つて下の關へ着いた。下の關も今と違つて惣嫁女郎のある頃ちやから、八人乗の親船が港に着くと、直に八人の女郎が其の船へ遣つて来るちや。處が納の乗つた船は八人の他に、納と文靜とが居るちやらう。都合十人ちやから、矢ッ張り女郎も十人來たちや。文靜の奴めは一杯飲んで女郎を相手に寝込んだが、納はサ、女郎に、

「お前には用がないから歸つてくれ。」

と云つたが、女郎はいつかな背かないので、納も途方に暮れた。どうも詮方ないから、天保錢二枚出して女郎買の仲間を脱れ、船中で坐禪したが、随分苦しかったわい。アハ／＼／＼。其の時さう思ふた。是れから前途遼遠ちや、何日何時如何な惡魔の手に逢着するかも知れぬ。是れは大いに慎まねばならぬと、深く／＼警戒した。

船は日数の三十日も掛つて漸と大阪へ着いた。其ののろくさ加減は今から思へば嘘のやうちやが、なんせい蒸気なんと云ふ力を用ゐることを知らぬ時分で、只だ風に依つて帆を上げて走るだけぢやから、港を出るも入るも風次第、風でも強くて海が荒れると、何日でも港に留る。ちやから日數も掛る譯ちや。殊に二八月と云ふ海荒の時節ちやつたのと、又た船頭等は港々に知己があつて、

「來ませや、來ませ。」

と、各自に招く始末ぢやから堪つたものぢやない。

紺の前垂に松葉の模様

松に紺とは木にかゝる

なぞと唄ふ中に、マア兎に角大阪へ着いた。

それから淀川往來の三十石船に乗つて橋本へ行くことにした。

「午夢汁喰はんかア——、アッコ餅喰はんかア——。」

の聲も初めて聞いた。船頭等が、

「サー——お客さん、橋本上りがあるなら仕度せい——。直に出すぞオ——。アレ橋本女郎衆が招いた——。」

と、がや／＼云ふ中に橋本へ上り、それから男山八幡宮の麓を通つて、天下の道場圓福寺へ向つた。船場の喧騒に引替へて、森々とした松林や有名な竹鉾。それは秋の入り初めで、蟲の聲が萩の根元にジィィ——と云ふのみぢやつた。

#### 四 是れぞ衲が投宿の皮切り

日本三達磨堂の一つ——此處で一番骨折つて——選佛場初入りの聲——照願脚下——  
——小さいから船がはみ出る——食堂は三默堂の一つ——他宗には見られぬ美點——  
——二晝夜が中々大難——掛塔願ひ——汽車でツ——と行く行脚——何も知らぬ者が何日か師匠——勤中の工夫——山色水聲皆な公案——眞箇の修行は行脚

船から上つて、傍目も振らず眞一文字に來た圓福寺と云ふは、山城國都綴郡八幡庄に在る江湖道場ぢや。是れが本師から聞いた日本三達磨堂の一つであるか。大和片岡や奥州扇谷は未だ知らず、此の道場が我が初願満足す可き達磨堂であるか。衲も師匠から達磨の再來ぢやと云はれた身ぢや、此處で一番骨折つて出藍せなければ措かんと決心しながら玄關へ掛つたが、最早昏鐘に間もない時刻ぢやつたから、今晚は投宿にし、明日から掛塔を願はうと、庫裡の玄關へ立つて、

「頼みませう。」

と遣つた。是りや選佛場初入りの衲の初聲ぢや。

「ドウレー。」

と答へて、知客寮が出て來たから、

「肥前國上松浦郡平戸雄香寺麗宗徒弟全忠、投宿を願ふ。」

と申込んだ。スルト暫くして許された。先づ草鞋を脱ぎ、抱き合せて庭の隅に正しく置く。なせと云へばサ、庭の柱に「照願脚下」と書いてあるからぢや。

それから案内されて、看門寮の一室を充てられたから、壁の方に襪子を置いて、其方へ向つて坐禪をして居つたが、晝の疲れか何か知らぬが、眠くて／＼堪へられぬぢやア。其の中に入浴も

薬石も済んだ。それから茶禮ぢや。投宿帳に記名の式法を終ると、煎餅蒲團一枚を運ばれ、御自由にと云はれたから、マア〜寝るが一番と、一枚の蒲團を二つに折り、柏餅のやうに自分が蒲團になつて寝たが、イヤハヤ寝られればこそ、蒲團が小さいから蒲團がはみ出ると云ふ情けない始末ぢや。

やがて巡鐘が鳴り渡る。フト眼を覺ますと、小鐘の響きが出頭を知らすぢや。サー朝課が始るから、自分も洗面して本堂に昇り、常住席の一番未單に坐して讀誦三昧。朝課が終ると粥座の仕度が始つた。出頭の響と共に、雲衲が名々鉢盂を持つて出て来る。衲も未單に着いた。食堂は三默堂の一つぢや。喰ふ飲むに少しの音もせぬ。百人の坊主が喫飯しても、隣室には何んの音も聞えぬぞ。是りや他宗にや見られぬ美點ぢや。食事の時ガチャ〜するのは畜生のやうぢやわい。ソコで粥座が済むと知客寮から茶禮に来て、

「随意に出立せよ。」

と申渡された。是れが衲が投宿の皮切りぢやつた。

サー是れから庭話の段ぢや。國を出る時、本師が懇切に教訓して呉れた通り遣るのぢやと思ふと、二晝夜が中々大難のやうにも感じたが、下の關で天保錢二枚出して坐つたよりは、確かに先

の見込があるので、更に掛塔願ひと出掛けた。酒の本師と云ふので褒めるぢやないが、初行脚に出る時、禪堂のことは勿論、投宿、點心の作法、師家相見に至るまで、一々本師が訓へて呉れたが、今時の坊サマ達は、汽車でツ〜と行くものぢやから、投宿のことも點心のことも知らぬ。知らぬ者が何日か師匠になるのぢやから、サー何も知らぬことになつて仕舞ふ。それぢや駄目の皮ぢや。禪宗の行脚は行脚其のものが修行ぢや、動中の工夫ぢや。山河大地皆な教科書、山色水聲悉く公案ぢや、それを知らぬ坊サマばかりぢやから、偶に投宿にでも來る者があると、宿錢がないから來たなと思はれて、丸髻姿の朱唇から、お断りしますとやられるぢや。アハ〜。併しサ、今時は全く道の爲めに行脚する坊主がなくなつて、實際無錢の乞食坊主ぢやないと投宿や點心をせぬから、断られるのも亦た無理はない。けれども眞箇の修行坊主には行脚位實地の學問になることはないぞ。古人もウンと行脚したものぢや。

五 第一が庭話關なら第二は旦過關

禪門初入の難透の一幕——左も威嚇するやう——劔もほろゝの挨拶——本師の云はれたのは此處——鬚首を持つて引摺り出される——夜は門傍に寝る——丁度二



晝夜——嚴重でなければ眞の道念は出ぬ——坊主と居士とは通る道が違ふ——又  
た是れお慈悲の牢獄——第三は堂内關

サ—是れから禪門初入の難透の一幕ぢや。日本三大達磨堂の一つに數へられる圓福の僧堂、今日  
日のやうに莊嚴ではなかつた。庫裡の大庭で例に依つて、

「頼みませう。」

と怒鳴つた。氣の所爲かも知れぬが、同じ「ドウレー」と云ふ聲でも、今日のは昨日に比べて  
大きく、左も威嚇するやうぢやつた。後方の山に響いて衍となつた位ぢや。衲は國處から本師の  
名前と自分の名とを述べて掛塔を願ふた。處がサ、劍もほろゝの挨拶、

「ならん、出て失せう。」

と、たつた一言を云ひ捨てて入つて仕舞つた。如何せうかと思ふたが、本師の云はれたのは此  
處だナ、此の儘に低頭して時の到るを待つ外はないと覺悟して待つてゐる間にも、時々出て來て  
は、

「失せう。」

とばかりに怒鳴り散され、果は襟首を持つて引摺り出された。

併し妙なもので、斯うされると猶ほ入りたくなる。夜は門傍に寢て、再び庭に入つて許可を待  
つた。それが丁度二晝夜ぢやつた。中々辛かつた。今時の居士や大姉等は初入の時も一遍の相見  
で、サツサと入室も參禪も出来る。誠に結構なことぢや。そこへ行くと、坊サマは古則に依つて、  
形式にでも是れだけは是非遣らねばならぬ。今は是れが樂に遣れる處もあるさうぢやが、全體は  
茲が嚴重ぢやなうては、眞の道念は出ぬぢやテ。居士なぞでも印可でも貰うと、直に老師なぞと  
自稱したり自書したりするが、居士等の遣り方と祖師門庭の傳法師とは、自ら辿る道が違つて  
ぞ。それぢやから眞性を諦得さへすれば、坊主も居士も同じ者と思ふは間違ひぢや。古來より維  
摩でも龐居士でも、此の邊は慎んでをる。有眼の者は氣を付けねばならぬぞ。  
漸く許されて旦過寮へ上げられた。併し未だ入門の半途ぢや、善いでも悪いでもない、只だ要  
するに土間でないだけぢや。此の旦過寮と云ふやつが、又た是れお慈悲の牢獄ぢや。第一が庭詰  
關なら、第二は旦過關ぢや。それから堂内と云ふ三關を透つて、師資相見の段となるのぢや。今  
は昔の物語りぢやが、其の當時は懸命なものぢやぞ。懸命なりやこそ今日南天棒とも云はれるの  
ぢやぞ。

六 此の南天棒もまるて猫の前の鼠

且過七日の動靜——便利な一見辨見——飼犬に手を咬まれる——且過の日數が足らぬから——葉縣省和尚と浮山遠——且過は辛抱くらべ——畫に描いた若い達磨——七日間打通しに靜り返る——可憐さうな風情——今ま衲が其れを見りや泣くよ——愈々掛塔を許される——鬼の首でも取つたやう

且過の「且」を「且」と思は間違ひぢや。即ち夕に來宿して且に過ぎ去ると云ふ意が抑も且過の義ぢや。雲衲は庭詰二日を経、且過七日の動靜に依つて、掛塔の可否を決せられるのぢや。今ぢや氣が短くて、一見辨見、直に分明ぢやなぞと、自己の見地の深淺も辨へず、三日は愚か、一日も其の動靜を見ずに、彼れは善い此れは悪いのと好い加減な極め方をするから、サー後になつて持逃げをされて、飼犬に手を咬まれたと目を剝出して騒ぎくさる。是れ畢竟且過の日數が足らぬからぢや。

「大惠書」を見ると、

「葉縣省和尚、嚴冷枯淡。衲子浮山の遠、天衣の懷、之れを敬畏し、特に往いて參叩す。正に雪の寒に値ふ、省、訶罵驅逐するに、水を以つて且過に潑ぐ。衣服皆な濕ふ。他の僧怒る。兩人のみ且過の中に座す。省到り又た訶す。(中略)。浮山遠禪師曰く、我れ豈に一杓の水、以つて

潑けども便ち去らんや。若しくは打殺するとも去らじと。省笑つて曰く、掛塔せよと。」ある。ぢやから且過は辛抱くらべぢや。大法の爲めには喪身失命を避けず。衲もじい—ツと壁に向つて黙座してをつた。傍から見たら畫に描いた若い達磨のやうなものぢやつたらう。一日と過ぎ二日と過ぎ、とう／＼七日間打通しに靜まり返つてをつた。其の時の南天棒はまるで猫の前の鼠ぢやわい。高崎正風が相模の眞鶴に遊び、頼朝の身を隠したヒトトウの岩窟を見て詠んだ歌に、

末つひに空に搏たん大鷹も

ひとゝ岩窟にひそむ時あり

と。南天棒もサ、六十四ヶ國を勝に掛けて、今日天下の老和尚となつたものゝ、十八の時八幡の圓福の且過寮で、壁に向つて七日間ぶツ坐つた處は、全く可憐さうな風情に違ひなかつた。今ま衲が其れを見りや屹度泣くよ。

處で七日目の晩に知客寮から招に來たから行つてみると、掛塔を許すとのことぢや。ハイと云ふ返事をした時は、鬼の首でも取つたやうに嬉しかつた。それから知客寮で種々と僧堂の規矩を示されて且過寮へ戻つて來ると、早や解定の板が鳴り渡つた。例に依り柏餅にゴロリぢやが、餘

り嬉しかつたので其の夜は眠られなかつた。妙なものぢや。

七 天下の雲衲の仲間入り

禪堂へ入る——土用千の羅漢——横眼でジロリ——新到參堂——坐るも寝るも煎餅蒲團一枚——新參の中は遣り損ひ——しいッ／＼と睨め付けられる——軍隊の初年兵と禪門の修行——天保錢三枚の相見香——威儀を具して相見——萬松庵石應宗珉大禪師

寅の刻頃、巡鐘が鳴り渡る。起きて顔を洗ふ間もなく、出頭の半鐘が鳴る。朝課のことが終つて粥座が済むと、袈裟を掛けて禪堂へ入つた。堂内には直日單と單頭單とあるが、衲の襖子は單頭單の末席に置いてあつた。意地くね悪さうな坊主どもが四五十人、羅漢の土用千のやうに並んでつて、衲が入堂すると、横眼でジロリと盗むやうに見る其の眼付の白さ、其の面付の悪たらしさは、今ま思ふてもゾツとする。

初め文殊大士、達磨大師の前で坐具を陳べて三拜し、終つて首日の前に出て低頭して元の處へ歸ると、侍者がドウマ聲でサ、

「新到參堂。」

と報じて、一同に茶禮があつた。此の茶を飲んだので、先づ天下の雲衲の仲間入りが済んだと云ふものぢや。禪坊主は是非とも是れを遣りにやらぬ。人間の仲間入りにやオギャアと一聲乾坤に響き渡る。そのや知らんでもサ、坊主になつたら坊主になつたと丈きや知らにやらぬ。堂内の自分の席のとを單と云ふ。そこには各々單箱と云ふものがあつて、身の廻りのものを入れるぢやテ。衲も襖子を解いて、種々の荷物を其の單箱へ入れてサ、先づ／＼堂内の人となつた譯ぢや。

今時の雲衲は毛布なぞと云ふ調法なものを持つてをるが、衲等の雲衲時代には夢にも見られぬことぢや。固い／＼板のやうな煎餅蒲團を三つに折つて坐を占め、夜分は其れを二つ折りにしてもぐり込んで寝るぢや。それから如何程衲がきかぬ氣でもサ、新米の中は規矩と云ふものを能く呑込まぬから、遣り損ひがあつて、何時もしいッ／＼と睨め付けられる。其の情けないとつてない。新到は辛いものぢや。今の兵隊さんでも、初年兵は辛いものぢやさうな。禪門の修行と同じやうぢや。イヤ話が逸れたわい。

それから又た知客寮から、

「明日粥座後に老大師に相見するのぢやから、相見香を包んで置け。」

と云はれたので、天保錢三枚を包んで、「欽上、全忠九拜」と認めて置いた。翌日粥座が済むと、

納共に新到五人は知客寮頭に伴はれて老大師の室に入つたぢや。無論足袋を穿き、袈裟を掛けた即ち本威儀ぢや。老大師は相見香を供じて床の間の上に置き、三拜せられるから、新到の者等も各々座具を陳べて三拜して着座すると、一同に茶禮の事があつた。此の老大師こそ萬松庵右應宗珉大禪師ぢや。老大師は鐵の如意を弄しながら、撥草瞻風は只だ見性を圖るのみ、見性即見佛と云ふことを懇々御垂誠せられた。

八 此の無が中々解らんぢや

趙州の無字の公案——衲の無字は天下一品——拶處が四十五ヶ處——公案と犬——今時の無字は繪解——隨分冷汗が出たよ——臘八接心——不眠不休の七日間——サー行け——と追立てる——引擔がはて隠寮へアチ込まれる——臘が人間を追ふやう——進退窮つて省悟——無字を透つて踊り出す

相見が済んで晩になると、開板が鳴る。サー喚鐘が鳴る。古舊の人から參禪に行く。衲も入室した。スルト萬松庵老大師は、衲に無字の公案を授けられた。

「趙州因に僧問ふ、狗子に還つて佛性有りや又た無や。州云く、無。」と。たつた是れだけぢや。此の「無」が中々解らんぢやテ。是れは「無門關」の第一則にある。

衲が今日僧俗共に初入の參禪者に此の公案を授けるのは、最初入禪の因縁に依るのぢや。衲の無字の則は天下一品ぢやが、是れも一に萬松庵老漢よりの賜物ぢや。

序ぢやから云ふて置くが、此の無字の公案には拶處が四十五ヶ處ある。其の起りは今も云ふた狗子佛性の問答ぢや。犬と云ふ奴は奇妙にも古人の則には能く引合に出されてをる。子湖の狗ぢやの、西園の靈犬ぢやの、黃龍心和尙の狗と香、卓の情無情のと澤山あるが、其の中でも趙州の狗子が一番初入者に適當してをるから撰んだのぢやらう。此の趙州を一纏めに云ふてみればサ、

「僧、趙州從諗禪師に問ふ、狗子に還つて佛性有りや又た無や。州云く、無。僧云く、上諸佛より下蟻蟻に至るまで皆な佛性有り、狗子甚麼としてか無き。州云く、伊に業識性有るが爲めなり。又た一僧問ふ、狗子に還つて佛性有りや又た無や。州云く有。僧云く、已に是れ佛性有り」と云ふ、甚麼としてか皮袋裏に入り去る。州云く、他の知つて殊更に犯すか爲めなり。」

と、此の商量一番、中々容易ぢやない。是れが無字の拶處の中に皆な有るぢや。此の意子合を知らんでは無字は見られぬぞ。今の坊主共や居士等が、無字を見たの、隻手を聞いたのと、ほざきくさるがサ、衲が檢定すりや一つも透つてはをらぬぢや。それで無字が如何の、隻手が斯うのも寒じいわい。今時の無字は繪解き講釋ぢや。皆な古人の糟粕を舐つてけつかる者がかりぢや。

ヤレ道元が何んと云ふた彼と云ふたとて、餘處他處ばかり穿鑿しをる。間違ひも亦た甚しぢや。それは扱置きサ、此の無字が透れば、千七百則も、父母未生以前の自己本来の面目坊も、朝茶の子ぢや。併し衲も初入室の時は随分冷汗が出たよ。無論透らん。堂内へ戻つた時は全身が冷ッこかつた。サーそれから何んでも此の無字を見なけりやと、せつせとやつたものぢや。

其の中に臘八接心となつた。臘八と云ふはサ、十二月の一日から八日の朝まで、不眠の大接心ぢや。衲は別して人とは違つた本願があるから、不眠不休、七日間ブツ通しにやつた。此の臘八は釋尊が十二月八日、曉の明星を徹見して大悟したのに因んで、是非とも一週間に見性せよと激勵する。ぢやから埒の明かぬ奴等がサ、單上に坐してをると、直日が、サー行け〜と追立て〜入室させる。入室すりや怒鳴られる。行くまいとそこらにノソノソすると、直日や助香が見付け出して追捲くる。それでも行くまいと柱なぞにでも嚙付からものなら、侍者迄が出て来て、三人に引擔がれて隠寮へブチ込まれるぢや。と、其の來るのを見るや否、蟻が人間を追ふやうに、師家は直に三十棒喫はせる。實にハヤ進退窮つて省悟するが、此の南天棒も其の一人かサ。併し衲は入室參禪が好きぢやつたから、實際傍眼も振らす遣つて退けて、丁度八日の朝と云ふに、無字を透つて踊り出した。實にハヤ「無門關」の、

「蓦然として打發せば天を驚かし地を動さん。關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るゝが如く」と云ふことの嘘でないのが會つた。ソコで時も處も構はず入室して見解を呈した。實に是れ安政三年十二月八日のことぢやつた。

### 九 山城の八幡の奥にも春は來た

ウンと御垂誠を喰ふたよ——一番きかぬのが衲ぢや——痛棒を喰ふ毎に坐禪が徹底する——火鉢に火が入つてゐる——行脚第一年の元旦——三十年後には百人の龍象をうならせてみせる——文殊大士の法華觀法三昧の修法を授かる——蛇は寸にして人を呑む

翌くる年の安政四年、衲が十九の時サ、正月二日に隠寮へ呼付けられて、ウンと御垂誠を喰ふたよ。それと云ふのが、多くの雲衲の仲間が一番きかぬのが衲ぢや。何時の入室でも老人師の痛棒に逢ふぢや。衲は又た痛棒を喰ふ毎に坐禪が徹底するやうに思ふから、態とではないが随分やつたよ。梅は寒苦を経て香しく、松柏は雪後に色轉た鮮か——と云ふ意氣でサ。

正月と云へば何んとなう心嬉しいもので、山城の八幡の奥にも春は來た。大晦日の前日から、掃除萬端の莊嚴が濟んで、文庫餅も貰ふた。昏鐘後間もなく開板が鳴つた。サー總茶禮ぢや。足

袋を穿き茶碗を持つて、上間へ出頭すると、萬松庵老大師から正月に就ての御垂誡があつた。それから老大師は隠寮へ、衲等は禪堂へ歸つてみると、何時にない、火鉢に火が入つて居る。いつもなら線香より外に火の氣を見たこともないが、明くれば所謂正月ぢや、大晦日の晩から火鉢が入る。四來の雲水等は、除夜ぢや歳旦ぢや、平の仄のと喧しい。夜は更けて何時の間にか百八の鐘聲も撞出され、チリン／＼の巡鈴が鳴る。直日の引磬で起きて、今朝のみは湯で顔を洗ふのも、正月と云ふ心地がする。本威儀の正装して行脚第一年の元旦祝聖を遣つた。心の中ぢや三十年の後には衲が此の本堂で祝偈を唱起して、百人の龍象をうならせてみせるぞと叫んだ。それがどこかに現れたと見えて、老大師は衲を呼んで、文殊居士の法華懺法三昧の修法を傳授せられた。それが衲の十九ぢや。蛇は寸にして人を呑む、禪坊主は何んでも初發心に佛祖を呑脚せなけりや駄目ぢや。

一〇 萬寧大和尚の横面を張り倒す

する事なす事へま計り——隱山下の萬寧さん——惡辣な宗匠——「無門關」の提唱——疑團のみになりや疑團もない——幾度か室内の穿鑿——ふらい力ぢやのう——

「よつつかるが第一——角力取りが大關の胸板によつつかるやう——受ける方も大抵な事ではない——今時はソーツと取つて行く」

其の年の春ぢやつた。尾州杉田の妙興寺に三十座の大會があるので、八幡からも雲衲が荷擔することになつて、衲も其の中の一人に撰ばれた。まだ僧堂にも馴れぬから、する事なす事、へまばかりぢやつたが、修行の願心だけは強かつたから、此の大會にも人に遅れずに出掛けたぢや。處が其の時の師家は、隱山さんの曾孫裳林さんの法嗣で萬寧さんと云ふて、例の雷鳴雪潭と兄弟合ぢやつたから、此の人も中々惡辣な宗匠ぢやつた。丁度講本は「無門關」で衲にはお誂へ向きぢや。

玉桃軒萬寧大和尚は當日も講座で「無門關」を擧して、第一則「趙州狗子」の無門和尚の評、「透關を要する底有ること莫し麼。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて、通身より箇の疑團を起して、箇の無の字に參せよ。」と云ふ句に就て提唱された。

サ—此の疑團ぢやが、疑團のみになりや疑團もない。趙州の無字の見もないなぞと、幾度か萬寧大和尚と室内の穿鑿をやつた。無字の根源なぞでは、萬寧和尚の横面を張り倒して、萬寧さんに、

「ゑらい力ぢやのう。」  
と云はれた。

それから杉田が濟むと、引き続き飛驒の禪昌寺に矢ッ張り三十座の大座があつた。此處も講本は「無門關」ぢやつたから、是れにも隨喜して又た萬寧さんにぶツつかつた。何んでも修行時代には力の勝つた者にぶツつかるのが第一ぢや。併しぶツつかるも無暗ぢや不可ぬ。矢ッ張り無法の處に法が有るから、ぶツつかるやうにしてぶツつかるのぢや。角力取りが日の下開山になる迄には随分ぶツつかつたものぢや。禪堂で公案ばかり工夫しても、ぶツつかるをしないと、眞の力は出ぬものぢや。衲は師家へ入室するには、角力が大關の胸板にぶツつかるやうな心持で遣つて退けたのぢや。ぢやから受ける方でも、中々大抵なことではないわい。今時の禪學者の遣り方はぶツつかるのぢやない、ソーツと取つて行く、なるたけ師家に觸らぬやう／＼にと遣つて行くから、どうしたつて力の出やう譯がないぢや。

## 一一 遠州奥山半僧坊大權現の出現

龍水大和尚の碧巖會——四來の雲衲五百名——信施で己が腹を肥す——嶺には三

日月が薄く光る——ロー／＼悲鳴る聲——助けてくれ勸忍してくれ——不思議ぢや／＼——千の垂誠萬の警策に勝る——半僧堂にて誓を立てる——三日三夜飲まず喰はず——人が見たら氣違ひ沙汰——石應老漢の大喝——一處透れば千處萬處——投機句——淀川を渡つて一首

飛驒の無門會が分散すると、又た引き続き遠州奥山の方廣寺に、龍水大和尚の碧巖會の結制があるのので、同じく掛錫したが、是れは又た稀有の大會で、四來の雲水、實に五百名からあつた。今のやうに汽車や汽船や、自動車や飛行機のある時代なら、五百の人の集まるのも何んでもないが、是れ衲が十九ぢやから六十三年前のことぢや、皆な二本の脚で膝栗毛をやつたものぢや。今も昔もぢや、多人數の仲間には、碌々修行に骨折らず、大飯を喰つて寝ることばかり稽古してけつかるものがある。そればかりか坊主の癖に慾が深く、折角の信施を大衆にも頷かず、己が腹を肥さんとする奴もあるものぢやテ。

是れは丁度五月三日の夜のことぢやつた。奥山の嶺には三日月様が薄く光り、山の谷合は段々に暗み渡る。實にハヤ四隣寂として何とも云へぬ淋しさ。山と云ふ山では、飛驒の高山をも經て來たがサ、奥山の晩れ方と云ふたら譬へやうはない。まるで廣寒宮へも行つたやうぢや。その中解定の誦經が始ると、何處かでヒ／＼悲鳴る聲がするではないか。何ぢやらう、奥山のことぢ

やから狐か狸か、巫山戯るのかしらんと思ふ中、解定の經も終る頃には、僧堂の棟の上で大悲鳴を擧げ、

「助けてくれ、勘忍してくれ。」

と泣き叫ぶ聲の物凄さ。大眾達は皆な顔色を變へて身の毛を戰慄て、思はず耳を掩ふた。と、今度は山門頭の大杉の上あたりで悲鳴るかと思ふと、又た開山塔の屋根の方で悲鳴る。する中に段々聲が遠退いて、微かになつたので、第一禪堂、第二禪堂と搜索したが、別に怪しいこともない。それから開山堂や佛殿は無論、方丈、庫裡、山門の隅々まで調べたが、是れと云ふて變つたこともないので、只だ不思議ぢや〜と云ふたが、何んとも其の夜は恐ろしくて、隣單の者と共に首を練めて蒲團にもぐり込んで寝たものぢや。

スルト其の翌日、講座になると、龍水大和尚が大眾に向つてサ、

「昨夜は當山の鎮守半僧坊大權現が出現せられて、此の大會に掛錫してをる某寺の住職が志の良からぬを怒り、遂に其の坊様を引捕へ、法衣や衣帯をば彼の山門の傍の大杉の頂に掛け置き、身體を此處から三里離れた三方ヶ原まで持つて行つて、野雪隠の糞壺の中へ投し込まれたぞ。昨日まで紫衣黄衣を着て、方丈の和尚のと云はれても、佛祖の訓誡を守らなけりや、斯く

の如き淺ましい最期を見るぢや。四來の雲水方よ、各々も徒に信施を消費し、修行に骨折らず、空しく光陰を送らば、遂に權現の憤怒に觸れて、昨夜の住職の如くならん。恐る可し、慎む可し。」

と垂示せられた。大眾は聽いて皆な脊を汗にした。此の事を知つてをるのは、衲と奥山の再門和尚のみぢやが、其の和尚も近頃死なれたから、もう衲のみとなつた。

衲は目前昨夜の悲鳴を聞き、それから大杉の頂の衣帯を見て謂ふには、鎮守權現の出現は、實に千の垂誡、萬の警策に勝つたものぢや。我も此の會に公案透過せんば、盟つて此の山を下らじと、半僧坊の堂内に入り、勇猛大精進の一氣を振起してサ、設ひ此の床の抜けるとも、大事了畢せんば此處を去らじと、端座すること三日三夜、飲まず喰はず遣つた。人は氣が違ふたと云ふたが、一事を爲すには、人並では人並だけのものよ。氣が違ふたと云はれる位まで遣らにや嘘ぢや。

ソコでとう〜一路の光明を見たから、歡喜して直に石應老漢の室を叩いて見解を呈した。スルー老漢は大喝一聲して、古人の古則公案數段を以つてしたが、一々に透過した。自分ながら能くも斯う透るものかと思ふ程ぢやつた。まるで無人の境を行くやうぢやつた。實に一處透れば



千慮萬慮立處に透らちや。それを今時の人は、隻手が透つても無字が透らぬの、無字は見たが機關は見ませぬのと、何んのことぢやい。衲の透過は寒じいものぢやつた。其の時は石應老漢も心底喜んでくれた。衲の其の時の投機の句がある。お得意ぢやテ。

けふと云ふ今日は晴れ行く奥山の

曇りはなきぞ法の近道

と遣つた。石應老漢も、それで好いと云はれた。

さて百日の大會も無事圓成して、いざ八幡へ歸らうとする時、折悪しく石應老漢は病に臥して臥雲院に滞留することになり、雲衲のみ歸錫した。衲も其の中にあつた。早や八幡に近付いてサ、宇治川を渡り、八幡宮の下を通りながら、フト胸に浮んだ一首、

これまでの藍の着物を脱捨て、  
洗ひ歸りし宇治川の下

其の時の衲等の意氣と云ふたらなかつたぞ。とても今時の人の想像も及ばぬことぢやと思ふ。

一一 往復十二里を日通ひの入室

石應老漢の遷化——追悼には接心程よいものはない——洞落は禪坊主自身が招く——八幡の師家空席——花園天球院の薩門老漢——往還が唯一の道場——淀川の船の縫るのを止める——川中の船頭と一處になる——お前さんは船頭かえ——工夫は蒲團の上ばかりぢやない

石應老漢が遠州奥山臥雲院で遷化せられたので、師席が空席となつた。此の萬松庵老大師は實にハヤ衲が入室參禪初入の師家だけに、本師に別れたやうな思ひぢやつた。そして老大師の追吊接心の爲めにサ、江州永源寺の海州老師を八幡へ請じて、「無門關」の提唱を乞ふた。凡そ師家の追悼には接心會程好いものはない。此の接心に一箇でも半箇でも打出してみよ、實に人天の爲め幾何ばかりの功德ぞ。今時は接心を怠つて、ほんの申譯に齋會を營む。それぢやから段々に禪風が地に落ちるぢや。禪宗の凋落なぞと云ふ、凋落は禪坊主自身等が招くのぢや。寺でも持つと坐禪することを忘れて仕舞ひ、禪宗坊主の辯に、坐禪するのを餘分なことでもするやうに思ふ者がある。禪も何も知らんで、寺でも持てばゑらさうに構へて、近處に師家があつても參ぜもせず、却つて其の師家の悪口を叩くなぞと云ふ怪しからん奴が多い。何んと云ふことかサ。

ソコデ八幡では恩師石應老漢を失ひ、後輩を拜請するには一ヶ年餘も掛つたから、其の間衲は六里離れた京都花園の天球院に薩門老漢を訪ふて入室參禪を願ひ、毎月二、五、七、十の日を定

め、八幡から往復十二里の處を直參したものぢや。今では京阪電車もあり人車もあるが、六十餘年前にはそんなものはかたふたもない。朝課を終り、彌座役後の用を辨じて、草鞋穿きで花園へ行き、入室後又たコツ／＼と歸る。此の往還が唯一の道場で、活きた公案にぶつつかりながら歩いた。淀川の舟の艘るのを止めてもみた。三十石船が下つて来る。

「サー／＼お客さん、千本松に來たぞ／＼。淀上りはないかア——。エーナー山崎八幡を前にナー、橋本女郎衆が出て招く。サー／＼お客さん、山崎ぢや／＼。」

是れは初めて八幡へ來た時聞いた聲ぢやがサ、斯うして唄ふたり呼んだりする、そこに大切な處があるのぢや。納は川沿を歩いてゐてもサ、川中に櫓を押す船頭と一處になつたぢや。是りや船が漕げるわいと思つたから、岸に繋いであつた小さな舟の主に斷つて、一寸其の櫓を貸して貰つて、エーナーで押したら、舟は眞直に進むぢや。ハ、ア茲だナと、大いに發明したことがあつた。呆氣に取られた船頭は、

「忍らい坊サマぢや。お前さんは船頭かえ。」

と云つた。竿に三年櫓に三月と云ふが、納は船頭の唄で、櫓心と竿頭とをチャンと我物にしたのぢや。ぢやから工夫なんて云ふものは、蒲團の上ばかりが仕處ぢやないわい。

### 一三 二本差の武士を取占める

鷹王軒蘇山老師を拜請——野火焼けとも盡きず——怒鳴つても空吹く風——金時の火事見舞——納も廿歳位の時には力があつた——僧は三界の大導師ぢや——武士たる者が何んたる無作法ぞ——松魚節ぢやらう——我れ過てり／＼——普通な人間計りぢや納らない——髪テコの者が出てこそ

納が二十歳の時の雪安居、即ち臘八前に、鷹王軒蘇山老師を八幡の後董に拜請することになつて、老師が晋山された。今迄は京都まで通つたが、今度は隠寮が近くなつたので、間さへあれば入室した。

四、丸の掃除日ぢやつたが、大衆と一處に表の草撈りをしながら、フト、「野火焼けども盡きず、春風吹いて又た生ず」と云ふ語に撞着して、大いに得る處があつた。丁度其の掃除の時ぢやつた、武士を凹ませたことがある。

あの時分は二本差の武士が一番威張つた時分ぢやつたが、納が掃除してゐると、ツカ／＼と寄つた一人の武士が、

「オイ、此の寺に達磨があるか。」

と問ふたがサ、禮は素知らぬ顔をして、他の兄弟輩に、

「達一ウ、昨夜のケンチンは残つてをつたかなア。」

と話し掛けた。達兄が碌々返事をせぬのに、今の武士の奴、いかにも焦つたさうに、大きな聲で又た、

「達磨のある寺は此處か。」

と怒鳴つた。それでも禮は一向頓着なく、

「達兄、お主も典座の方へ廻つても好い頃ぢやないか。チト骨折れよ。」

と、空吹く風でをると、武士め、怒つたの怒らぬのぢやない、金時の火事見舞のやうに眞赤になつて、

「此の糞坊主め、武士を嘲弄するか。」

と、ムツと衲の首筋を押へたがサ、禮も是れ、二十歳位の時は中々力があつたよ、相撲ぢや何處の大會でも負けはせなんだ位ぢやから、青侍の押へた手をグイと拂ひ退けてサ、

「何を無禮する。僧は三界の大導師ぢや。其方は武士ぢやないか、武士は四民の上に立つ者ぢや、仁義禮智信の五常を具ふべき筈ぢや。凡そ人に事を尋ねるには、尋ねるだけの作法がある。

鳩でさへ禮讓を失せぬぞ。而るに武士たる者が何んたる無作法ぞ。殊に世出世ともに尊崇せらるゝ祖師を呼んで、達磨と呼捨にするとは不埒の至りぢや。汝は武士の形をした質武士ぢやらう、イヤサ松魚節ぢやらう。若し眞の武士ならばサ、二本の其の魂に對しても、自己の非禮な態度を顧みて、僧侶の首を押へるなどは爲まじきとぢや。藩祖松浦侯ですら、菩提所の雄香寺へ參詣せられた時、祖師の像が床に懸つてをれば、必らず席を横に避けて、祖師に脊後を向けなかつた位ぢや。即ち是れ檀那として宗祖に對する禮法ぢや。汝何んの得力有つてか斯くの如き無作法を働くぞ。サー云へ〜。」

と、武士の手をギューと捻上げて詰責すると、此の武士も只者ぢやなかつたらう、飄然覺つたとみえ、

「我れ過てり〜。」

と、深く謝したから、

「それなら許してやらう、以後氣を付けさせ。」

と云つて、放してやつた。大衆等は、

「忠兄のやつ、若いが中々やるなア。」

と、舌を捲いたやうぢやつた。  
人は矢ッ張り二十歳位から一寸異つた處がなくちや面白くないテ。兎角僧堂でも、世間でもグ  
ヅッカ／＼した普通な人間ばかりぢや納らないものぢや。時には衲のやうな變テコな者が出てこ  
そ、青侍をも凹ませるぢやテ。それ以來武士共が圓福寺の雲水にや叮嚀に挨拶するやうになつ  
た。妙なものぢや。

#### 一四 八幡に植えた南天棒誓詞の松

臨濟和尚の栽松——松と運命を共にする——今は十五間餘に目通り七尺餘——釋  
迦より一年でも永く生きる——入定式は松に約束——老趙州のやつたやうに毎日  
行脚——圓福の風致の一つ——松も驚いてゐるぢやらう——人は願心がなくては  
駄目の皮——修行の大事に疑問を起させる

其の年(二十歳)の、アレは確か十一月頃のことぢやつたが、スト臨濟和尚の「巖谷に松を栽  
ゆ」と云ふ公案から思ひ付いて、衲も遠州へ行つた時は、奥山で半僧坊に誓を立て、來たが、草  
木の中でも松は昔から尊ばれて、十八公とも云はれる位ぢやから、衲も一つ松を手植えて、其  
の松と運命を共にしやうと。ソコで八幡の表の方の山から、松の芽生を一本引抜いて來て、丁度

本堂と聖僧堂即ち達磨堂との間に井戸がある、其の井戸の傍に栽えて、水を根に沃きながら誓つ  
て曰く、

「汝榮ゆれば我れ又た榮え、汝衰ふれば我れ又た衰へん。若し汝枯死すとも、我は八十歳に至  
る迄は必らず遷化せず。」

と。松も此の誓を無にせず、年々生育つて、今日では高さは十五間餘もあり、目通り七尺餘  
となつた。衲が松に八十の壽を誓つたのは、設し衲が修行未熟であつても、折角是れ、坊主とな  
つた以上は、是非とも親勝りの子となつて見たい。それにしても猶ほ釋迦に及ばずとも、年だけ  
は釋迦より一ケ年でも永く生きて、佛恩を報じやうと思ふた爲めぢや。人と云ふは妙なもので、  
斯のやうな誓を立てると、氣もシャキ／＼と丈夫になつて來て、病魔などは何處かへ逃けて行つ  
て仕舞ふ。又た一旦誓を立てた以上は、どこまでも實行せにやならぬ。誓と云ふは即ち約束のこ  
とぢや。すべて嘘を云はぬことぢや。ソレデ衲は二十歳の時の約束通り、今日日ではモウ八十二  
歳となつたが、松に約束があるから、八十歳の時チャンと入定式を行つた。どうぢや、なんと衲  
も心中男ぢやらう。アハ／＼／＼。

其の後とても、老趙州の遣つたやうに、是れ此の通り毎日行脚しとる。松も亦た約束を違へず、

青々と小氣味よく繁茂してをるわい。四五年前の大會の頃は「南天サンの松く」と云ふ評判で、今ぢや全く圓福の風致の一つとなつた。其のやうに松も青膏に抽で、高くなつたがサ、此の南天も随分と太つて、子孫が三千人からもあるぢや。松も驚いてゐるぢやらう。

それから明治四十四年頃、大阪の尼崎伊三郎や河内の岡田八右衛門や笹田莊重郎、それに山城の長村甚次郎の四名が施主となつて、松の根方を踏付けては不可ぬと、周圍にズツと玉垣を造つた。松もあゝなると立派ぢや。松の傍には小石が建つて、

「後人の標榜と成り、山門の風致と成る。」

と記してある。又た大正五年三月、八幡で大會があつた折、笹田莊重郎が誓詞松の碑を建てた。其の銘にサ、

「安政五年、南天之れを栽ゆ。誓詞空しからず、佛頂を踏斷す。毒露人に逼り、普く大千に濺ぐ。風に磨し雨に洗ふ、青葱龍に似たり。山門の境致、後昆の標榜。百世の蔭涼、伐ること勿れ折ること勿れ。」

とある。何んでも人は願心がなくては駄目の皮ぢや。願心即ち誓ぢや。「衆生無邊誓願度」なんと讀む癖に、實地は一向そこへ行つてをらん。何んと云ふ淺間しいことかサ。ぢやから世間の者

等から、修行の大事に疑問を起させるやうになるぢや。禪は何んでも實地に實行するのが目的ぢや。處で今時の人は物好から、一つ禪を遣つてみやうか位ぢやから駄目ぢや。俗人ならまだしも禪宗寺にけつかつて、禪坊主で候の何んのと云ひながら、座禪をするのを氣違ひか何んぞのやうに思ふてをる奴等があるぢやテ。イヤハヤ驚きますよ。禪は空理空論ぢやない、理窟禪なら學問でも好いが、さうでない。理窟禪はそれこそ邪禪ぢや。眞の禪は身體でやるのぢや。そでなけにや體得は出來ぬぞ。

何は兎まれ、松の今日あるは誓を無にせなんだ證據、衲の今日あるも亦た誓を實行したまでのことサ。

### 一五 掃部の首一つ宙に飛んで伊勢の勢義

櫻田騒動——伊勢の山田で大會——江戸から早馬——百姓一揆が彼方でも此方でも——まるで道中は戦國——三國一の達磨のお通り——竹槍で護送——生兵法大怪我の元——懷州の馬禾を喫すれば益州の牛腹脹る——井伊大老の妾

安政六年の春は彼の有名な櫻田騒動のあつた時ぢや。其の時伊勢の山田に中山寺と云ふ寺があるが、そこで大會が行はれた。衲は先驅となつて十日程も前から其の寺へ到着し、萬事を世話し

て、マ、大會も濟んで、愈々分散と云ふ日が丁度三月三日ぢや。此の日江戸ぢや當時天下の大老職井伊掃部頭が、水戸浪士の爲めに櫻田門外で切り殺された。時も時なりで、困つたのは納等ぢや。なぜと云へばサ、江戸から早馬が各國の城主へ飛んで、ごつた返してゐる。世の中が騒がしいのに付込んで、百姓一揆が彼方でも此方でも起らうとしてゐる。まるで道中は戦國の有様ぢやから、通行が中々むつかしい。坊主ぢや雲水ぢやと云ふても、何國かの間諜ではあるまいかと疑の眼を以て見るのと、又た一つには法度として嚴重に取締るのとで、八幡へ歸るのにはホト／＼閉口したよ。是りや何んでも彼等の膽を奪つてやるに限ると思つたから、

「是れ／＼三國一の達磨のお通り／＼。」

と云ひ振らして歩いた。ソレデ宿場々々では十人二十人の百姓共が、竹槍を持つて護衛する。併しサ、護衛と云ふても、今の大臣が巡查なんか護衛されるとは譯が違ふわい。マア體の好い科人の護送と云ふ體裁ぢやつたから遣切れん。それでも漸々萬苦を盡して八幡へ歸り着いた。

其の頃の雲水は皆な大兵ぢやつたから力も強かつた。衲もサ、二十一の血氣に満ちた年輩で、百姓なんぞ取つて投げる位のこととは違つたから、却つて餘計苦められた。生兵法大怪我の元ぢや。江戸で掃部の首一つ宙に飛んで、伊勢の端で坊主が難義するなどは、誠にハヤ不思議のやうぢや

が不思議でない。「懷州の馬禾を喫すれば、益州の牛腹脹る」なぞが手に入りや此の騒動のとなんかお茶の子ぢや。

それから序ぢやから云ふが、此の井伊大老の女小姓（即ち妾ぢや）を勤めてゐた竹内満知子と云ふ婦人が、後に衲の處へ參禪に来て、妙容大姉と云ふ大姉號を與へたが、是れも何んぞの因縁であらうかい。

一六 二十二歳にして蘇山の下で典座

廉州老師の初開堂——寶鑑國師の大遠諱——雪峰は到る處に典座——別名は雪峰寮——三役の中で重いもの——一々の鹽梅を自己が試むる——大衆の心事をも試め試むる——在家では奥座の仕事——此の實修行が大事——高深柏樹和尚と知る

九州豊後切畑の洞明寺に廉州和尚の初開堂があつたので、八幡から三十員の龍象を引率して、鷲王軒が騒喜せられた。最も此の會は三十座で、「無門關」の提唱ぢやつたが、其の後老師は臼杵の月桂寺の授會を終つて、杵築の養源寺で寶鑑國師の大遠諱があつたものぢやから、其の結制に拜請せられたので、衲は例に依つて先驅して諸般の準備もし、愈々役位茶禮となると、衲は典座を勤めることになつた。去年は八幡で典座の話で彼の青侍を囚ましたが、今日は是れ自分が其

の典座の役をするのぢや。昔、雪峰が篋籬木杓を持して、到る處に典座となつた。ぢやから典座寮のことを、一寸氣のきいた呼方をする者は、雪峰寮とも云ふぢや。此の役は三役の中にあつて重いものぢや。

「勅修清規」を見ると、

「典座の職は大衆の齋粥を典る。一切の供養、務めて清潔にするに有り。物料を調和し、局務を檢束し、常住を護惜して、暴殄することを得ず。」

と有る通り、典座とは一切の齋粥を司つて、大衆をして受用安樂ならしむるが要務ぢや。即ち一々の鹽梅を自己が試みる。只だ粥飯ばかりぢやない、又た一山大衆の心事をも舐め試むる。ぢやから大切な役ぢや。それから萬事を奢らぬやう、無駄にならぬやう、と云ふて又た吝嗇にならぬやうにするぢや。設へ一粒の米でも、百姓が是れ六十何手と云ふ手数を掛けて、初めて人の心身を養ふまでになつたのぢや。それを亂りに焦したり腐らしたりするは、只管不經濟なるのみならず、又た自己の徳を損ふものぢや。嗜まなくてはならぬ。在家で云へば丁度奥さん達の仕事に當つてをる。此の實修行を経なくてはならぬから、昔から皆な遣つて來たものぢや。瀧山は百丈の下で典座し、漸源は道吾の下で典座し、雪峰は各處で典座した。今ま南天棒は二十二歳にし

て蘇山の下で典座ぢや。一杓の粥飯も亂りにはせなんだぞ。

それから此の大會に高津柏樹和尚が掛錫してをつて、意氣相投するので自然近しくなつた。高津も苦勞したものぢや。納より二歳年長ぢやが、中々丈夫ぢや。併し耳が遠くなつて室内が聴けぬさうぢや、人天の爲めに惜しいことぢや。納等の修行のしつぷりを知つてをるものは、今ぢや高津と此の南天棒との外にはない。此の養徳寺の雨安居百日間には、随分共に身命を碎いた。

### 一七 溪川の中へどんぶり

溪兄と遊方——洞山初と僧との問答——評判の阿波の鬼文靜——機鋒峻——丸木橋の上へ來ると——雲門の「東山水上行」——水源は作麼生——首ツ玉をケツと捉へ即今看よく——溪兄はアツブ——水上は是、水底作麼生——三週間通參する——口科が廻らぬので行鉢

養徳會の後に、京都花園妙心寺山内の文涙と云ふ者と一處に少し遊方した。此の遊方も只の遊びぢやない、此の中にも矢ッ張り修行事は怠らぬぢや。

昔、洞山守初禪師に僧が問ふた、

「雲水是れ人遊、是れ甚麼人能く峰頂頭に到る。」

と。洞山が答へて云ふのに、

「無足の人能く行き、無手の人能く執る。」

と。サー是れぢや。

ソコで溟兄と一處に豊後の浦部へ行き、日本三文殊の一なる文殊堂に参詣してサ、會つて石應  
 老大師より傳授せられた法華懺法三昧を一週間修して修行了畢を祈り、それから豊前へ廻つて宇  
 佐八幡宮に参詣した。處が同處には兼て江湖で評判の阿波の鬼文靜が居ると云ふことを聞いて、  
 同師を庵寺の永福寺に訪ふたぢや。此の文靜和尚は本名を懶翁和尚と云ふて、中々機鋒の峻峻な  
 人であつた。此の時柏樹サンも文靜に参じてをつた。

或日文靜和尚の處を辭して、溟兄と共に八幡へ歸らうとした途中よ。丁度半里程も來たと思ふ  
 處に溪川があつた。丸太が二本並べて掛けてある。今時の坊サマのやうに、汽車で巻煙草を喫し、  
 婦人雜誌を讀みながら旅行するとは違つて、衲等が雲水時代は、竹の網代等に甲掛脚絆の草鞋穿  
 きと云ふ扮装。ソレで行住坐臥、工夫三昧ぢやつたから、今しも此の溪川の流に架した橋の上  
 まで來ると、溟兄の奴、雲門の「東山水上行」でも見たのか、後方の方から、  
 「忠ソ〜。」

と、衲を呼ぶぢやないか。衲が、

「何んぢやい。」

と返事をするよ、溟兄が直に、

「此の溪川の水源は作麼生。」

と吐いたから、衲は後方を振り返り見ながら、溟兄の首ツ玉をグツと捉へて大喝一聲、

「即今看よ〜。」

と、袈裟文庫を掛けた儘の溟兄をサ、其の溪川の中へどんぶりこと投げ込んだ。溟兄がアツプ  
 〴〵やつてゐる間に、衲は文靜和尚の室へ取つて返して見解を呈したら、和尚が、

「忠兄の此の活機用は古人にも勝つたものぢや。併し溟兄は如何かナ、別條なからうか。」

と氣遣はれるので、衲は、

「ナニ、大丈夫ですよ。今に此處へ來ます。」

と云つてをる處へ、果して溟兄がツブ濡れになつて歸つた來たが、直に入室して「東山水上行」  
 をやつた。文靜が、

「水上は是、水底作麼生。」



と出ると、涙兄は言下に機を呈して遂に透過した。涙兄は後に衲に向つて、  
「貴公のお蔭で我が迷雲を打破することが出来た。」  
と大歡喜した。

それから三週の間、文靜の室へ通參したが、なにせい口科が廻らぬものぢやから、近郷近在へ出て行鉢して僅かに飢を凌ぎ、樹下石上の工夫を積んだが、一應八幡へ歸ることにして、涙兄と共に山城へ歸錫した。

### 一八 關山國師の五百遠年諱

遠諱に二度逢ふことは少い——前には雲衲後には師家——大導師は蘇山老漢——  
羅山和尚の知客寮頭の下で知隨——賓客に關する責任——賓主の見分の付くもの  
——役中に役を體得せねば嘘——雪竇と韓大伯との問答——臨濟の宗風の正しい  
のは知客寮の力

一代の中に關山の遠諱に二度逢ふと云ふのは誠に少いことぢや。それも遠い山奥にでもすつこ  
んで餘世を保つと云ふやうなことならばぢやがサ、衲は二十二と七十一との兩度ぢや。前たは血  
氣盛んに修行盛んな雲衲時代で、八幡から先驅して登り、後には師家となつて雲衲を打出した。

關山の五百遠年諱の大導師は鶯王軒蘇山老漢で、「臨濟錄」を提唱せられた。七日間の會ぢやつ  
たが中々盛んで、四來の雲衲は千餘員ぢやつた。其の時羅山和尚が知客寮頭ぢやつた。チンと引  
締つてゐた。衲は其の下で知隨をやつた。此の知客と云ふは賓客を司る職ぢや。凡て官員、檀  
越、尊宿、名徳の士等が來山すると、それを夫々に案内して茶菓を供し管侍する役ぢや。即ち方丈  
へ通すべき者は通しサ、應接室へ通すべきは應接室へ通す。ぢやから總べて賓客に關する責任は  
悉く此の寮にあるぢや。賓主の見分の付く者ぢやないと不可ぬ。矢ッ張り三役の中にあつて重い  
役ぢや。是れも役中に役を體得せねば嘘ぢや。

昔、雪竇重顯和尚が大陽警玄和尚の會中で知客を勤めてゐた。スルト或日一人の客が有つて、  
共に「趙州栢樹子」の話を論じた。其の時韓大伯と云か者が傍に有つて失笑した。ソコデ客の歸  
つた後に、雪竇が韓大伯に向つて、

「何故今ま笑ふたのか。」

と問ふと、韓大伯は、

「知客の智眼未だ正しからず、法を擇ぶこと明かならざるを笑ふたのぢや。」  
と答へた。雪竇が、

「そんなら趙州の意作麼生。」  
 と云ふと、韓大伯が即ち頌して答へたのに、  
 「一兔身を横へて古路に當る、蒼鷹一見して便ち生擒す。後來獵犬靈驗無し、空しく枯椿の舊處に向つて尋ぬ。」  
 と。知客もうつかりかんで出来ぬぢやテ。一會の大事は知客寮にある。是れには司法權もあれば行政權もあるから、老大師でも知客寮を動かすことは出来ぬものぢや。臨濟宗の宗風の正しいのは、全く知客寮の力ぢや。禪宗坊主でも諸官省の人でも、此の知客を會得せにや日用上役に立たぬぞ。

一九 首山綱宗の如きは作麼生

自分ながら修行が進まぬ——蘇山老漢の代りに惟庵さん——參學の師を更へて見やう——皆な是れ盲目の河渡り——梅林寺の羅山老師——八幡僧堂を暫暇する——少しも滯碍はない——黃龍の三關——三關共に透過——擧し來れば踏を以て報ず——首山綱宗には行き詰つた——公案は鐵砲玉の様なもの——始めて好女兒か見出す——是れ又た大難々々

大阪の法雲寺に八幡の會下で移があつたが、それは衲が廿二歳の雪安居ぢやつた。春間解制分散して歸錫したが、どうも此の頃は自分ながら修行が進まぬやうに感じてゐる處へ、蘇山老漢は尾州侯の專請に依り、德源寺を開創して其寺の開山となり、後には惟庵さんが出る事となつたら、自分も一つ參學の師を更へて見んと、一夜打坐して思念し、日本全國を隅から隅迄、一々指を屈して數へ來つて見ても、我が師と頼むべき者は見當らない。皆な是れ盲目の河渡りぢや。諸々に門戸は張つてをるが、五月の鯉職で口先計りの體は空つほぢや。唯だ聞く處に依ると、筑後久留米の梅林寺を董せられる含輝室羅山老師は、實に古今獨歩、進止活脫の師家にして、接衆自在ぢやと。それに大本山の遠諱の時、同寮の因縁もある。如かじ速かに同師に就いて道を修せんにはと。ソコで俄かに八幡の僧堂に暫暇を請ふて、道中傍眼も振らず筑後へと志し、直に梅林寺へ掛包した。

先づ含輝室（羅山和尚の室號）に入つて所見解を呈した。羅山老師は「無門關」に就いて、古人の請訛因縁、向上の些子を詰問せられたが、衲は一々是れに應對して、少しも滯碍はなかつた。スルト羅山老師は更に「黃龍の三關」に就いて衲を試みた。此の三關は中々難則ぢや。實にハヤ黃龍は禪七宗の一つで、「擧し來れば踏を以つて報ず」と云ふて、向ふ一倍の宗旨ぢやから、うつ

かりしやうものならばサ、命を取られるぢや。

羅山老漢が、

「我が手、佛手と何似れ。」

と出たが、それは此處で話すやうなものぢやない。其の言機と、出す手とに、深甚な妙用があるぢや。是れは何んの苦もなく透つたがサ、透つたと云ふばかりぢや解らぬかも知れぬ。強ひて納の室内の所解を、假りに句を以つて云はうぞならば、第一關の「我が手、佛手と何似れ。」と云ふに對して、

「自ら瓶を携へて去つて村酒を沽ひ。」

と云ふたちや。此の問は向上關ぢや、向上に捉れてはならぬぞ。

羅山老漢は更に第二關の、

「我が脚、驢脚と何似れ。」

と切り込んで來た。是りや此れ向下門ぢや。納は、

「却り來つて衫を着て主人と爲る。」

と答つた。

羅山老漢、又た第三關の、

「人人箇の生縁有り。」

と出られたが、幸に是れをも透ると、羅山老漢、

「それならば、首山綱宗の如きは作麼生。」

と。是れには納も行き詰つたわい。低頭して歸堂し、如何がなしてと工夫三昧ぢや。古人も云ふた、「大悟七遍、小悟數回」と。納も是れ、幾數回となく、小悟も遣り大悟も遣つたがサ、此の「綱宗」には東疑西疑が出て來たので、中々肯心自ら許すと云ふ點が見えぬ。畢竟公案は鐵砲玉のやうなものぢやテ。一發で命を取ることもありサ、重傷で三四日も間を措いて死ぬのもありサ、それかと云ふと又た三四年も掛つて死ぬのものもある。工夫も其れと同じぢや。納は此の綱宗に就いて、羅山老漢の室へ入つても、何んだか老漢に、「そら見ろ、自己が自點胸でえらばつても、斯んなことが透らぬか」と云はれるやうな氣持かして、冷汗ダラ／＼ぢや。遂に寢食共に廢して、初めて巧女兒を見出した。實に也太奇々々々。暗夜に燈火を得た心持ちや。早速含鉢室を叩いて呈すると、老漢も喜ばれて更に、

「拙郎君は如何ぢや。」

と、是れ又大難々々

二〇 井桁へ養子を敷いて坐り込んだ

坐らぬ奴は腹が出来ぬ——動靜の二途——趙州の示衆——聖一國師の誓言——石の上に坐したが眠くなる——眠らずに工夫する方法——慈明の錐に二祖の雪坐——優陀延王の故事——大評判の底無し井戸——每晚解定後から天曉迄——意氣倍々軒昂——井戸のお蔭で綱宗も透る——龍淵さんがこりやいかん／＼と逃出す——こんなことはお茶の子

何んでも坐らぬ奴は腹が出来ぬぢや。坐には動靜の二途があるが、先づ初めの中は坐るが一番好い。一切の議論や理窟を取つて退けて、天地の奥義に達するのは坐ぢや。

趙州も學徒に示して、

「理を究めて坐すること十年、會せざる者は老僧の頭を截り去れ。」  
と坐を勸めてをる。

又た聖一國師も云ふのに、

「參禪若し日を刻して功を成さんと要せば、千尺の井の底に落ちたるが如し。朝より暮に到り、

暮より朝に至るまで、千萬の思案分別、偏に只だ此の井を出でんことを求むる心のみにして、更に二念なし、誠に此くの如くに工夫を爲さば、或は三日或は五日或は七日、若し徹せずんば、老僧今日大妄語戒を犯して、永く拔舌地獄に墮ちん。」  
と誓はれた。

納も是れ、本師に、「必らず一方の宗匠になる」と誓ふて、襖子を負ふて出た以上は、なんでも通徹せねば措かぬと一心に工夫して、有馬家の廟處の石の上にも坐したが、どうも眠くなつて不可ん。眠らずに工夫する方法はないか。慈明の錐や二祖の雪坐も好いが、是れも慣れると駄目ぢや。効驗が無い。

處が世尊が無常を説きに説法の中に、優陀延王の故事がある。それは如何あらうぞならば、一人の者が野火に逢ひ、而も狂象に逐はれて逃げ場がない。スルト丁度一つの野井戸があつて、其の縁の處から藤の蔓が井戸の中に下つてをる。是れ幸ひと其の蔓に縋つて攀ち降り、漸く狂象の難を免れたが、フト井戸の中を見ると、三疋の大蛇が大きな口を開いて、落ちて來たら一呑みにせんと待構へてをる。又た仰いで自分の命の綱とする藤を見れば、這は什麼に、白と黒との野鼠が、代る／＼其の根を嚙つてをる。そればかりぢやない、井戸の四方には四つの毒蛇が、觸らば

呑まんとする。實にハヤ寒毛豎立ちやが、只だく藤の根元の處に巢を喰ふた蜜蜂があつて、僅か一滴か二滴かの蜜が、何時の間にか口中に入り、其の蜜の甘味に依つて、上下四方の苦を忘れてをると、斯う説いてある。是れは「心地觀經」に出てをる。

ソコデ不圖思ひ出したのは、井戸の上の坐禪ぢや。井戸の上は眠を防ぐ唯一の場處ぢや。諸々、千尺井頭に端坐せんと、早速梅林寺に在る井戸の上に寶の子を渡して、其の上に坐り込んだものぢや。此の井戸は底無し井戸と云ふて大評判の井戸ぢや。古來から梅林の井戸へ落した櫃の蓋は、水天宮の海へ出ると云はれてをる位ぢや。毎晩解定後は此の井戸の上に坐して天曉まで遣つた。能くしたもので、少つとも眠くならんわい。意氣倍々軒昂、天を衝くと云ふ勢ひぢや。衲等は修行盛りに能く不眠不休を遣つたものぢや。身體も丈夫ぢやつたが、矢ッ張り其の勇猛心が身體をも丈夫にするのぢや。ソコデ井戸のお蔭で首尾よく「首山綱宗」も透つた。

梅林寺では今でも其の井戸を使用してをるぢや。大正六年の暮のことぢやつたが、衲が大會の拜請に行つた時、井戸の話が出たがサ、兩三年前に井戸替をやつてみたさうぢや、市でも蒸汽ボンプを二臺程掛けて漸く水を干したが、干し切れぬとのちやつた。併し少水の中に底の掃除をしたら、長さ四間位の竹竿が何本も出たといふ話ぢや。上の方の口は五尺渡し位ぢやが、下の方

は途方もなく廣いさうな、海へ續いてゐると云ふも全く無理はない。

衲が井戸の上で坐ると云ふことが、誰れ云ふともなく知れ渡ると、後に天龍の管長になつた龍淵さんが、

「ドリヤ衲も坐つてみやう。」

と云つて、井戸の上へ上つたが、十分と坐らぬ中に、

「コリヤ不可んく。」

と、遂とう逃げ出して仕舞つた。

井戸の上へ坐るなどは氣違ひ染みたやうぢやが、眞箇に徹底しやうと思へば、斯んなことは未だく朝飯前の茶の子ぢやわい。

## 二 「牛過窓」には泣いたく

再び鬼文靜を叩く——白隱の奪命の神符——八難透——大燈の骨折り——佛光の處で透つても大應では透らぬ——自惚と瘡氣——何度アツ打かれたか——此の穀潰しめと怒鳴らる——此の牛では自分から泣くよ——「光明寂照遍沙河」でも苦んだ——酔でも寃病でも行かぬ——一つも不自由はない

梅林に在つても春間と秋間とは羅山老大師の許可を得て、例の鬼文靜の處へ参叩した。前にも云ふたが、文靜老漢の處は貧地ぢやから、其の下寺の戒光院を借りて、相變らず晝は托鉢し、夜間一心に奮勵した。種々の機用を透過したが、白隱の奪命の神符とも云ふべき八難透の中の「牛過窓櫺」には随分と苦んで、イヤ泣いた。三十棒どころかい、六十棒も百二十棒も喰つた。大燈も此の則では骨折られたものぢや。最初佛光の下で一段休歇を得たがサ、其の後大燈の處へ行つて入室した。處が佛光の許で透つた牛が、大燈では透らぬぢやないか。大燈中々手元が確乎して居る。

「牛、窓櫺を過ぐ。頭角四諦全く出づ。尾巴何んに依つてか出づるを得ざる。備試みに一轉語を下し看よ。」

と。ソコデ大燈は、

「曲心已に露る。」

とやつた。大燈は、

「如何なるか是れ曲心。」

と問ひ返すと、大燈は、

「天を柱へ地を柱ふ。」

と云ふたので、大燈が大笑して、

「エーそのなりかばねであらうぞならば、他日後悔する時があるぞ。」

と、警束を加へられた。それから三日過ぎて後、大燈が下語して、

「杓木、虚聲を聴く。」

と云ふた。スルト大燈は、

「乃ち方に相似たることを得たり。」

と云ふた。是れでは似たは似たが、まだ真箇ぢやないと云ふのぢや。古人の苦心も一通りや二通りぢやないぞ。

ソコデ自分にも少しく慢心が萌したのぢやつたと後では思ふがサ、其の頃は今と違つて、身命を堵して遣る人も多かつたが、それでも難行苦行ぢや納が一番骨折つて、而も大悟數番小悟數番と云ふので、自分では慢心する念はない積りぢやが、矢ッ張り有るぢやテ。自惚と瘡氣のないものはないと云ふが、全く其の通りで、「牛過窓櫺」ぢや何度文靜にブツ打かれたか。そして、「汝は水源で文涙を河の中へ打ち込んだぢやないか。それが透つて牛が透らぬのか。此の殺漬

し奴しぬ」  
と、怒鳴どなれもした。今でも思ひ出すとゾツとする。「無門關むもんかん」の提唱ていしょうをする毎ごとに、此の「牛うし」では自分から泣くよ。

それから八難透はつなんとうの前に、「光明寂照遍沙河くわうめいじやくしやくへんさか」でも苦んだ。是りや雲門うんもんと僧そうとの問話もんわぢやがサ、納なも「光明寂照くわうめいじやくしやくしやく」を文靜もんじやうに問ふたら、素知そしらぬ顔かほをして居ゐつた。中々なか容易よゆうではなかつた。雲門うんもんならば、

「豈あやに是れ張拙秀才ちやうせつしやうさいが語ごにあらずや。」

と云ふぢやらう。が文靜もんじやう、中々なか醉すでも莧弱こんじやくでも行くものぢやない。實じつにハヤ大難だなん々々くく。此の則すなはてを手に入れて、初めて、

「道いひ得とるも南天棒なんてんぼう、道いひ得とざるも南天棒なんてんぼう。」

と云ふことが徹底ていてきした。「白雲未在はくうんみざい」も是れで透とり、「南泉如夢相似なんせんじゆめうしじ」も是れで透とり、「首山竹篋しゆざんちやくせつ」も全く自由じゆうになつた。自由じゆうの天地てんちに居ゐるから、一つも不自由ふじゆうはない。只ただでさへ人の二人前位にんまへぐらゐは働はたらくのに、這箇しやんの淵源えんげんに透徹とうちやくしたものぢやから、一層いちじやう働はたらけたよ。

### 二二 作務さむても人に負けるのが大嫌おほいい

羅山和尚らざんじやうの名聲なみせう——常在じやうざいの雲納うんな百二十八人——一騎當千いちきとうせんの將校計り——納程なぢやうの仕事しごとをする者は一人もない——十二把じふにの薪きんを荷かつて往復わうふく六里りく——太おほさ尺せき二寸長にすんちやうさ九尺くせき的天秤棒てんてんばう——這箇しやんの一棒いちぼうは南山なんざんの大蟲だいじゆう——使つかひ手がなくてゴロく——且過かつ寮りやうの床柱とこぢゆう——肩かたでは遣つからぬよ

納なが梅林ばいりんに居ゐつた頃は、羅山和尚らざんじやうの室内しつない、孤危嶮峻こきけんしんなと云ふ評判へいぱんから、四來しらいの雲納うんな、實じつにハヤ雲うんの如ごとくに集あつて來きて、常在じやうざい百二十八人ひやくにじはちにんも居ゐつた。現今天下いまてんかの僧堂そうだうで百人以上ひやくにじゆうにん居ゐる處ところはない。此こゝの百人以上ひやくにじゆうにんの者が皆みなな一ツ角いっさくかくの納子なつすぢや、そんじよそこらのデモ坊主ぼくしゆぢやない。熟じゆれも師家しけの一人ひとりや二人ふたりは打たき上あげて來きたものばかりぢやから堪たまない。羅山和尚らざんじやうは新到しんたうには直ちやくに數番すうばんの古刊こかん公案こうあんを浴あびせ掛けてサ、それがスラくと透とると、更さらに一轉いちてんして、

「此これは是れ古人底こじんてい、即今全忠底そくこんぜんちゆうてい作麼生さつまさん。速すみかに道いへく。」

と云ふやうに出いて來きるぢや。それを打ち抜ぬく底ていの者ものでないと掛包かぼうは出來きぬ。ぢやから梅林ばいりんの雲納うんなは、皆みなな一騎當千いちきとうせんの將校しやうがうばかりぢや、カタフタも雜兵ざひやうはない。中なかでも納なはきかぬ氣きぢやつたから、修行しゆぎやうでも作務さむでも、人ひとに負まけるのが大嫌おほいひぢや。それぢやから百二十八ひやくにじはちの中なかも、納程なぢやうの仕し

事をする者は一人も無かつた。山作務があると山へ登つて一日働いて、太さは尺二寸もあるが、長さ九尺の生木の天秤棒で以つてからに、十二把の薪を擔つて得々として歸つて來るのが自慢ちやつた。それも半里や一里の處ならばちやが、往復六里もあるかネ。馬でさへ十六把しか付けない。ちやから納の十二把には大衆は皆な驚いたネ、其の時擔つた天秤棒には、納が梅林寺を暫暇する時、一句書した。

「這箇の棒は南山の大蟲、自用不盡、搬柴一棒なり。即今一生自受用底の活漢に附屬す。慶應元年乙丑孟春。」

と。南山とは梅林寺の山號を江南山と云ふからちや。其の後其の天秤棒は永らくゴロ／＼して居つたが、是れを天秤棒にして擔ふ程の坊主は、一人も出て來なかつたさうちや。矢ッ張り大會の拜請に行つた時、隨行の東京道林寺の亮卿が、現今の梅林住職東睦和尚に向つて、

「彼の天秤棒は如何したか。」

と尋ねたら、且過寮の床柱にしてあると云ふことちやつた。兎に角五十八年も前のことちや。梅林も今度の改築で如何したかさ、保存するとは云ふて居つたが。此の柴作務もサ、納は肩では遣らぬ、是りや入いに仔細があるちや、別傳授ちや、只では不可ぬぞ。今の坊主共は肩で計り

くものちやから、人並にも行けぬちやチ。

### 二三 汝は日本の黄檗ちや

母の十七回忌——黄檗の母——出家した子を慕ふて盲目——雲水を接待して其の脚を洗ふ——二度とも瘤のない方の脚——名乗らずに立ち去る——母は狂氣の如く跡を追ふ——福清渡の別離——「我が母多年自心に迷ふ」——焰の中の母の昇天——禪宗の引導の始め——十七年目で初めて母に眞孝——土産には父の法號

納の母は納が七ツの歳に死んだのちや。今年は丁度其の母の十七年忌に當るので、一度は母の墓所に參詣して、眞に母を引導しやうと思ふた。

是れは支那の昔話ちやがサ。彼の黄檗の母は出家した我が子を慕ふて、眼も泣き潰して仕舞ふた。併し眼は見えなくとも、一度我が子の聲など聞かんものと、子を尋ねるために常に雲水の投宿點心を接待して、其の雲水の脚を洗ふことを例とした。何故と云へばサ、黄檗には脚に瘤があつたものちやから、ソレデ瘤のあるのが我が子ちやと云ふ處で、それを見出すために洗脚の事をしたのちや。母の恩愛と云ふものは海山ちや。黄檗は二十年目で故郷へ歸つた。納は十一の時出家して、十三年目の歸國ちや。



サ一黄檗が戻つて来ても、母は眼の見えぬ悲しさ、日頃尋ぬる我が子とは夢更知らずサ、例の通り足を洗ふと、流石は黄檗ぢや、母が洗脚するのは我を尋ねる手段ぢやと思ふたから、二度とも痛のない方の脚を出して洗はせた。ソレデ母は氣が付かぬ。あゝ是れも我が子ではない、何時になつたら我が子に逢へることかと思ふたぢやらう。併し黄檗は、今茲で名乗れば母は喜ぶぢやらが、恩愛の絆に纏ると思ふものぢやから、とう／＼名乗らずに立去つた。

スルト隣人が黄檗を見て、斯くと母に告げたので、母は聞くと等しく狂氣の如くなつてサ、まるで駒澤次郎左衛門の跡を追ふた朝顔のやうに、倒けつ轉びつ、黄檗の跡を追ふて福清と云ふ渡し場の處まで来ると、モウ黄檗は船に乗つて河の中流へ漕ぎ出てをる。それに日も暮れかゝつて近邊は薄暗い。ソコデ母は岸頭に立つて、

「黄檗えのう、黄檗えのう。」

と、聲を限りに夢中になつて叫んだが、船は益々遠退いて行く。母は續いて、

「其の船返せ、其の船返せ。」

と、身をもんで焦慮る拍子に、岸から轉がつて遂に水の中へ陥つた。

黄檗は遠眼に之れを見たものぢやから、急ぎ船を返してサ、炬火を取つて水中を見ると、憐れ

にも母は溺死してをる。ソコデ黄檗は叫んで云ふのに、

「一子出家すれば九族天に生ずと。若し然らずんば諸佛の妄語。」

と、尙ほ偈を擧して、

「我が母多年自心に迷ふ、如今華開く菩提林。當に來つて三會に相値ふ若し、歸命大悲觀世音。喝。」

と大喝して、炬を擲つた。スルト其の焰の中に、母が昇天する姿が見えたと云ふことぢや。是れが禪宗の引導の始めぢや。

納はサ、母を慕ふて出家したのぢやが、今十七年目で初めて全く母に眞孝の出来る時に到つたから、羅山老漢に事の由を語ると、老漢も速座に承諾せられた。ソコデ八月七日の正當に唐津へ行き、「壽昌院秋月智光大師」の追福會を營んだ。其の時の土産に父の法號を羅山老漢に請ふと、老漢は直に筆を執つて、「從心院惟則道和居士」と安名せられた。父の俗名は鹽田壽兵衛惟和と云ふて、小笠原佐渡守の藩士だつたから、ソレデ「惟和」の二字を法名の中へ配せられたのぢや。母を引導する話を羅山老漢に述べると、老漢は、

「誠に奇特なことぢや。それでこそ眞の出家兒ぢやぞ。汝は日本の黄檗ぢや。」

と云ふて褒めてくれた。

二四 あんな心持の好い事はなかつた

酒が酒を飲む——本職の印可よりは酒の方が先き——草鞋の儘で隠察へ——一升餘入る小摺鉢を盃——イヤ甘露々々——「サー納が注いでやる」——今ま一杯と出したら——「モウそれで好からう」——印可の證に又た一杯——五升餘も飲んだちやらう

酒が酒を飲むと云ふが實際ぢや。納は酒では早く羅山和尚に印可せられた。本職の印可よりも酒の方が一寸先きぢやつた。山作務で空腹を抱へて十二把の薪を擔つて歸つて來ると、それを薪部屋へ投げ込んでサ、草鞋の儘で隠察（羅山大師の居間）へ行つて、侍者に、是れが居るかと思指を示すと、侍者が、

「ウーン。」

と頷く。ソコデ小さい聲で、

「酒があるか。」

と聞くと、

「ある。」

と云ふぢやないか。占めたツ。

「そんなら一杯呉れ。」

と云ふても、別に盃にするものがないので、侍者がキョト〜搜し廻つてをる。フト納の目に付いたのは、毎朝大師に差上げる味噌を摺る小摺鉢ぢや。

「一寸其の摺鉢を。」

と云ふて侍者から受取り、

「サー是れへ一杯。」

とやつた。侍者の奴も、納の酒好を知つとるから、一杯なみ〜と注いでくれた。一寸一升の餘も入るぢやらう。其の一杯を一息にグーと飲んだ。イヤ甘露々々。實にハヤうまかつたの何んのと話にならぬ。今日でも彼の味は別ぢやと思ふ。

「モウ一杯。」

と云ふて侍者に注がせやうとすると、襖一重の奥で、

「誰れか〜。」

と問はれるのは羅山和尚ちや。侍者も餘儀なく、

「忠座です。」

と答へた。

「ウン、忠座か。」

と、和尚が襖を開けて出られて、

「今日は山作務か。御苦勞ぢやつたのう。サー納が注いでやる。」

と云はれるので、向ふ鉢巻を取つて、今の小指鉢巻を出すと、一杯注いで呉れた。納がキューと飲み干すと、

「うまさうぢやなア。」

と云はれて、又た一杯注いで呉れた。是れもキューと飲んでサ、酒は三献にして其の味を利くと、今ま一杯と出したら、羅山老師が、

「モウそれで好からう。」

と、遂に酒だけは印可になつた。ソコデ印可の證に又た一杯平けて、足も亂さず隠寮から歸つて来たが、あんな心持の好い事はなかつた。ソーサ、皆なで五升餘も飲んだぢやらうよ。「大杯」

と云ふ芝居へ出て来る馬場三郎兵衛かい。アツハ〜〜〜。

### 二五 六年間横に寝た事がない

二十四歳の臘八接心——納が一代の奮闘——六尺の形骸も何になるものか——眠くなる竹筥で打つて〜打つ抜く——此のタコは睡り除けの爲め——刻苦大なれば光明必ず盛大——願心凝つては黒鐵の如く——最後の一決を残す他皆な透過——度生爲人の大事は山上命ほ山

納が二十四の歳の臘八接心は、納が一代の奮闘ぢやつた。納は本師に哀願して行脚に出る時にも誓つた位ぢやから、少しの油断もせぬが、十九の時遠州奥山の半僧坊で生きた警策を目撃してからは、一層願心を強うした。坊主となつて徒に信施を食れば、あの通りの呵責に逢ふ。實にハヤ闍王面前、飯錢を索はるゝこと疑ないから、何んでも大事了畢せねば措かぬ。然もなければ、この六尺の形骸も何んになるものかと、勇猛精進、寢食を廢することも度々であつた。夜と云ふ夜は解定を待つて、獨り蒲團を携へて開山塔や葦原の静閑の地に端坐しサ、又た久留米に来て以來は、例の井柙の上に坐し、毎朝暁の鐘を聞いて歸單した。春夏秋冬、四、九の掃除の日も作務の日も、一日一夜も缺したことがない。ぢやから納は十九から六年間、横に寝たことはないぢや。

眠くなる竹篋で打つてく、打ち抜くので、血の出ることが度々ある。とうとうそれが固つてタコになつた。其の證は是れぢや。左の手が主に左様なつてをる。擊劍家が衲の手を見て、若い時劍道を勉強したと思ふて問ふ人もあるぢや。衲は擊劍も嫌ひぢやないが、此のタコは全く睡り除けのためぢや。昔、慈明は股に錐を刺した。刻苦大なれば光明必らず盛大なりと思ふたから遣つたのぢや。

平時でさへそれぢやもの、臘八など來たら一層猛烈ぢやつた。丁度文久三年の臘八が、其中での猛烈さであつた。衲もサ是れ、江湖に出てからも六年と云ふ歳月を、禪堂生活に暮して居りながら、未だ羅山の關鎖を打破し得ないのは、頗る膺甲斐ないことぢやと、深く心肝に徹し、願心凝つては黒鐵の如く、刻苦に刻苦を重ね、入室に入室を重ねて、遂に此の會に、最後の一決を踐す外皆な透過し終つた。誠に佛天も我が願心を憐れみ給ひしか。蔡州城を打破し、吳元濟を殺却し還る底の意氣で成道會を濟した。正に是れ二十四歳の暮ぢや。さて是れからが悟後の眞の修行ぢや。度生爲人の大事は山上尙ほ山在りぢや。

二六 鯉や鮒と一處に入浴

始めての終り——加摩浦の東光寺に一華さんの大會——途中の大雪——由布ヶ嶽の温泉——是れは何んぢやいと手に觸つてみると——鼻を擗へて入浴——魚が人眞似か人が魚眞似か——魚熱湯に遊ぶ時如何と驗主問——實に奇々妙々——衲も一首やつた

行脚中には種々變つたともあるが、鯉や鮒と一處に入浴したのは、始めての終りぢやわい。一體なら手づらまへて料理してやるがサ、衲は生來魚肉が嫌ひぢやから、彼等に引導してやらなんだが、同浴の勝縁で鯉魚上天したぢや。

衲が廿五歳の正月ぢやつた。一華さんの大會が豊後加摩浦の東光寺にあるので、正月二日に先驅の爲め行くことになつて、丸龜の惠範と京都の惠純と連立つて三人、久留米を出立して東光寺へ向つた。處が途中大雪でサ、腰どころか臍の處までも埋る。イヤ本當ぢや。それに大風で、笠も何も吹捲き上げられて仕舞ふた。斯様な難義の上に、豊後第一の高山と云ふ由布ヶ嶽を越えるのぢや。雪は益々降り頻る。モウ一步も足が運ばれんので、由布ヶ嶽の字竹本と云ふ處の佛山寺へ投宿することにした。

スルト其の寺の隣に天然の温泉があると云ふので、足休めと寒さ凌ぎの爲めに、温泉へ行つてみると、妙なことには、人でもない變テコなものが湯槽の中にをるぢやないか。小氣味悪くは思

つたが、平氣で入つてをる人もあるので、衲も入ると、今の不思議なものが、衲の身體に觸れて來るんぢや。是れは何んぢやいと手に觸つてみると、驚いたよ、それが大きな鯉や鮒サ。

此奴等、人に馴れてるとみえて、人と同じやうに鼻を揃えて入浴してをるぢや。人が見ると、魚が人の眞似をするやうぢやが、魚の方からは、人が魚の眞似をすると思ふてをるぢやらう。天井を傳る蟻を人が見れば、逆に歩くと思ふが、蟻の方では又た、下に人間が逆に歩くと思ふのと同じぢや。温泉は人間の入るものか、魚の入るものかサ。是れも難透々々。

ソコで衲が惠範に、

「魚、熱湯に遊ぶ時如何。」

と、驗主問にやつたが、答はなかつた。惠範は逃けくさつた。

それにしても、冷たい水ぢやない、寒さを忘れる程の熱い湯ぢやのに、人と同じやうに其の中を泳いでをる。まるで人を友達のやうに思ふて、手足や股倉へ體を擦り付けて來るぢや。掬ふが擲へやうがびくともせぬ。實にハヤ奇々妙々ぢや。西行ならば、

西行も幾瀬の旅もしてみたが

鯉と共湯は是れが始めて

とでも云ふぢらやうが、衲も一首やつたぢや。

住みぬれば娑婆も淨土もなかりけり

由布ヶ嶽の谷川の鮒

此の珍妙の湯のお蔭で、旅の苦勞も一笑になつた。僅かな里程ぢやが、雪や風の爲めに五日間掛つて東光寺へ着いた。

とでも云ふぢらやうが、衲も一首やつたぢや。

住みぬれば娑婆も淨土もなかりけり

由布ヶ嶽の谷川の鮒

此の珍妙の湯のお蔭で、旅の苦勞も一笑になつた。僅かな里程ぢやが、雪や風の爲めに五日間掛つて東光寺へ着いた。

二七 昔にも魚に就いての問答がある

香林の答話——智門の答話——隋の答話——平常其の心掛がないから駄目——  
風穴の答話——僧堂生活も寺持にたいたい爲め——此の大會では典座寮頭——我儘な大衆——冷飯と追焚——恐ろしい焦付き飯——先づ自己を明める——本職を捨てゝやるとはヒョンなものよ

今の鯉や鮒で思ひ出したが、昔にも魚に就いての問答があるぢや。衲が惠範に、「魚、熱湯に遊ぶ時如何」と云ふたのは、古人の反土糟のやうぢやがサ、マア茲に古人の魚問答を擧げてみやう。香林の遠禪師に向つて或坊サマが、

「魚、陸地に遊ぶ時如何。」

と問ふと、香林は、

「言を發するには必らず後救有り。」

と答へた。スルト其の坊サマが更に、

「却つて碧潭に下る時如何。」

と問ふた。ソコデ香林は、

「頭重く、尾輕し。」

と答へた。實に明瞭した商量ちや。それと同じ問を、又た或坊サマが智門の祚和尚にしたことがある。智門の答へは前の方には、

「死を取ることを遅からず。」

と答へ、後の方には、

「泥を鑽り土を刺す。」

と答へた。是れを又た大隨の眞和尚に問ふと、大隨は前の答へには、

「拗ふれども曲らざる處、是れ闍黎が貴ぶ處。」

と云ひ、後の答へには、

「足を立つること明め難し。」

とやつた。スルト其の坊サマが更に、

「水に處る魚、甚麼と爲てか渴死す。」

と問ふと、大隨は、

「祇だ魚親しく口を下さざるが爲めなり。」

と答へた。衲も惠範や惠純を、陸地を熱湯に變へて試問したが、矢ッ張り平常其の心掛けがなから駄目ちやつた。古人の辛苦を念ふ者なぞは、今も昔も少ないものぢや。

それから又た風穴和尚は、人の、

「魚、深潭に隠るる時如何。」

と問ふたに對して、

「湯盪火燒。」

と遣つて退けた。併し東光寺の會中には、「魚、熱湯に遊ぶ時如何」と云ふに、出て來て商量した者が無い。禪坊主も駄目ちやと思ふた。僧堂生活も矢ッ張り寺持になりたい計りぢや、可憐さうなものよと熱々思ふたわい。

ソコで此の東光寺の大会では、衲は典座の寮頭を遣つたぢや。典座のことは前にも詳しく云ふたが、サテ大衆と云ふものは中々我儘なもので、飯が硬ふても軟ふても、口へ出してこそ小言は云はぬが、一杯多く喰ふたり少く喰ふたりする、其のために大變な番狂せが出来ちや。二百三百の人ぢやから、たかが一杯の多少で、冷飯ばかり出来るのと、追焚きくをして、とうく心のある飯を造へると云ふ騒ぎになる。其の中には焦付きも出来るぢや。其の過は皆な典座の處へ来る。焦付きも一釜や二釜ならばぢやが、何分ともに一斗焚の釜で、何十釜と云ふ飯を焚くのぢやから、假りに一釜で五合づゝの焦付きが出来るとしても、直に五斗やそこらは焦付かして仕舞ふ。恐ろしいものぞ。焦芽の罪と云ふて、米を焦付かす位罪なことはない。マア飯が満足に焚ければ一人前の坊主ぢや。そりや火で計り焚くぢやない、心で焚くのぢや。飯を焦付かせてはならぬことは、隻手の黒星を見透すと能う解るぞ。

飯焚は坊主ばかりの仕事ぢやない。一家の主婦は是非やらなくてはならぬ。今の婦人は理窟や學問は知つてゐるが、飯焚の實地は旨く行かぬ、いろはのいの字も知らぬお三の方が遙かに上手ぢや。近頃は婦人が男子以上のことを遣るつて云ふ話しぢやが、自分の本職を捨て、他人のことを遣るとはヒヨンなものよ。禪は夫れは大嫌ひぢや。第一に自己を明めて、それから世間の仕事

にかゝる。ぢやから典座に於て、先づ天下の農事をも商事をも工事をも手に入れるぢや。「五臺山上雲、飯を蒸す」底も典座で會得するぞ、油斷するな。

二八 辨慶の勤進帳も宜敷と云ふ見得

伽山老漢の見送り役——坂無峠の關所——茲ぞ關虎關の働き場處——ドンノと割れるやうに叩く——役人共も驚く——伽山和尚はまご——横眼で睨め付けながら——泣いて居れば好い——涙が出なんだら唾液でも付けて——袈裟文庫から五位の拈弄と印可證——役人共は寢惚け眼をシヨホノ——ドリヤ衲が讀んでやらう——好いから通れ——覺えず臍の下で笑つたよ——嘘も方便ぢやないか

衲が肥後熊本の見性寺に掛包して居た時分ぢやつた。ソウく二十六の春、久留米を暫暇して見性寺に居つた。其の時にサ、伊豫の小松長福寺の日多窟伽山老漢が見性寺に居られたが、偶々豊後三川の長勝寺へ行かれるので、衲が其の見送りを云ひ付つたのぢや。

デ、見性寺を出立して行くと、肥後と豊後との國境の坂無峠に一つの關所がある、矢ッ張り坂無關と云ふぢや。其の頃は丁度維新前で、ヤ一攘夷の、ヤ一佐幕のと、天下の騒々しさと云つたらない。國と國との境には悉く關所を設け、嚴重に守つて居つて夜中などは決して通行させぬ。

それぢやのに衾等は道を愚圖々々して居つたものぢやから、關所へ掛つた時にはモウ日が暮れて仕舞ふた。關所では例に依つて通さぬので、止むなく峠の宿屋で一泊して、翌日朝早く、昔の八ツ時と云ふに宿屋を立つて、關門差して遣つて行くと、未だ暗いので門は締切つてある。役人も番人も起きない。ソコデ衾は、茲ぞ關虎關の働き場所と思ふて、ドン／＼と關門を叩いた。ウンと力を入れて、割れるやうに叩くと、内の方では番人が寢惚け聲で、

「何者だ。」

と云ふから、衾は、

「我々は諸國修行の僧ぢや。至急の用で豊後へ行くのぢや。早く開門してくれ。」

と呼はつた。番人共は煩ささうに、

「まだ夜中ではないか。」

と云ふので、透さず、

「何を云ふ、最早七ツ過ぎぢや。東の空は明るくなつて居るぞ、能く眼を開いてみよ。」

と怒鳴つた。其の聲が餘り大きかつたものぢやから、役人も驚いたとみえて、

「何んの用で其様に急かれるのか。」

と、眼を擦り／＼出て來た。スルト伽山和尚はマゴ／＼して何んとか云はうとするのを、衾は横眼でそれと知らせるやうに、睨め付けながら、役人に向つて、

「我々は熊本の見性寺から、專使として豊後三川の長勝寺へ行くものぢや。斯様に急ぐ用件と

云ふは、長勝寺の大和尚が今ま九死一生の場合で、大切な釋迦正傳の大法附屬の用務を帯びて居るからぢや。」

と云ふと、三人の役人が銘々に、突棒や刺股や槍を持って、

「直ぐ隨いて來い。」

と云ふから、ソコデ番所へ行つた。歩きながら伽山和尚に向つて小聲で、

「貴老は只だクス／＼泣いてをれば好い、決して口を開いてはならぬよ。何か云ひたいことがあつたら、手拭を顔へ當てゝ居なされ。そして芝居で遣るやうに、涙を少し出してサ。それも若し出なしたら、唾液でも付けて置けば好い。」

と注意した。伽山さんは正直ぢやから、衾の云ふ通りになつて無言でゐた。言の云へるものが云ふことの出來ぬのも苦しいものぢや。伽山さんも随分切なかつたらう。

ソコデ衾が先に立つて、伽山さんと一處に番所へ行くと、表が未だ暗いものぢやから、番所の



頭分の奴が、

「其方等は坊主の扮装をした間諜の者ぢやらう。」

と云ふので、衲は伽山さんの袈裟文庫を取つて其れを開けると、伽山さんがソツと衲の袖を引くぢやないか。衲は態と素知らぬ振りをして、臂で伽山さんを突きながら、文庫の底に五位十重禁の拈弄を書いた案見があつたのを取り出してみると、終りの方に、「從來子孫を斷絶せしむること莫れ、至囑々々」としてある。其の他に又た妙用禪師（蘇山）よりの印可證もあるから、是れ幸ひと、

「是れ此の通りの證據がある。」

と、其れを役人の前に差出して見せた。處が役人共は未だ本當に眼が覺め切らぬものぢやからシヨボ／＼した眼に讀み兼ねてゐるので、衲は、

「ドリヤ衲が讀んでやらう。」

と、聲高らかに其の拈弄の書いたのを讀み上げたが、役人等には何んの事やら少しも分らん、珍間漢ぢや。役人も面倒臭いと思つたのか、好い加減の處で、上役人が、

「モウ好いから通れ。」

と云ふた。其の時は覺えず臍の下で笑つたよ。併し役人には、

「早朝からお世話でした。」

と挨拶をし、これで九州第一に嚴しいと云ふ關門を通り、恙なく山を下つたが、嘘も方便ぢやないか、誰れの罪も咎もないことぢや、全く坊主が坊主の宗旨を擧げたのぢや。併しサ、衲が文庫の底から案見を取り出して、それを高らかに讀み上げた處は、芝居でやる辨慶の勸進帳も宜敷と云ふ見得ぢやらう。衲も辨慶と同じやうに一生懸命ぢやつたわい。

## 二九 猫ヶ嶽で逢ふた一丈五尺餘の大蛇

猫ヶ嶽へ迷ひ入る——黒雲が渦を巻く——松の木の下に坐して公案の拈提——南山の龍鼻蛇——龍鼻蛇に相見——「雲門の大機用を得たか——禪定の力は有難いもの——報謝の一匝——十三祖加毘摩羅尊者——蟒に向つて三歸戒を唱へる

今も云ふ伽山和尚を見送つた歸りにサ、矢ッ張り坂無峠を越へながら、次手ぢやから阿蘇山へ登山してみやうと思ひ付き、其方を志して行く中に、フト路を踏み迷ふて猫ヶ嶽へ入つたぢや。サー路があらばこそ、行く先も／＼荆棘ばかりぢや。其の中に不思議にも晴々してゐる空が急に曇つて来て、黒雲が渦を巻く。まるで闇の様に暗くなつて行手も見えぬ。只でさへ荆で歩けぬの

に、これぢや如何することも出来ぬので、ほんやり立つて居たが、只だ立つて居つても詮ない。此の間に坐して空の晴れるのを待つ外はないと、其處にあつた大きな松の下に箕居して、公案を拈提して居つた。

其の時の則は「南山の鼈鼻蛇」ぢや。長慶や玄沙や雲門が、雪峰の鼈鼻蛇を弄するのを拈提して居る中、急に周圍の草木がザワ／＼と騒々しい音を立てるから、ハテ不審しやと眼を開いて見ると、衲の眼の前の叢の中から、長さ一丈五尺の餘もあらうと思はれる大蛇が現れ出てサ、衲の坐つて居る松の樹を一匝して、東北の方を向いて悠々として去るぢやないか。是れは明瞭見えたよ。そして此の蛇の行く先き先き、草も木も皆なしなやかに分れて、自然に路を造り、自然に風をも起すぢや。實に恐ろしいものぢやと見て居る中に、大蛇の姿が隠れると、今まで四面を鎖してゐた黒雲も晴れ、随つて日の光も照して山々谷々も明るくなつたので、漸く路を捜し當て、千辛萬苦して阿蘇山へ登り、丁度三日目で見性寺へ戻つて來たが、随分恐ろしかつたよ。

ソコで早速祿岳老漢に相見して、猫ヶ嶽の所見を述べると、老漢は、  
「雲門の大機用を得たか。」

と、大笑されたが、其の時の話しに、

「猫ヶ嶽には怪獸變化の類が澤山棲んで居つて、殊に大蛇の如きは時々出没して住民を惱すと云ふことぢや。忠兄は親しく南山の鼈鼻蛇に相見したのぢや。」  
と賞せられた。其の時衲は斯う云ふ歌を詠んだ。

雲門の鼈鼻蛇なるに今ぞ逢ふ

身の毛もよだつ大蛇なりけり

と。時も時、處も處ぢや。猫ヶ嶽で此の鼈鼻蛇に逢ふとはサ。併し禪定の力と云ふものは有難いものぢや。衲が若しウカラカンと立ん坊のやうに立つて居つて、どうしやう／＼と焦つたら、大蛇の毒氣に吹捲くられて、直に彼の餌食となつたらうにサ、衲は松の大樹の下に脊骨をボツ立て、天地一枚の大定に入つてたものぢやから、大蛇も衲を一匝して去つた。此の一匝は報謝の匝ぢや。即ち此の大蛇は衲の禪戒を受けて成佛したのぢや。

ソレに就いて斯う云ふ話があるぢや。昔、遞代の十三祖迦毘摩羅尊者と云ふ人が西印度へ行つたことがある。スルト城の北方の高山の中に一つの石窟があつたから、其處で安居しやうと思ふて行く途中、一つの大蟒に出逢ふたさうぢやが、尊者は別に蟒を氣にもせず進んで行くと、蟒は尊者の身體を盤繞した。ソコで尊者が彼の蟒の爲めに三歸戒を唱へたさうぢや。スルト蟒は此の

三歸戒を謹んで聽き諒つて、ズーツと立去つて仕舞ふたから、迦毘摩羅尊者は其の儘石室に行かうとすると、又復一人の素服を着た者が出て来て問訊するから、尊者が、  
「汝は何者ぞ。又た何處に止るのぢや。」  
と問ふと、彼は答へて云ふのに、

「我れ昔し嘗つて比丘たりし時、多く寂靜を樂んだ。然るに初學の者數々來つて請益するので其の應接に煩はされて遂に愼恨の想をした。ソレデ命は遂に蟒身に墮し、此の窟中に住するこ  
と已に千年に及ぶ。今ま尊者に逢ふて戒法を聞くことを得たから、來つて恩を謝すのぢや。」  
と。ぢやから猫ヶ嶽の大蛇も、其のやうな因縁があるのかも知れん。諸人、何日何時鼈鼻蛇に逢ふも知れぬぞ。室内で透つても、實地の大蛇に出逢ふて役に立たぬではならんぞよ。

### 三〇「南山に一條の鼈鼻蛇あり」

「碧巖集」の第二十二則——雪峰の示衆——長慶の拈語——長慶まだ届かぬ——肯心自ら許すの境——「最後の一決は他日に譲る」——悟後の修行が大事——印可は學校の卒業證書ぢやない——先づ理窟は後廻し

此の「南山鼈鼻蛇」の則は、「碧巖集」の第二十二則にある。雪峰が衆に示して、

「南山に一條の鼈鼻蛇有り、汝等諸人、切に須らく好く看るべし。」

と。此の示衆は中々寒ましがサ、衲は現在に其の鼈鼻蛇に出つ會したのぢや。處で長慶は雪峰の示衆に對して、

「今日堂中大いに人有つて喪身失命せん。」

と云ふたが、衲から見ると、長慶未だ届かぬ。圓悟は長慶の語に、

「己を以つて人に方ぶ。」

と着語したが、長慶のやつ、圓悟にも見透されたわい。併しサ、長慶なりやこそ、喪身失命なぞと云ひこなして支へたのぢや。是りや只の者ぢやいかぬ。直に鼈鼻蛇に咬み殺されるぢや。

衲も是れサ、猫ヶ嶽の大蛇で初めて實際に此の「南山鼈鼻蛇」の眞髓を得て、肯心自ら許すの境に達したのぢや。ぢやから何んでも實際に當らぬと役立たぬ。羅山和尚が云はれた、

「最後の一決は他日に譲る。」

とは、誠に法にも人にも親切であると云ふことがすめる。悟前の修行よりも悟後の修行の方が大事なのに、議論で印可を取らうなんて云ふ白痴者もある。本師が其の人の聖胎長養を見た上にチャンと印可するのぢや。それを學校の卒業證書でも貰ふ氣になつて居るとは困つたものぢや。

室内の穿鑿が濟んだばかりの印可は本當ぢやない。まづ理窟は後廻しにして、實際の生きたものに取掛れ。一步も油断なくば、天地の物皆な是れ公案ぢや。一つとして公案ならぬはないぞ。

三二 七十九代の佛祖位に入る

修行は永久なもの——悟ばかりが常ぢやない——腰を下せば躓く——八十二歳の今日でも躓きづめ——妙喜さんが箱根の雲助——餘習が残り易いもの——無眼子に鼻を掴まれる——最後の一決に於て商量——羅山和尚の印可——鄂州全忠別號 白崖窟——サ——是れから度生界

酒の印可は早かつたが、本物の印可は二三年遅れて……サウぢや、衲が二十七歳の時ぢやつた。熊本の見性寺から久留米の梅林寺へ歸錫して、相變らず長坐不臥で遣り續け、室内の微細を盡して居つた。

元來修行は永久なものぢや。此處で好いと云ふ處はない。山の上に又た山ぢや。是れで好いなぞと腰を下さうものならば、そりや悟りぢやない。世の中は無常ぢや、悟ばかりが常ぢやない、悟も亦た無常ぢや。腰の下し場はないぞ。それを下手に下さうとすれば躓くぞ。總べて人は大山には躓かぬが、蟻塚に躓くと云ふことがある。禪を得たなどと思ふと、ソレそこに尻が据るから

直に躓くぢや。

衲も是れ、八十二歳の今日でも、まだく躓きづめぢやわい。衲が羅山和尚の處で初相見に躓いたのは、「首山綱宗」ぢや。彼の中には、

「水牛も也た識らず。」

ぢやの、

「靴を着けて水上に立つ。」

ぢやのと云ふ語がある。中々見悪いものぢや。其の境にならぬと知れ悪い。妙喜さんが箱根の雲助になられたのは、誠に有り難いことぢや。口先ではサ、「心身脱落して看よ、そんなことは朝飯前の茶の子ぢや。」などと云ひ、又た、「空が空を使ふ、畢竟何んの罣碍があらうかい。」などと吐くがサ、中々そんな茶らッほこなとぢやないぞ。いくらうまくブチ抜いても、どうも餘習が残り易いものぢやから、悟後に於て餘程能く微細を盡さぬと、一寸したことに無眼子の學人から、佛か魔か、なぞと鼻を掴まれる。それでは度生邊に妨をするから氣を付けねばならぬ。

衲もサ、此の微細を盡し、最後の牢關を打破した後、見性寺から歸錫して間もなく、羅山老漢が最後の一決に於て商量有り、遂に印可證明せられたので、衲も眞の佛子となつて、釋尊的々七

十九代の佛祖位に入つたぢや。即ち臨濟正宗羅山正傳の一子全忠、別號を白崖窟と命名せられ、講本と衣鉢とを譲り受けた。サ一是れから度生界に入つて行脚ぢや。

三三 印可の質造が無くなつた

「維摩經」の弟子品——眞物が質物を勘辨——釋迦拈華の端的——他宗では見られぬ——一器の水を一器に移す——法に二つはない——印可も單的にはいかぬ——質造は白隱後に盛——多くは學人に瞞著される——お師家さんの質物——印可證の質造は寧ろ宗門の光榮

「印可」のことは「維摩經」の弟子品に、

「若し能く是くの如く宴坐する者、佛の印可する處。」

とある通り、所謂證明の意味ぢや。釋迦正傳の師家が有力の弟子を點檢してサ、眞物が質物を勘辨の上、とゞかぬ者には骨折らせ、大事了畢底の漢には、印可即ち證明を與ふるぢや。是れは釋迦拈華の端的、迦葉微笑してより以來サ。今日まで是れ此の通り、連綿として絶えず相續して居るのは、他宗では見られぬことぢや。其の見地が釋迦とも達磨とも一分の相違がないから、印可も出来るのぢや。所謂一器の水を一器に移す。歳に年代の深遠有り、人に古今の差別有つて

もサ、法に二つはないぞ。「補教」にも、

「印は謂く印可、可は謂く稱可。事理相稱ふ、故に聖心に可ふ。」

とあるが、今時の天下の宗匠は能く聖心に可ふかサ。

それから印可證ぢやがサ、昔は此の質造があつたものぢや。そんな風ぢやから、釋迦が迦葉に印可して、

「我に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微妙の法門、不立文字、教外別傳有り。摩訶迦葉に附屬す。」

と云はれたやうに、口を以て口に傳ふるやうな單的には行かなかつた。ソコデ書物にしたが、それでも質が出来るので、とうとう印を捺すやうになつたがサ、今度は印まで質造を造つて、遂に質造印可と云ふ奴が白隱後に盛んになつた。今では質造はないらしい。併し其の質造のないのは、孤危嶮峻の宗匠が無くなつて、瞎老漢ばかりぢやから、多くは學人に瞞着せられて、冬瓜大の印子をベタと捺した印可證をドシ／＼渡すからぢや。ソレデ今は質物の印可はない代りに、お師家さんが皆な質物ぢやからカラ駄目ぢや。印可證も質物でも出来るのは寧ろ宗門の光榮ぢや。今は實にハヤお話にならぬわい。禪宗の大事は此の印可にあるのぢや。

三三 紫衣の大和尚に拜をさせる

伽山和尚と共に本山へ投宿——伊豫の樵禪和尚——戲談半分の間ひ——酷く納の癩に障つた——再住の大和尚ぢやが未徹在——退れ——禮拜せよ——列席の者は呆氣に取られる——是れは痛處の一針——納は南山の大蟲ぢや——速に道へく——七十三歳の高齡で掛塔——今時の雲水は階知誠の下馬

納が二十八の歳ぢやつた。日多窟の伴僧の格で、本山の塔頭大雄院に投宿した。其の時に伊豫の樵禪和尚と同じく大雄院に泊り合せたので、いろく話から公案なぞのことまで出たが、樵禪和尚が納に向つて、半嘲弄的に、

「忠一ッ、お前五位は如何ぢやえ。」

と問ふた。納は是れ破衣の一禪衲子で、先方は紫衣の大和尚ぢやが、宗旨の根本を談ずるのに衲を小僧と見縊つて、問ふべき方法をも顧みず、戲談半分に出て來たのが、酷く納の癩に障つたから、ムヅと開き直つてサ、

「苟くも貌下は再住の大和尚、賜紫の沙門ぢやが未徹在ぢや、法眼不明ぢや。若し納に五位を問ひたくば、其の輩を去つて禮拜し來つて請問せよ。法に高下の人情はない。サ、退れく、

退つて禮拜せよ。我、汝の爲め垂憐せん。」

と叫んで遣つた。スルト列席の伽山和尚を始め、本山の長老等は皆な驚いて、納が氣が違つたのぢやあるまいかと云ふやうに納の顔を見詰めて、呆氣に取られて居つた。併し樵禪和尚は驚きながらも、流石に法義の厚い人ぢやつたから、禮を盡して、

「是れは痛處の一針ぢや。忠一ッ、お前さんは何處のお會下か。」

と問ふから、

「納は南山の大蟲ぢや。」

と答へると、樵禪和尚は、

「左様か、それなれば我は他日江南山に於て汝に相見せん。」

と云ふから、納は、

「更に何んの來日をか待たん。速に道へく。」

と詰掛けたが、禮拜して去つたから、納も禮を盡して其の場は別れたぢや。

スルト其の後、樵禪和尚は七十三歳の高齡でありながら、伴僧と共に遙々梅林寺へ來て掛塔して、俱に五位君臣の調をした。即ち納の大喝が、樵禪和尚をして再び奮發心を起させ、全く大事

了畢させたのぢや。七十餘歳になつて禪堂へ出掛けるなぞと云ふことは、今時は藥にしたくもない。樵神和尚、實にハヤ豪いものぢやつた。

兎に角サ、坊主でも居士でも、自分ばかり參得すれば夫れで好いなと思ふな。人をも勵さねば駄目ぢや。今時の雲水は瞎知識やデモ居士の下馬ばかりになつて居る。ソナナことで紫衣の大和尚を打ちのめすことが出来るかよ。名は雲衲でも、心持は俗人にも劣つて居る。誰れか一人、「南山の大蟲」と名乗る者があるか。併し今の紫衣の大和尚は駄目ぢや、打ちのめす價値のないやうな者も有るかも知れぬ。

### 三四 命懸て「槐安國語」を借りに行く

日本碧巖の「槐安國語」の提唱——小倉落城の一大騒動——他國人は往來留——衲は齒痒うてならぬ——大丈夫拜借して來ます——眞座と同行——引括られたが看經で許さる——切つて捨ちうかと嘯き話——眞座はブル——馬鹿武士の一疋二疋は打殺しても殺生にはなるまい——否々大事の前の小事——間があれば坐禪——目の前で首と胴との生別れ——柳川關の難透——「坊主待てッ！」

若い時は随分荒くれたとをしたものぢや。あの小倉の城が落ちるの落ちんのと云ふ時分にサ、

梅林寺では雨安居が済んで、大衆百拾餘名が、次の冬制には羅山大和尚に「槐安國語」の提唱をお願いしやうと、衆評一決しさうぢやが、何分梅林には大衆が用ゐるだけの講本の部数が揃つてゐない。此の「槐安國語」は日本の「碧巖」とも云はれる位で、大燈國師の「龍寶語錄」に、白隠和尚が着語と許唱を付したもので、其の遣り方が「碧巖」のやうな體裁ぢやから、日本碧巖とも云ふぢや。

サ——此の提唱には講本を借りなくてはならぬ。何處にあるかと云ふに、衲が前に居つた熊本の見性寺には五拾部以上の部数が揃つて居る。それでは見性寺で借りるやうにと云ふた處が、今はソレ小倉落城の一大騒動で、國境や郡境には夫れ々、新しく嚴重な關所が出来、他國人の往來は一切禁じてあるので、中々容易に通れぬのみか、所謂殺氣道途に満つと云ふ有様で、實にハヤ人心恟々たる時ぢやから、皆な途中を險呑がつて、誰れ一人「衲が行つて借りて來やう」と云ふ者がないぢやないか。大法重きか、身命重きかサ。武士でさへ命は鴻毛より軽く、義は泰山より重しと云ふに、我が大法の爲めに身命を賭して此の講本を借りに行かうと云ふ者がないとは、何んと云ふ情けないことかと、衲は大衆の評定が齒痒うてならぬから、

「冬制の提唱が愈々「槐安國語」と決つたならば、其の講本の借入は衲がお引受けしませう。」

と云ふと、大衆は勿論、重役連も驚いて、

「行つて下さるか。併し世間は今ま戦争眞最中ぢやと云ふ噂ぢやが。」  
と、心配さうに云ふからサ、衲は、

「其の御心配は御無用ぢや。大丈夫拜借して來ます。併しサ、「槐安國語」は總て五卷に分れて居るから、それを五十部借りるとすると、全體で二百五十卷ぢや。いくら衲が強力でも、一人で二百五十卷を持つちや持ち悪ふて仕方があるまいと思ふから、誰か一人手助けが欲しいものぢや。」

と云ふと、それではと重役連中の提案で衆評の結果、若州の常光寺の徒弟で、眞座と云ふが同伴することになつて、共に久留米を出發した。

處がサ、其の道中の物凄さと云ふたら、イヤハヤ言語に絶してをる。先づ第一、何處でも間諜ぢやらうと云ふ疑が深い。

「彼奴等は坊主の形振りして居るが、てつきり敵の間者に相違ない。我が藩の軍備などを偵察に來たのぢや。怪しからん奴ぢや。」

と云ふ處から、亂暴な役人共に出逢ふと、引括られたこともあるが、番所で看經したので、

「是れは本當の出家ぢや。」

と云ふて追放されたり、さうかと思ふと、

「ヤア此の坊主は質物ぢや。手を見るとタコが出来て居る、劍客の證據ぢや。面でも坊主面ぢやない、一癖ある。何國かの武士に違ひない。切つて捨ちようか。」

と云ふ囁き話が耳に入つたこともある。眞座の奴は聞く度毎に眞蒼になつてブル／＼顔へて居るがサ、衲は、エー面倒な、どうせ斯様戦亂の途を往復するのぢや。馬鹿武士の一疋や二疋は打ち殺しても別に殺生にはなるまい。大法にや代へられぬ、今や久留米には百何十人と云ふ人が法に飢えて居るのぢや、いつそ打ち殺して通らうか。とも思ふたが、イヤ／＼是れは大事の前の小事ぢや。小事に身命を塔しては役に立たぬ。大石良雄が脇坂の門前で九州武士に踏んだり蹴たりされた上、面上に痰まで吐きかけられたが、とう／＼辛抱し通した。私に怒つて公に奉ずることを失してはならぬ。衲も是れ、こんな木ッ葉武士を相手にすべきぢやないと深く感じたものぢやから、どうなりと彼等の爲るが儘に爲せて、間さへあれば坐禪をやつて居つたぢや。ソレデ、

「是りや禪宗の坊サマぢや。」

と、許されたこともあつた。ト又た、四五人の武士が切ツつ撲ツつして、其の中の一人は切り



殺され、無残にも首と胴と別になつたのを目の前に見たこともあつた。眞座はワナ／＼と顔へて居る。

これぢやならぬから、一刻も早く、此の修羅の巻に等しい道中を續けて柳川の關門へ掛つたが、サテ此處が難透ぢや。「黄龍の三關」や「兜率の三關」關虎關は透つても、此の柳川關は透さぬと云ふやうな振りをして眼を三角にした番人の奴等から、

「坊主、待てッ！」  
をくつたぢやわい。

三五 モウ此方もまゐりさう

慣ッこだから驚かぬ——まるで暖簾と臍押し——山を拔道するの外はない——草狩り姿に化けた——殺さないやうに投げ捨てる——晝は隠れて夜歩く——赤脚にして荆棘を踏断する——綿のやうに疲れる——身命を挂へる握飯がない——併し未だ元氣は失せぬ——菊地の殿様のお城——天台笠の旅装束の僧

併し「坊主、待てッ」位のこととは、モウ慣ッこになつて居るから別に驚きもしない。ソコデ關所の番人に事の次第を述べた。平素なら佛法歸依の檀那ぢやから事も會らうが、何分明治維新に

二年前と云ふ、天下騒亂、人心大變動の時ぢやから、是非の判断も分別も一寸とは出て來ぬ。番人等は是が非でも、只だ他國人を通さなければ自分の職分が盡されると云ふ考なので、何んと云ふて歡願してみても、頑固に、

「ならん／＼。」

の一點張りぢや。まるで暖簾と臍押しぢや。是れぢや詮方ないと思案を變へて土地の者が薪取りか草狩りかするやうに扮裝ち、路もない山を拔道するの外はないと決心した。

ソコデ一度柳川町へ取つて返して、先づ準備に掛らねばならぬ。それにしても兵糧が入るぢや早速町内を托鉢した。思ひの外の所得ぢやわい。三日ばかり托鉢して春負籠を求めてサ、それへ衣や笠を入れ、それから托鉢米で飯をウンと焚き込み、中へ梅干を入れた握飯を先づ三日分程造つて是れも春負籠の中へ秘めて、サ一是れで好いと、手には熊手を持ち、マンマと草狩り姿に化けたぢや。

それから路でない方へ／＼と入つて、峻路を撰んで行くと、原のやうな處へ出たと思ふと、又た谷間へ入つたりする。其の途中でも時々野武士みたやうな奴に出會して咎められたが、一人二人の時は取つて投げた。其の頃の袖の腕と云ふたら、自慢のやうぢやが全く強かつたよ。ぢやか

ら投ける位は何んでもない、殺さないやうに投げ捨て、通つた。今思ふと随分亂暴ちやつたよ。ソレデ成るべく晝間は深林に潜み、夜分歩くやうにしたから、三日三夜と云ふものは、少しも寝ないで、打つ通しに山路を馳せ廻つた。それがサ、脚絆も着けねば草鞋も穿かない、所謂赤脚にして荆棘を踏断すること三日三夜ぢや。綿のやうに疲れたとは此のことぢやらう、モウ身命を主へる握飯がない。眞座の奴はベソ／＼泣き出す。始末にをへぬ。納は彼を奮勵さすので可なり骨が折れる。釋尊の苦行や達磨の難行を云ふて聞かせてゐたが、モウ此方もまゐりさうになつて来た、併し納は未だ元氣は失はぬ。處で丁度四日目の夕暮ちやつたが、遙かにお城の見える處へ出たので、納は、

「モウ此處まで来たら大丈夫ぢや。心を大きく持て。向ふに見えるのが菊地の殿様のお城ぢやらう。マア／＼一吸しやう。」

と、路へはみ出た岩に腰を掛けて、四邊の景色を眺めて居ると、其處へ天台笠の旅裝束の僧が来るぢやないか。

三六 「忠一ソぢやないか」、「ヤア觀座か」

疑心暗鬼——今度は此方で坊主を疑ふ——ヒヨイと顔を上げてみると——笑ふに堪へたり元と惟れ相識の人——納を尋ねるより先づ貴公等——どこから見ても狸公の行脚——單狩りの趣向も亂離骨灰——納が案内するから大丈夫——漸く元の坊主形——目的通りに「槐安國語」——歸途は公道を通貫——納が彼の時チヨン切られたら

其の坊サマを見ると、今度が此方が、彼奴、坊主の形振をして納等を捉へに來たのぢやなと、所謂疑心暗鬼ぢや、是れ迄は此方が武士に疑はられたが、今度は此方で坊主を疑ふぢや。變な奴ぢやなア、成る丈顔を見せぬ方が好いと思ふて居ると、其の坊主がツカ／＼納の休んで居る方へ向つて來るぢやないか。是りや益々變なわい、てつきり番所の廻し者に違ひないと推量した。納等が此の坊主を見て番所の廻し者と思ふ位ぢやから、番所の役人が納等を敵の間諜と疑ふたのも亦た無理はないかい。

こんなことを思ふて居る中に、納の身近く寄つた其の坊主が、さも驚いたらしく、  
「忠一ソぢやないか。」

と云ふので、納も意外に思ふて、俯向いてゐた顔をヒヨイと上げてみると、何んのことぢやない、兼ねて同行の惠觀ぢやつたから、納は、

「ヤア観座か。」

と思はず呼んだ。ほんに奇遇ぢやつた。こんな處で惠觀に遇はうとはサ。又た互に疑ひ合つた者が舊知の人であらうとはサ。是れこそ白隠の頌の、

「後東局を推し前鬼柱ふ、兩頭力を奮つて通身に汗す、終宵争ひ拒んで漸く天曉、笑ふに堪へたり元と惟れ相識の人。」

と云ふのぢやらう。それは扱置きサ、衲は惠觀に向つて、

「衲はお前を關所の番人の廻し者ぢやないかと思ふたよ。それにしても何處へ行くのぢや。」と問ふと、觀座が、

「衲を尋ねるより先づ貴公等は何をしてゐるんぢや。その形は無論坊主とは見えず、又た山人とも見えず、さうかと云ふて、俳人の草狩りぢやあるまいし、何處から見ても頓馬な氣違ひか狸公の行脚としきや見えぬぞ。」

と、不思議さうに見て居るから、衲は、

「ハ、ノ、何と見られうとも儘よ。役人に疑はれさへしなけりや好いのぢや。」と云ふと、觀座が、

「馬鹿を云ふな。其の形振ぢや疑ふなと云ふても疑はずには居られない。萬一にも役人共の眼に掛らうものなら、第一番に怪しい奴ぢやと、一も二なく牢屋へ打ち込まれるぞ。牢屋だけなら好いが、面倒ぢやと云ふて打つ殺して仕舞はれるぢや。其の形ぢや到底仕方がない、衣はあるかえ。一體全體如何したと云ふのぢや。」

此奴に逢つちや草狩りの衲の名趣向も亂離骨灰ぢや。ソコデ衲は、

「そりや有るとも。實は斯う云ふ次第で見性寺へ「槐安國語」の講本を借りに行くのぢや。」と、云々と物語ると、觀座も、

「オー、さうか、それはノ御苦勞ぢやつた。大法の爲め、白刃を冒しての難行路、能う御座つてくれた。是れから前途は衲が案内するから大丈夫ぢや。」

と云ふので、眞座も急に元氣付いて、籠の底から夜や脚絆を取り出して着るやら穿くやら、漸く元の坊主形になつて、觀座に伴はれ、熊本城下の見性寺に着いた。

早速葆岳老漢に相見して、羅山和尚からの依頼を物語つた處が、葆岳さんは直に承諾してくれた上、

「それはノ、遠方の處を能う出掛けて來たのう。併し如何して道中をしたぞ。他國往來は中々

容易ぢやないと聞いたのに。」

と云はれたから、衲は一部始終の困難を語ると、葆岳老漢も衲等の勇氣を酷く感心せられたわい。

ソコテ目的通り、「槐安國語」五十部を借りて愈々歸還となつたが、今度は見性寺から往來の證明書を貰ふて歸つたから、公道を通貫して無事に久留米へ着いて、雪安居には百五十名の大衆に「槐安國語」を聞かせることが出来た。羅山老漢も非常に喜んだがサ、衲が彼の時武士共にチヨン切られたら、南天棒と云ふ棒は世に知られずに仕舞ふたぢやらう。

### 三七 坊主としての光輝江湖に満つ

羅山老漢の稱讚——「槐安國語」開筵の偈と引——曉鐘一聲睡り始めて覺む——各二子の志氣を具せば何の祖關ぞ透り難きことか之れ有らん——自慢しても仕方があるまい——後にも前にも無いこと——羅山老漢の證明

羅山老漢は衲等の艱難辛苦の物語を聞いて驚歎し、

「忠兄無くんば此の行は成し難かりし。」

と、深く稱讚せられ、そのみならず、目的を達して「國語」の借入れが出来たので悦喜の餘

り、「槐安國語」開筵の語中に、衲と眞座との二人の名を表はされて、見性寺を槐安國語に擬へ、葆岳老漢を大王に比してサ、南柯の夢物語を頌出された。今ま其の開筵の偈と引とを述べてみると斯んなものぢや。原文は無論漢文ぢやが、今ま譯して云ふて置かう。

#### 槐安國語開筵

拙偈並に引

今ま茲に丙寅の寅秋、忠眞（全忠と素眞）の二子、將に使を奉じて槐安國に入り、其の方語を求めんとす。時に天下混亂して列國兵を起す。故に國中の關門嚴重にして、自他共に出入することを許さず。二子命を重んじ強ひて往く。往いて南柯郡に抵り、實に王都に達することを得ず。進退維れ谷まる。關吏に謀つて、信を都に達せんことを乞ふ。吏、諾して曰く、汝等先づ速かに他方へ去つて、慎んで京信を待つ宜しと。二子便ち南柯に退いて柳瀬に止まる。夜は蒲團に坐して己事を究明し、晝は村落に化して以つて鴻飛に充つ。昏費して京信を得ると雖も、纒かに托する所の十之一を齎すのみ。二子憤然として曰く、自ら往いて大王に謁せずんば、死すとも亦た歸らずと。越えて人跡不到の地に出で、且つ飢渴を忍び、赤脚にして走ること三日。南柯郡を過ぎて凡そ百里許りにして、偶ま舊友觀公に遇ふ。公驚いて曰く、方今國中軍備翹なら

す、往々、關を構へ、戍邏兵を置き、巡行して、蟻兒も亦た浪りに出入するを許さず。而も況んや旅客をや。公等如何んぞ這裡に遇ふを得たると。二子使ち實を以て告ぐ。公歎じて曰く、信なる哉、忠臣は國の危きに顯ると。是に於て觀公、導者と爲り、陰僻の小徑を求め、潛かに五城に入り、大王に調するを獲、王、歎じて曰く、吐なる哉、我に一顆の龍寶有り、汝が持ち去るに任すと。二子之れを獲て歡踊に堪へず、速かに歸途に上り、王符を得て錫を振つて去る。到る處關門盡く開いて、公然之れを過ぐ。正に旬日を経て江南に還る。曉鐘一聲睡り始めて覺む。夢中賜ふ所の龍寶は、則ち槐安國語若干部なり。飢凍寒餓の輩、之れを見て謝して曰く、嗚呼忠貞二子が惻苦と天の擁護とに非らざる自りは、吾等争でか坐して之れを拜見することを得ん。軀命を顧みず、法の爲めに親切なること應に是くの如くなるべし。謂つ可し、匹馬單槍一超直入の勢有りと。滿坐賞歎歎。時に窮乏道者、傍に之れを聞いて曰く、咄哉、寐語すること休めよ。若し恁麼にし、光陰を送らば、殆んど大事を過さん。江湖の弊風、豈に之れを見るに忍びん哉。今冬正に是れ、鶴林老爺（白隱禪師）が一百遠年忌の辰なり。何を以つてか佛祖の深恩に報答せん。今ま各、二子の志氣を具せば、何んの祖關ぞ透り難きことか之れ有らん。何んの佛境ぞ到り難きことか之れ有らん。只管に參究して關を去れ。

槐安國裡關門峻なり、誰れか身軀を抛つて撞入し來る。臂を振つて直に龍寶を持し去る、還つて須らく擊碎君が爲めに開くべし。

參

臨川亭 羅山元庵艸稿

是れをサ、羅山和尚が講座で高らかに讀み上げられたので、納が坊主としての光輝、江湖に滿らたぢや。納は自慢するが、自慢しても仕方があるまい。納に續くやうなものが出来来ないぢやもの。時も時ぢやつたが、後にも前にも、こんな暴くれたことをやつた者はあるまい。辨慶も豪いが、あれは勇者ぢや、門達ひぢや。納は大法の爲めの勇者ぢや。自慢が少し過ぎるが、羅山老漢が證明して居るから仕方がないぞ。

三八 恩師羅山老師遷化の前後

羅山老漢は精力主義の人——百丈を實現——發病の當時——大守有馬公の御心痛——年末から重態——禪堂は無學さんが引受ける——入室も斷然中止——俗男女の所念——「臨川亭」と大守の御自筆——覺えず涙を誘はれる——是非全快するやうにとの御口上——納の記した病床日單——七日前に遺偈を書す

いつも提唱の時に講本師と共に回向する大綱正宗禪師とは、即ち羅山和尚の救賜號ぢや。臨川

亭羅山老漢は精力主義の人ぢやつた。衲が今日有るも矢ッ張り臨川亭のお蔭ぢや。老漢は園頭に山作務に、一に勞苦を避けたことがない、何んでも大衆と共に遣つたぢや。古人の百丈とは言句の上で相見して居るが、羅山老漢は百丈を實現したものぢやと思ふ。そのみでない、中々の勉強家であつたから、四來の雲衲は毎時百員を下つたことがない。

羅山老漢の病氣のよなどは、傍に居つた衲の外には、モウ知る者もないから云ふて置かうが、老漢は慶應二年（丙寅）の七月下旬から四大不調ぢやつた。其の時は石橋猷庵と云ふが主治醫となつて種々と配劑した。病症は口燥瀉と云ふことぢやつた。併し醫師の手當が好いのか、十月頃から少しづつ快方に赴いた様子ぢやつたが、藩主の有馬公は大層心痛せられて、醫者の仲間へ向つて、「羅山の病氣全快致すやう配藥致す可し」とお達しになつた位ぢや。是れに依つてみても、恩師が如何に太守公の庇依が厚かつたかサ。それに又た太守公は參禪に心を用ゐて、下々にまで心得方を教へられた。今時の大臣等には一寸眞似の出来ぬことぢやつた。

處が其の十二月十八日と思ふが、其の頃から再發して重態に陥つたので、主治醫の石橋猷庵を始め、北村拙齋、平川良榮、實藤享節、菊地好生等の醫師が立會診察して甲論乙駁の上投藥したソコで太守公よりも時々特別のお尋ねが有り、其の他藩中一同、交る／＼見舞意り無かつたが、

總べて老漢に面會することは斷つた。其の頃は禪堂の方は關無學さんが引き受けてぢやから差支はないが、大衆も八拾餘名からぢやつたので、中には臨川亭へ入室したいと云ふ者もあつたが、それも斷然中止し、菊地好生と衲が付き切りで、大小便は勿論、飲食等も一切日單に記して、三日目乃至五日目には、前の五名の醫士が立會診察の上配劑した。

斯う云ふ容體ぢやから山内は云ふまでもなく、城下の道俗男女まで、一向全快を神佛に祈り、堂内でも神咒を誦して祈念を籠めた。又た衲が疲れると云ふので、老兄が交代に一兩人來て呉れて看護もした。ソコで到底全快覺えないとは諸人も思ふたが、太守公も左様覺られたと見え、老漢に墨蹟を一葉差出すやうにとの御所望があつたので、字句は忘れたが早速認めて差上げると、其の御挨拶がてらぢやらう、太守公御自筆で「臨川亭」と額面を御揮毫せられ、それに種々なものを添へて下された。師弟の御取替せのやうに思はれ、其の時のことが未だ目の前に在るやうで覺えず涙を誘はれるぢや。太守公は老漢の病氣を、御自身が煩ふやうに覺され、或時の如きは御近臣の今井榮、磯部勘平の兩名を使者として、

「永々の病中、成る丈氣永く保養す可く、是非々々全快致す可し。」との有り難き御口上に、病床に懸けるやうにと軸物を下され、それに重詰迄下賜せられた。

斯くの如き藩主の思ひやら、道俗の祈念の爲めか、翌慶應三年卯の正月には大分快方に向つたが、其の月の中旬頃から、ドツと病勢が加はつたので、上下の混雜一通りでない。御後室晴雲院様からも御見舞があつて、山内は大騒ぎぢやつた。

それから二月一日後のことは、左の「病床日單」を見れば會る。是れは衲が恩師を看護しながら自ら記した日記ぢや。謂はど衲の珍藏ぢや。外には誰れも知り手が無い。

二月一日 此の日より病氣平癒祈願の爲め、百坐楞嚴會祈禱を修す。堂内は勿論、隣寺の尊宿も隨喜せらる。

二月五日 初夜の頃より俄かに發汗し、全身流れ亘る。早速醫師等呼び診察せしめたるに、此の汗の發するは悪しき徴候なりとて、夫々手當を爲す。猷庵・享節、好生は夜詰の番に當り常住に控へて時々來診す。

二月六日 病危篤の噂、一度門外に傳はるや、國中の寺院は勿論、筑前、肥後、肥前、豊前邊りの寺院等も續々見舞に登山せらる。醫師は前の通り詰切りなり。

二月八日 氣分好しとのことに、人々多少とも安心す。此の日太守より急に副事を召され、和尙の病症をお尋ね有りて、看護の者への手當として御目錄を頂戴す。尙ほ精々看護怠らなとの

仰せなり。又此の日和尙、遺偈を認めんと申され、筆紙の用意をなせば、和尙は筆を執り、

一通身是れ病通身の藥、梵天に扇散して白汗流る。末後何んぞ柳を尙ふことを須ひん、千峰萬壑縦由を絶す。」

と書り終り、遺品を夫々に分配す。無學和尙始め大衆一同、遠州豊田郡より來られし生家の者等にも一々遺言せらる。

二月九日 少々心持好いと申されしが、醫師は油斷ならずとて枕頭を去らざりし。

二月十日 此の日も別に異變なき故、或は全快するやもと空頼みの念も起る。

二月十三日 國內の諸尊宿來山し、眞讀大般若會を修して平癒を祈る。

二月十五日 此の日より衰弱甚しく、「今日は佛の涅槃會なり、羅山の涅槃も近付けり。」と云はる。一同涙なり。

二月十六日 六ツ時端然として示寂す。世壽五十三。

是れが其の概要ぢや。老漢の遷化は實にハヤ佛祖と少しも變らぬ、見事なものぢや。所謂少病少惱七日以前に豫め死の到らんことを知られたのぢや。中々斯う行くものぢやない。ソコデ十八日の密葬、二十八日の本葬と決つた。會葬の坊サマは二百人ばかりぢやつたが、太守の代理、其

の他四民の参拜した者は無慮千五六百人で、近來稀に見る盛大なる葬儀ぢやつた。故人の徳の如何に大なるかゞ知れやう。

三九 お通夜に禾山さんと遣り合ふ

二十人宛交代の通夜——禾山は柱に凭れてグーグー——教相が出来ると云ふ慢心が見性の邪魔——臨濟に代つて打開する——警策で打つてグー打らのめす——明暗双打——越溪さんの處へ行つて修行果滿——折れた警策には千萬無量の慈悲——臨川亭と含輝室

羅山老漢が遷化された後、中陰中は會下の者が二十人宛交代り合つて、臨川亭でお通夜をしたものぢや。衲が禾山さんと遣り合つたのは此のお通夜ぢや。

其の時禾山さんも臨川亭に来て居られたので、丁度禾山さん等のお通夜の當番ぢやつた。衲は直日ぢやつたから、臨川亭へ見分に行つた。處が禾山さんが見えぬぢやないか。

「サー禾山は何處へ行つた。」

と、次の間へ行つてみると、柱に凭れてグーグー寝てをるぢやないか。今ならあんな手荒なことはせまいがサ、何を云ふても歳は二十九と云ふ血氣盛んの時ぢやあるし、それに禾山さんは平

生教相が出来ると云ふ多少慢心があつて、それが又た見性の邪魔をしたものぢや。いつも晦巖さんの教相を擔ぎ出して来るものぢやから、今夜は一つ衲が臨濟に代つて、此の教者法師を打開してやらうと思ふて、警策でウンク好つてグー打ちのめした。スルト禾山さんが、

「明を打すか、暗を打すか。」

と云ふから、衲が、

「明暗共に打す。」

と又た打つたので、禾山さんとうく逃け出して仕舞ふた。

翌日になると禾山は暫暇を請うて久留米を飛び出し、それから越溪さんの處へ行つて遂に修行果滿せられ、天下の衲僧となられたのぢや。彼の時はさぞ痛かつたらうよ、警策は打ち折れたぢや。併しサ、衲の明暗双打に禾山多少の見地を得て遣り上げたので、其の後ち十成の人になられたから、親しく衲に禮を云はれた。打つならばサ、末に禮を云はれるやうな打ち方をせなくちや駄目ぢや。此の警策には千萬無量の慈悲が籠つてをる。臨濟は黄檗の六十棒で眼が覺めた。禾山は南天棒の明暗双打で眼が覺めて、後來隱山下の宗匠となられたぢや。

それから序に注意して置くが、臨川亭は羅山老漢が隠退後の室號ぢやと云ふことは今も云ふた



通りぢやが、全體久留米では含輝室が室號ぢやつたので、無學さんも久留米に居られた當時は、矢つ張り含輝室と云ふた。他へ出られてから樹王軒と云ふた。ぢやから無學さんには、含輝と樹王と二つの室號がある譯ぢや。

四〇 ビシヤツと一掌を與へた

羅山老漢の追悼接心——無學さんの室を叩く——塔前に端坐する——無學和尚何々大笑——雲門と僧との問答——それを引いて衲を檢點——一掌と「仁義道中」と是か不是か——其の境に就て學人を提擧——大衆半は分散——留つて無學さんを補佐する

其の年の雨安居ぢやつた。臨川亭羅山老漢の追悼接心をやつた。大衆ば八十名ばかりぢやつたらう。衲はそれから無學の室を叩いた。無學さんも壯年の頃は室内中々峻峻ぢやつた。衲が此の接心に塔前に端座して居つたのを、大衆の中でも見たものぢやから、いつとなく無學老漢にも知られたと見えるぢや。

或日、入室すると同時に、  
「甚麼の處よりか来る。」

と問ふたので衲が透さず、

「塔を禮し来る。」

とやつた。スルト無學さんが、

「祖師、甚麼とか道ひし。」

と云はれたから、衲はビシヤツと一掌を與へたので、無學和尚、何々大笑したことがある。

是れは無學さんが雲門に擬つて問ふたのぢや。雲門の問ひには、或坊サマが、

「和尚甚とか道ふ。」

と答へた。スルト雲門が、

「將に謂へり、是れ箇の靈利の漢と。」

其の時坊サマが行詰つた。ソコデ雲門が自ら此の僧に代つて、

「祇だ仁義道中なるが爲めなり。」

と云ふたことがある。それを無學和尚が引いて以て衲を檢點したのぢや。サー諸人、衲が一掌と、「祇だ仁義道中なるが爲めなり」と云ふと、是か不是か。道へ、看んぢや。

師家が學人を試るには、平素の工夫が大事ぢや。塔處にあれば塔處と、其の境に就て學人を提

概せねばならぬぢや。併し此の親切が解らぬもので、先師が遷化されると、皆な夫れ／＼に更に他の師を求めものぢや。梅林も臨川亭が遷化し、追悼の接心も済んで秋間になると、大衆も大半は暫暇し大半は分散したが、衲は尙ほ留つて無學さんを補佐し、一年餘りも居つたぢや。

四一 蚤のやうに頭隠して尻隠さず

鷄林大和尚の侍衣——本師に相見——慶應が明治と改る——越溪老漢の講席を聴く——中々な感慨——隱山下の奥の手を究む——越溪の境と獨園の境と——越溪は中々酒好き——典座寮へ酒盜坊——摺鉢を冠つて隅の方へ隠れる——こんなことは獨園にはやれぬ

衲が三十の歳ぢやつた。授業寺の雄香寺から態々使者が来て、江戸本所の天祥寺の鷄林大和尚が、本山へ輪住することになつたが侍衣がないから衲に来てくれと云ふことなので、止むなく梅林寺を暫暇し、一應平戸の雄香寺へ歸つて本師に相見した。本師も大いに喜んで、衲の誓詞の空事でないのを賞して呉れた。それから、

「江戸の天祥寺は當松浦家の菩提所ぢやから、どうか鷄林大和尚に過失のないやうに能く氣を付けてくれ。」

と云ふことで、七月の初旬に平戸を立つて京都へと赴いた。此の年の十一月には慶應が改元して明治となつた。即ち戊辰の役のあつた年で、内外多事ぢやつた。衲が道中恙なく京都花園妙心寺内聖澤庵へ着いたのは、ソーサ、七月二十五日ぢやつた。

其の年の雪安居に、山内の天授で越溪老漢の講席を參聽した。此の天授の僧堂は越溪老漢の開單ぢや。その位ぢやから中々な感慨ぢや。ソコデ衲も大いに發奮し、まだ／＼こんなとはと、それから鷄林大和尚の許可を得て、朝暮の間に於て天授に參叩し、隱山下の奥の手を究め盡した。元來越溪の境と獨園の境とは似て居るがサ、何んと云つても越溪が獨園より勝れて居るぢや。同じ隱山下でも、越溪は儀山下ぢやが獨園は大拙の法子ぢや。此の越溪は中々酒好きぢや。併し醫師に禁ぜられて飲めなくなつたのぢやが、それでも毎晩のやうに典座寮へ酒を盜みに行つたものぢや。處が或晩典座が見付けて、

「盜坊々々」

とやつた。スルト越溪は逃げ場を失ひ、摺鉢を冠つて隅の方へ隠れたが、蚤のやうに所謂頭隠して尻隠さずで、ツンと立つて居つた。こんなことは獨園にはやれぬ。越溪なりやこそぢや。關山が居つたら手を拍つて喜ぶぢやらう。

四二 一大接心して深恩を報謝せん

實父の死去 通知が来ても歸らぬ——週間大方丈の椽先に坐す——坊主の報恩に是れに過ぎたものはない——「報恩經」——目蓮が母を度したも——廣道が母の告げ——自分にも解らぬ經を讀んで成佛するか——大導師がチャンチャラをかしい

納の父は七拾一歳の高齡で遂に死んだがサ、其の時納は前にも云ふた鷄林大和尚の侍衣で、本山役位の中の五判章の一人ぢやから、實父死去の通知が来ても、歸る譯には行かない。ソコテ謂ふのには、

「是れは一大接心して深恩を報謝せん。」

と、即ち一週の間、大方丈の東南隅の椽先に坐して、古則の拈提をやつた。

坊主の報恩に禪門の法要を、是れに過ぎたものはない。諷誦看經に勝ること幾許りなるか知れぬ。出家の報恩は只だ道を得るにあるぢや。「大方便佛報恩經」にも、

「恩を知る者は當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし。恩を報する者も亦た當に一切衆生を致へて、阿耨多羅三藐三菩提心を發せしむべし。」

とある。即ち道に達することぢや。それぢやから先には母を度し、今また父の爲めに接心し

た。目蓮が六通を得て母を度したも、黄檗が母を度したも、皆な得道の上ぢや。眞淨が法嗣廣道が大悟の夜、夢中に母が報じて云ふのに、

「我が子が道を悟つたので、自分は今また天に生じて、慈氏菩薩に承事することが出来た。」

と。ぢやから出家は、殊に禪坊主になつたら、どうしても悟らにや駄目ぢや。近頃の坊主は悟ると云ふことを、荷厄介か何んぞのやうに思ふてけつかる。ぢやから報恩とか、死んだ者に供養するとか云へば、嘘ッばちの經を讀んで、それで好いことムシヤア／＼してをる。全體自分にも解らぬ經を讀んで成佛すると思ふか、馬鹿坊主どもめ。書いてある經を只だ讀むだけなら、此の頃の書生ツ坊にも出来るぢや。そんなことで三界の大導師もチャンチャラをかしい。納は眞の供養がしたくて坊主になつたのぢやから、本山の大方丈で、父の菩提の爲めの一大接心をやつたぞ。

四三 惟庵さんを迎ひの役

元の古巢の八幡へ——此の家臺骨は惟庵さん——云ひ出し屁——廢佛毀釋——禪は廢するもがならぬ——禪は皇道の根源——効能書と料理の献立——經文は食物禪は空氣——東嶺さんの「無盡燈論」——殘燈明滅の禪法を護持——拜讀に成功

本山の侍衣の役も首尾よく濟んだ。鷄林大和尚が江戸へ歸られるので、納は元の古巢の八幡へ

戻つた。處が八幡には師家がないぢやないか。ヤア誰れの彼れのと云ふたが、

「是れだけの家臺骨を背負つて立つ者は惟庵さんの外にはない。」

と納が云ふと、評席等も、

「ソレ〜。」

と云ふので、一華室惟庵さんを屈請することになつたが、サー拜請に行く者がない。ソレデつまり云ひ出し屁ぢや。納に行けと云ふので、愈々筑後の大勝寺まで拜請に行くことになつたぢや。尤も納は非役でもあつたから、丁度好いと云ふので出掛けた。

其の頃は廢佛毀釋が朝廷の輿論ぢやなぞと思ひ誤つてサ、中々やかましい時節ぢやつた。ヤア八幡大菩薩を八幡大神とするの、權現や明神號を廢するの、兩部神社から佛體を退けるのと騒いだり、それから又た是れ迄坊サマの特權であつた宗判なんと云ふものも廢し、朱印ぢや黒印ぢやと云ふ寺院の維持物も取放される時ぢやつたから、禪道でもあるまい、イヤお悟りでもあるまいと云ふ坊主共もあつたが、納は如何な政治の世になつても、禪は廢することがならぬと、チャンと臍の下が決つてをるからサ、ビクともせぬ。天地が引ツくり返つても、禪坊主は禪坊主の道を遣れ、世の中が亂るれば亂れるだけ、禪坊主が骨折らにやならぬと務めた。何故ならばサ、禪は

皇道の根源、佛法の總府、一切萬物の淵源ぢやもの、是れが減する時にや國家も人類も減するのぢや。そんな馬鹿なことがあるものか。他宗は知らぬこと、金輪際、禪はつぶれぬ、納が保證するぞと、一華室にも申上げたぢや。

是れを解り好く云はうぞならば、他宗は皆な藥の効能書か料理の献立みたやうなものぢや。能書を讀んだだけでは病は直らぬ。献立を見ただけでは腹はくちくならぬぢや。矢ッ張り藥は吞まねば利かず、料理は喰はねば旨味は知れぬぞ。つまり禪は吞み喰ふ其の實作用ぢや。百千の經文を讀んでも、能書を見て、是れは千金丹萬金丹と云ふだけぢや能書も要らぬ譯ぢやないか。元來根機々々のものぢやがサ、人間に必要な程度から云ふと、食物と空氣とのやうなもので、食物は一週間や二週間は食はなくても生きてゐられるが、空氣の方は左様はいかぬ、一會間も空氣が無くても暮されぬ。經文は食物ぢや、禪は空氣ぢや。

此の臨濟の語は一度前に引用したことがあるが、臨濟も教相を調べた上、

「此れ濟世の藥、表顯の説なることを知り、遂に乃ち一時に抛却して、即ち道を訪ひ禪に參す。」と云ふて居るぢやないか。いかに王政復古しても、いやサ、復古すればする程、禪が大切となるぢや。惟庵老漢、法の爲め喪身失命を避けず、八幡に移董せられたい。と、辭を盡して屈請す

ると、老漢も衲の此の言を喜ばれて、遂に御聖頭下されたわい。

其の時衲は左様思ふた。世の中が皆な廢佛しても、衲一人は踏止つて佛心印を傳へんと。大風が吹いても、燈火は隻手に取留めてみせるぞ。昔、東嶺さんが自著の「無盡燈論」に、

「譬へば諸人の、夜、曠野に在つて行く時、狂風暴風、提灯を吹滅する時、一人有り、只だ燈の滅せんことを恐れ、身を以て左右に擁護し、餘は總に顧みざるが如し。」

と云ふてある。實にハヤ、斯う無うてはならぬ。衲が惟庵さんを拜請したのも、只だ此の那人底となつて貰ひたい爲めぢや。即ち自分も將來に此の一人となつて、殘燈明滅の禪法を護持せねばならぬ。假令月は熱からしむべく、日は冷かならしむべくとも、我が此の願力は盡きぬぞ。此の一機で拜請の事、全く無事に畢つた。

四四 三十一歳で初めて寺持

徳山の大成寺——毛利家から請ぜられる——本山の開山塔前で垂示——徳山の垂示——本山にもしつかり者が居た——衲は詩は下手ぢや——詩の上手なのは獨園——越溪の詩——衲の垂示には深度があるぞ——塔前の誓願文——能く彼んな事を誓つたものぢや

毛利元蕃侯の菩提所は周防徳山町の般若山大成寺と云ふ寺ぢやが、衲が江湖で大分名前が賣れたものぢやから、衲を拜請したいと申込んで来た。ズルト八幡の者等も頻りに勸發するものぢやから、明治二年の十月、愈々其の請に任せて大成寺に住することになった。衲も三十一歳で初めて寺持ぢや。

ソコテ早速本山へ上つて、開山塔前で垂示をやつた。此の垂示と云ふは釣語ぢや。爲人の手て垂れ、直截の語を以つて垂誠教示するから垂示と云ふのぢや。示衆とも云ふ。例の徳山が、

「道ひ得るも也ま三十棒、道ひ得ざるも也ま三十棒。」

と垂示したやうに、本山の開山微笑塔前でやつた。其の頃は本山にも大分しつかりした者が居つたから、中々容易ぢやなかつたよ。其の時衲が別語はサ、

「嘗つて暮雲の句に參すと雖も、直に今に至つて未だ十成ならず。這裡風頭稍難し、暫く吃處に歸して商量せん。」

と、衲は詩は至つて下手ぢや。あれは平素稽古するとせぬとで巧拙があるぢや。衲は詩より大事な事に精神を籠めたので、詩の稽古をする餘裕がなかつたのぢや。ぢやから衲なぞの詩は詩人から見たら半文銭の價値もなからうが、其の代り境界遂に至つては又た詩人が及ばぬぢや。

詩の上手なのは猶園ぢやつた。彼の人の詩に、

「道や須臾も離る可からず、咳唾掉臂又た何んぞ疑はん。日長く書を讀み禪坐に懶し、伏して看る前山雲起る時。」

と云ふがある。中々あぢをやつとる。結句などは殊に面白い。王維の風骨がある。又た越後には、「行脚は須らく行脚の眼を具すべし、住山は自ら住山の機有り。山僧這箇の要を打せず、一片の白雲絶崖に倚る。」

と云ふた。多少文字には圭角があるやうぢやが、二人共に近代稀に見る宗匠ぢやつた。併し衲の垂示には深處があるぞ、看よく。

それから異例ぢやが、微笑塔前で斯う云ふ誓願を發した。云ふてみやうぞならばサ、

「某甲、上菩提を求め、下衆生を化す。衝天の志は常住間斷無けれども、般若に於て未だ因縁少きが故に、願くは古人の心髓に一々徹底し、吾が朝、應燈關の眞風を扶起し、入下の蔭樹と成つて廣く群生を度し、一箇半箇にても有力の衲僧を打出し、佛祖の深恩に報せんを。又た伏して願くは、食輪法輪をも能く轉じ、壽命長久し、和合を專一にして、今日此の會裏に逢る處の道俗男女を始め、前河大地、有情非情、蠢動含靈、詞句の盡に至る迄、普く一切衆生

を度し盡さんことを。雲へ虚空は盡くるの日有るとも、此の我が願身は究なきなきを。無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成。」

と、關山國師塔前に提示した。本山に垂示も澤山有つたさうぢやが、衲のやうな入誓願を立てた者は未だ無いとのことぢや。今ま思ふても、能く彼の頃あんな事を誓つたものぢやと思ふ位ぢや。無學さんは此の誓願を甚く褒めたことぢやつた。

### 四五 雲水同様な遣方ぢや住持とは云へぬ

千七百則を透過せねば此の意子合は解らぬ——行雲流水の有様——東嶺さんの函嶺の詩——雲衲は求道時代住持は傳道時代——住持に三種有り——書生時代と居士時代——住持の三莫——昔は住持はない——世の推移で仕方がない——住持は傳法傳燈の二つ——轉位の意義を忘れるな

さて雲衲と住持とは同じやうぢやが勝手が違ふものぢや。眞物でないとは是れをゴツチャにして住持の本分も盡さぬと云ふやうなことになる。住持ぢやからと云ふて、年忌とか檀那の葬務だけ遣れば、宗旨には構はんでも好いかと云ふと、そりや又た大變な間違ひぞ、と云ふて寺持になつても雲水同様な遣り方ぢや住持とは云へぬ。茲に萬重の難關があるぢやテ。千七百則を實地に透

過せにや此の意子合は解るものでない。

雲衲時代はサ、只だく袈裟行李を掛け、師を尋ね道を訪ふて天下を横行して歩くぢや。實に  
行雲流水の右様ぢやから雲水とも云ふ。居住不定ぢや。東嶺さんが函嶺の關を通つた時の詩に、

「月に嘯き風に吹かれて獨り往還す、弊衣白髮又た瘦顔。生縁は江國神崎の里、住處は洛陽正  
法山。俗を捨て家を離れて佛界に入り、師を尋ね道を求めて人間を出づ。元來宗旨は是れ臨濟、  
只だ願くは吏官透關を許せ。」

と、此の境地が雲水で、直に是れ又た住持ぢやが六ヶ敷しいぞ。

畢竟雲衲は求道時代ぢやが、住持は傳道時代ぢや。併し此の傳道ばかりが住持の役目ぢやない  
テ。「聖因録」にも

「古徳住持に三種有り、一に説法、二に安衆、三に修造。本を捨て、外は住持と爲す。」

と有る通り、修造も怠つてはならぬ。誰れでも住持たる者は、此の心得がなくてはならぬのぢ  
やが、今時の住持は此の中の一ヶ條をも具へて居らぬぢやテ。是れは坊主ばかりぢやない、一家  
の戸主となつた者も、矢張り此の心掛けがなくてはならぬ。書生時代も戸主時代も一つに見てはな  
らぬぞ。書生ツボの量兒を直に戸主に用ゐたら、大方は資産を失ふぢや。坊主なら常住、物を

保護すること、我が身を持つるがやうにするぢや。それが又た住持の一役ぢや。密庵は「住持の  
三莫」と云ふて、

「事繁きを懼るゝ莫れ、事無きに尋ぬる莫れ、是非辨する莫れ。住持の人、此の三事に達する  
時は、外物に惑はさるる事を被らす、」  
と云ふてをる。

全體昔は住持なぞと云ふことはなかつたものぢや。到る處に於て道を求め道を傳へたのぢやか  
ら、窟居や穴居なぞをして居つた。處が支那あたりでも百丈和尚時代に禪風が盛んで、上は王  
公宰相より下は儒老百姓等に至るまで、風に飄つて道を問ふ者蕃き處から、其の位を崇ぶでない  
と、師法嚴でないで、初めて師を奉じて住持とすることに、是れ、長老と呼んだものぢ  
や。印度あたりでは舍利弗とか須菩提とか云ふたやうに、齒徳俱に尊きを住持としたが、今時は  
齒徳に關係せず住持する。是れも世の推移で仕方がないが、心得て居らねばならぬぞ。「住」とは  
壞さざること、「持」とは生長を助けることぢや。住持は坊様の専用語ぢやないぞ。政治家でも軍  
人でも、畢竟住持ぢやなうてはならぬ。

「禪苑清規」の尊宿住持に、

「佛に代つて化を掲げ、知事に表異す、故に傳法と云ふ。各一方に處して佛の惠命を續ぐ、斯を住持と云ふ。初めて法輪を轉す、命出世と爲す、師承據る有り、乃ち傳燈と號す。」と、ぢやから住持は、傳法、傳燈の二つを兼ねるぢや、大切なものぢや。納は本山の微笑塔前に一大誓願を立て、轉位したのぢや。師位に登るを轉位と云ふが、實にハヤ全く意を濟度門に轉せねばならぬぞ。「轉位」の意義を忘れてはならぬ。在家では是れ家督相續ぢや。婚儀の大禮を舉げ、新しく家庭を造つた處ぢや。學問の時代を去つて、學問を實地に應用する時ぢや。所謂度生時代を云ふのぢや。

#### 四六 納が僧兵の大將ぢやつた

大樂源太郎の叛亂——城下の騒動——混成隊を組織——赤松連城、島地默雷等——昔の山法師も斯くや——普通の大將よりも幅が利いた——武士の心は菟藟玉——膽力の試験をした——晝は戰備に夜は坐禪——鐵の如意で指揮

明治三年の冬頃から徳山の城下が騒しく、大樂源太郎などと云ふ賊徒が蜂起して、愈々四年の正月には大亂ちきとなつたので、藩中は上を下へと大騒動ぢや。左様になると種々根も葉もない風説が起つて、所謂風聲鶴唳にも戰々競々たる有様で、其の騒ぎと云ふたら一通りでない。

ソコデ其等の賊黨に備へる爲め、坊主とか醫者とか神主とか儒者とか、さう云つた團體が、一種の混成隊を組織してサ、一同君國の爲め働くことになつた。坊主の隊中には赤松連城ぢやの、島地默雷ぢやの、阿川法量ぢやの、それから曹洞宗の見性院……名は思ひ出せぬが、そんな連中が居つたぢや。昔の山法師も斯くやと思ふばかりで、盛んに賊徒と遣り合つたものぢや。

納かサ、納は僧兵の大將なんぢや。普通の大將よりも幅が利いたよ。何故なればサ、他の武士は甲冑などを着けて威張りくさるが、心は菟藟玉ぢやからブル／＼ものぢや。つまり臍下がお留守ぢや。そこへ行くと納は上着は木綿の衣でも、腹が動かぬからビクともせぬぢや。膽力が据つて居ると云ふのは是れぢやらう。ソコデ藩中の武士達が、自然と納を尊敬するやうになつた。納は實際此の時に自己の膽力を試験したのぢや。ソレデ何時も混成旅團を集めて、大成寺の廣庭で、擊劍もやるが槍術も弓術もやるぢや。夜は坐禪して晝は戰備ぢや。其の間には説法もして居る。其の頃は未だ南天棒は持たなかつたから、鐵の如意で指揮したものぢや。

#### 四七 戰爭中に寺を建て禪堂も開く

戰爭は權行——物は容れる器が無くては入らぬ——澄泉寺の再興——専門道場の



開單——「寶鏡三昧」の揚唱——昔は揚唱を禁止——白隠が遂に宮中にて講ず——  
寶鏡を講じた仔細——潛行密用——坊主頭に鉢巻して魚屋の店を開く——普化や  
盤山——三十餘名の大衆——托鉢の許可

衲が僧兵の頭になつて防戦に務めたのも、是れ權行ちやから、濟度の本願は寸時の間も怠らぬ。兵を催促しても、夜は皆な一炷坐を遣らせたものぢや。處が世は常闇の世界なぞと云ふて、坊主共にも還俗する奴も有りサ、又た坊主でゐながら、食碌を剝がれて衣食に困るとベツを掻く奴も有りサ、寺なぞは破れ次第と云ふ有様ぢやが、衲は、物は先づ容れる器がなくては入らぬと思ふて居るから、此の戰爭中に境内に在つた澄泉寺と云ふ寺を再建したり、専門道場も開單して、明治四年の春から「寶鏡三昧」を提唱した。

此の「寶鏡三昧」は洞山の眞髓ぢや。テ、昔は是れは講ぜなかつたものぢや。櫻町帝の朝に、寶鏡院と云ふ宮様が、黃檗の百拙和尚に、

「此の「寶鏡三昧」を講ぜよ。」

と仰せられたが、百拙和尚は、

「古來此の書を講ずることは禁止してありますから。」

とお断りしたと云ふことぢや。それを白隠が聞いて、

「馬鹿なことを云へ。佛祖の心を明むる者が、佛祖の言教に就て盲啞の如くで居ることかあるものか。」  
と、そこは流石に白隠ぢや、遂に宮中に於て講じたので、宮中でも大いに喜ばせられたと云ふ位ぢや。

衲が爲人度生の眞最初、而も戦亂の巻となつてをる徳山町で、「寶鏡三昧」を講じたのは抑も仔細があるぢやテ。「寶鏡」の終りに、

「潛行密用は、愚の如く魯の如し。但だ能く相續するを、主中の主と名く。」

とある。此の相續が六ヶ數いぢや。廢佛毀釋、ソラうまいお觸が出たなぞと、坊主頭に鉢巻して、魚屋の店でも開かうと云ふ奴輩には、相續なぞと云ふことは爪の垢程もないぞ。身には具足を着け、腰には大刀を横へて、千軍萬馬を往來しながらも、佛徒は是の中に佛の惠命相續がなくてはならぬ。それがサ、時々境に奪はれ易いものぢやから、平生寤寐恒一に行かぬので、動もすると魔に親はれてからに、逆境に逢ふと、平素の意氣も志操も、何處へやら行つて仕舞ふぢや。それが修行が充分にしてない馬鹿の證據ぢや。

潛行密用ぢやからと云ふて、何も片蔭にかゝり込んで居るのぢやないぞ。ぢやと云ふて又た、

見得に坐禪するのでもないぞ。普化や盤山の遣り方を看よ。作務の間にも、行住坐臥の四威儀の間にも、正念工夫相續絶え間はない。ちやから馬に乗らうが、槍を突かうが、皆な密用ぢや。即ち「潜行」は不露、「密用」は不覺ぢや。何をして居るとも知れぬのが潜行ぢや。實にハヤ凡とも聖とも名付けられぬぢや。それから仕様とも思はず爲るのが密用ぢや。明治初年の人心の混雜した時に、此の潜行密用底を提唱したので、氣有る者は皆な集つた。羅山下の舊隨等も追々集つて来て、遂に三十餘名の大衆となつたものぢやから、毛利家から國內托鉢の許可が出た。周防の國で托鉢許可は是れが始めぢやつた。何んでも法有れば食有りぢや。坊主でありながら衣食の爲めに念慮を費すなどは地獄の沙汰ぢや。

四八 提唱は相撲の寄せ太鼓サ

提唱は止むを得ず遣る——初めての提唱——古人が何を苦んで修行するぞい——雪山會の提唱——提唱する間に入室を聴く——入室せぬと伸びぬ——何んでもムツ、ムツ——寄せ太鼓で正因を結ぶ——世間には太鼓叩きや太鼓持

納は全體若い時から提唱は嫌ひぢやつた。併し大衆等が懇請するものぢやから、止むを得ず遣るぢやがサ、提唱が何んになるかい。大成寺の開單前に「寶鏡三昧」を講じサ、それから續いて

「臨濟録」を講じたのが納の提唱の初めで、それ以來と云ふもの、九州ぢや紀州ぢや近畿ぢや東京ぢや、又た山形、仙臺、信州と、各處で随分提唱も遣つたがサ、是りや皆な寄せ太鼓ぢや。提唱で禪が解る位ならばサ、古人等が何を苦んで修行するぞい。

納が一番永く參禪を聽いて遣つて居て提唱しなかつたのは、東京の雪山會ぢや。雪山會の話は後に出るがサ、此の會は初めの名を接心會と云ふて、日本橋濱町の楠田病院長楠田謙藏の主唱で明治三十七年二月五日に發會したのぢや。それから毎月上京したが、修行だけで提唱はせなかつた。併し同會でも居士や大姉連が、學人激勵の爲め是非提唱をと云ひ、講座臺や蒲團を造るやら柱杖ぢや見臺ぢやと、種々なものを拵へたものぢやから、詮方なしに毎月一回づゝ遣ることにしたが、イヤハヤつまらぬことサ。

いつも云ふが、提唱は角力の櫓太鼓サ、人寄せばかりサ。何んの粕にもならぬ。提唱する間に入室を聴けば、十人や二十人位は聴けるよ。入室せぬと伸びぬから、精進して入室するが好い。字面の講釋や繪解を聞いただけでは悟りは開けぬ。何んでもムツ、ムツと下ッ腹に力を入れて正直に遣るに限るぞ。併し左様は云ふものゝ、又た此の提唱の寄せ太鼓が縁となつて、正因を結ぶこともあるから、マア、やつてみるかな。全體納は太鼓叩きや太鼓持は大嫌ひぢや。併し

世間は太鼓揃ひぢや。それで一派に禪坊主で候のと通用して居る。世の中は様々ぢやなア。大成寺でも宗啓や元實が是非にと云ふので、詮方なしに提唱したのサ。

四九 ウフン入齒がゆるんだ

説教師とは如何ぢや——三條の教憲を提唱——衲の説教は悪口云ひとの評判——泣く笑ふが本領ぢやない——「臨濟録」が説教一生の話題——自己の實を失却——外面禪坊主内心他力坊主——悪口が人前で云へれば一人前——何んでもなけりや何んともない——大教院へ注意

衲は提唱でさへ嫌ひぢやと云ふ位なのに、説教師とは是りや如何ぢや。併し是れも詮方なしサ。實は其の頃は宗旨も教意も知らぬ坊主ばかりぢやつたから、誰れも説教の遣り手がない。三條の教憲を讀み得る者さへ碌々無い始末ぢや。ソコで衲は山口縣管内の説教を受持つことになつたら、草鞋掛けでサ、管内を一週して、三條の教憲を提唱したぢや。

衲の説教は宗旨の根本を引ッ擱んで云ふので、お世辭や追従は樂にしたくも無い。ぢやから中には、波りや悪口云ひぢやと云ふ者もあつたが、是れが法に親切と云ふものぢや。衲の眼から見ると、今の説教師は皆な他宗の受賣りぢや。教者法師の眞似ぢや。嘘ッばらばかりの説教をし

てサ、ヤア泣いたの笑つたのと、祭文がチョンガレ語りの積りで居る。イヤハヤ呆れたものぢや。そりや對機説法ぢやから、笑はせもし泣かせもするも好いが、それは本領ぢやないぞ。大籠棒め。禪宗坊主の説教ならばサ、宗旨が籠つて居らにやならぬのに、教相や他力の本體を、自己の宗旨のやうに心得くさつて、得々として説いてけつかる。其奴等の云草がサ、「どうも禪は説き悪い、宗旨の安心が説けぬ、話の好い資料がない」などと吐かすが、禪修行をせぬ奴が、禪宗の説教をするものぢやから、宗旨は愚か、禪のぜの字も口にせられたものでない。それから話の好い資料がない處ぢやない、佛教中に禪の書物程多いものはない。祖師方の修行など、何百年説いたとて説き盡せるものぢやない。「臨濟録」を讀んでみい。彼の録だけでも、説教一生の話題はあるぞ。それを「俱舍」が如何の、「起信」が如何のと、只だ賢首や、馬鳴を持出さ。それも悪くはないが、亂りに他人の實を穿鑿して、見事な自己の實を失却せんとして居る。そんな者がサ、説教など出掛けた處で、本願寺あたりのお談義を受賣りする位が關の山ぢや。丁度大學の教師共が、西洋の學門を受賣りすると同じぢや。禪宗の坊主なら坊主らしく禪宗のギリ／＼を説くが好い。白隠ぢやないが、佛祖の心を明めんとするに、佛祖の語を説くに何んの差障りがあらうぞい。説くことの出来ぬのは、自分が禪の修行をせぬ、畢竟禪坊主でないからぢや。形振ばかり紺

の緞子直綴に括り手巾でも、腹の中は輪袈裟の南無阿彌陀佛ぢや。外面禪坊主の、内心他力坊主ぢや。

衲が説教は長たらしくもないが、禪宗の真箇を話したものでぢや。世間では悪口ぢやと云ふがサ、只の者にや此の悪口は云へぬ。悪口が人前で云へるやらなら一人前ぢや。心が狭いから悪口を云ふなぞとは、そりや自分が狭い心から割り出した文句ぢや。サ一此の南天棒のやうに、人天面前で悪口を云ふてみよ。

茲に好い一句がある。衲の云ふことを悪口呼ばりをする者に聞かせて遣らうかい。

惚れてるりやこそ格氣もするが

何んでもなりや何んともない

ウフン入齒がゆるんだ。

衲がサ、山口管内の説教で、ウンと坊サマ方を激勵したが、彼の通りの説教で押通したら、西洋受賣りの學者達を勸化することも出来て、今頃は可成り國家に貢献して居やうものを、惜しいことぢやつた。それも禪坊主に意久地が無かつたからぢや。其のことで衲は東京の大教院へ出て迄注意したが、深い考のある者がないので、衲に山口縣の教部取締を押付けたまでぢやつた。

五〇 諸國を巡つて説教の検査をする

當時の大教院——大教宣布の爲め——管長を置く——瑞應軒繁巖和尚——教導職を十四の等級——竺川さんの草稿——是れ丈のことも云ひ得ない——神德皇恩の説——宗旨の宣布が大事——「臨濟録」の一本槍——道中で室内の穿鑿——中原姓は毛利家から拜領

衲が出頭した頃は、大教院は芝の増上寺に置いてあつた。そして其の佛前には、天御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神、天照大神の四つの牌面が有つて、拍手をボン／＼拍つて拜したものでぢや。

處で衲が歸國しやうとすると、本山から、

「丁度好い折ぢやから、大教宣布の爲め、東海道を初め諸國を巡つて、どうか説教の検査をしてくれ。」

とのことぢや。確か此の年(明治五年)の十月、管長と云ふものを置いたかと思ふ。此の説教の検査は妙心ばかりぢやなく、大徳の方からも同じやうな依頼ぢや。是れは衲も前から慮つて居つたことぢやから、大法の爲め宜しいと引受けた。

ソコデ柄は、大徳妙心兩派の議事と云ふ名義で諸國を巡るぢや。まだ其の時は南天棒は持たなかつたがサ。此の時同行したのが瑞應軒鰲嶺和尚ぢや。瑞應軒には見性寺の會中に入室して、針芥相投の閻柄ぢや。先づ共に東京を發して、東海沿道の國々で説教しながら、坊サマ方の説教の検査を遣つたものぢや。

其の時サ、大教宣布の主旨で僧侶は皆大教導職に就くぢや。それを十四の等級に分け、検査に依つて夫々職名を附けるのぢや。其の時竺川さんが持つて來た書物が未だ残つて居る。是れを見ても當時の宗教觀念と云ふやうなことが能く解るぢや。此の時代には是れだけのことを云ひ得る者は少なかつた。今時の人でも突然ぢやつたら、とても斯うは云へぬかも知れぬ。

神德皇恩ノ説

夫レ神德ノ洪大ナルハ我が朝ノ別道ニシテ、異邦不俱ノ正教ナリ。萬世不泯、何ノ道カ是レニ比センヤ。謹ンテ其ノ端由ヲ窺ヒ奉ルニ、恰カモ管見ノ及ブ處ニ非ラズ。矧ンヤ微力ニシテ、訓導ノ學解ノ理ニ任セテ述作スル事ヲ得ンヤ。苟モ講録ノ任ニ加ヘラル、然レバ默シテ已ム可キニ非ラズ。敬ツテ名題ニ就イテ讃言シテ曰ク、

天尊常在鎮座（アマツカミトコマシニシヅマリマシ玉フ）豐原中國ニ神籬（カミガキ）ヲ建テ、磐坂（イハサカ）ヲ建テ、神德ノ大道ヲ垂レ玉フ。億兆ノ生民、之レヲ仰望スルコト、是レ敬、是レ慕、一人之

レヲ拜スレバ、一人ノ邪氣之レヲ殺フ。萬人之レヲ拜スレハ、萬人ノ邪氣之レヲ殺フ。照臨堂ニ疑ヒ有ラシヤ。是レヲ以テ天地位シ、萬物育ス。天真ノ神明照々タルコト斯クノ如シ。當今維新ノ政令ニシテ、愈神德ノ光輝ヲ増シ、皇上ノ恩澤、日々新ニ浴スルコト限リ無キナ蒙ル。猶ホ餘烈ノ異邦ニ赫クコト、日輪ノ應用ニ齊シク、行ハズシテ其ノ德ニ化シ、施サズシテ其ノ功大イナリ。辱クモ此ノ教ヲ護持シ奉リテ、海ノ内外ニ播揚センコトヲ欲ス。然レモ此ノ教體ヲ解シ得ル者鮮キニシモ非ラズ。故ニ新ニ教院ヲ建テ玉ヒテ、億兆ノ者ヲシテ、其ノ實感ヲ得セシムル、隨喜ノ至リニ堪ヘズ。是レ其ノ職任也。

是れは竺川さんが提出した訓導の職任を述べたものぢや。此の時既に神佛混合の大教院ぢやから、宗旨を説く者がなかつた。それを柄は宗旨の宣布が大事ぢやと、鰲嶺さんにも勸めて、東京の間で大いに其れを宣揚した。其の頃柄は「臨濟録」の一本槍で、胡も漢も説き付けたものぢや。そして道中でも夜分になると、瑞應軒と室内の穿鑿ぢや。老漢もさぞお困りぢやつたらう。スルト丁度遠州の小夜の中山まで來ると、知事公の毛利元落侯にバツタリ行き遇つた。早速面謁すると知事公も大いに喜んで、

「それは誠に結構なことぢや。何卒國家の爲め、維新の大業を宣傳して呉れ。處で近頃は僧も苗字を名乗ることになつたから、貴僧も苗字がなくてはならぬ。依つて以後中原と名乗られるが好い。」

とのことで、即ち極の姓は毛利家からの拜領りや。

五一 頓狂な落書が出たもの

教部の問題でやかましい——未派を視察する必要——今の時世に能く觀てをる——先づ第一に坊主共の根性骨から——四人の視察員——中國から四國九州——梅林寺の臨濟會——春徳寺の五祖録會——師學共充分に檢探

さて京都へ歸つてみると、此處も教部の問題やら大教宣布やらで大分やかましい。此の際それ未派を視察して、心得違ひのないやうにせねばならぬと云ふことはサ、此の頃には時勢の混亂して居るのに乗じて、随分頓狂な落書が出たものぢや。其の中で最も珍妙なのを一つ、見本としてお眼に掛けうか。是れも衲より外には知り手があるまい。明治元年に出たのぢやが、こんな下らぬことを能くも眞面目に書いたものぢやと思ふ。サーそれが如何あらうぞなれば。

今般暴政御一新に付き、異國御尊敬遊ばされ候御場合、追々儒佛廢せられ候へば、陽に神道御興復と唱ふるも、其の實は陰に異國妖術御信用、萬民長く土薩の苦に陥入れ度き英慮に候へば、仁義忠孝の教導は總べて止められ候。巳に早春、伏見淀八幡戦争の節、一時の勝色を見て、藤堂始め譜代の面々、貳百五十年の徳川家の重恩を打捨て、忽ち叛心し、官軍に附屬致し候不義を見習ひ、強慾強心を以つて、富家と見込み候へば押入り候て、金銀は勿論諸道具衣類、分捕と名付け、亂りに取上げ申す可く、將に五畿七道には亂

武士巡行して頗る暴舉——強盜淫勝手次第相働き申す可き様仰せ出され、尤も人倫の道は毫厘も知らず、歌類同様の西洋人深く御採用の折柄に候へば、坊主を除くの外は、宮堂上、士農工商は謂ふに及ばず御坊非人、穢多の差別無く、至極無道の者を御選舉、重役重任に登庸遊ばされ候間、厚く此の儀を畏み奉り、聊かたりとも正路正直、慈悲憐愍の念慮有之候ては、御趣意に相忤き、相濟まず候間、精々暴惡無道の所業致し、逐日蘭國と相成り候様專一に心掛け申す可く、若し心得違ひて、治國平天下、萬民塗炭の苦を救ひ候やうの者有之に於ては、屹度嚴科に處せらる可き事。

但し如何底の惡業を働き候ても金納し候はゞ、速に其の罪御宥恕仰付けられ候事。

バテレン 喪祭職  
内 國 偽 定

こんな惡戯をする者もあつて、國內の人心が浮動して居ることは、丁度大正の今の時世に能く似て居るぢや。それには先づ第一に坊主共の根性骨から直さなくてはと云ふので、靈源寺(長崎)の惠範と、養源寺(長崎)の三關天恵と、關魯山と衲と、斯う四人に、大德妙心兩派の視察員と云ふ名義で、日本全國を巡れと云ふぢやないか。そんなことは一寸ツくらチヨンとは出来ぬから、先づ手近な處で、中國筋から四國九州を巡つた。

此の時に久留米の梅林で、無學さんが「臨濟録」を講じたものぢやから、大成寺からも二十名

の雲衲を掛塔させてサ、衲を巡廻講事の職を以つて、隨喜がてら其の模様を檢探したぢや。それから其處を終るとサ、長崎の春徳寺にも五祖録會があつて、是れも矢ッ張り無學さんの講師ぢや。衲は是れにも隨喜して、夜は入室もし、師學とも充分に檢探した。殊に長崎は大寺の在る處ぢやし、又た有名な牙門調への有つた處ぢやから、一層仔細にした譯サ。

五二 南天棒找出しの一條

道號は鄧州——室號は白崖窟——南陽慧忠國師の因縁——肅宗代宗兩帝の師——「提唱碧巖集」の天覽——牛小屋の片隅に南天樹——二百年餘の樹齡——斯うして置けば只の南天——法器となつて萬世迄鳴り渡る——竹篋にして天下の衲僧を打出する——それぢや貴公は南天棒ぢや——巡廻講事を辭職

衲も生れる時から南天棒ぢやなかつたサ。是れは何時となく人が付けて仕舞ふた名ぢや。衲の幼名は慶助ぢや。又た父が衲の孝心を賞で、後に孝次郎と改名した。それから坊主になつた時、師匠が安名して全忠と云ふたぢや。是れが基となつて、轉位の時道號を鄧州と付けた。それに羅山老漢から印可の時に白崖窟と云ふ室號を貰ふた。夫れも是れも皆な恩師の命名ぢや。處で別に名字に着する譯ぢやないがサ、衲の道號、諱から室號は、皆な南陽の慧忠國師の名に

因つて附けたのぢや。忠國師はサ、支那の南陽縣鄧州の白崖山檀子谷に庵居して、四十年、山を下らなかつたが、其の道風は帝都に聞え、遂に肅宗帝の勅を辱ふして、肅宗代宗兩帝の師となられた位の人ぢや。サー「忠」の一字から出て、國師は山を下らなかつたが、衲は全國を行脚せんとしたのぢやぞ。ソレデ衲の塔處は南陽塔とした。今は焼けて無いが、東京の道林寺に山岡鐵舟の髮塔と共に、山岡が隸書で書いて建てた。ぢやから海清寺の塔處の塔も南陽塔と云ふぢや。ソコデ衲も得度後は計らずも忠國師を丸出しにした。至尊の勅こそ拜せねども、畢生の力を盡して講出した「碧巖集」は、辱くも 今上天皇の天覽を賜ふた。是れも「忠」から生れた衲が奉公の一片ぢや。

サー南天棒か。此の南天棒はサ、今も云ふた衲が九州巡廻中、日向から豊後に到らうとする國境で、村の名は今では忘れたがサ、或處の百姓家 牛小屋の間の片隅から、ニヨロ〜と道路の方へ出て居る南天の樹があるぢやないか。ア、大きな南天ぢやナ。衲が是れ、處々方々を檢探して龍蛇を辨する竹篋代りに丁度好いが、彼れは貰へないぢやらうかと思ふて、同行の天恵和尚や恵範和尚等を路傍に待たせて置いて、牛小屋の前で豆か何かの干換をして居つた其の家の主人に、「是りや實に見事な南天ぢやのう。」

と云ふと、主人は得意らしく、

「此の南天は祖先が手殖えしたと云ふことで、モウ二百年餘も経つて居ります。」  
と云ふ答ぢや。ソコデ納が、

「斯うして牛小屋の隅へ置けば只の南天ぢや、是れから何年の壽命か、一度は枯れるぢや。併し枯れたとて何んの變哲もない、只だ家内の者等が惜しいことをしたと云ふだけぢやが、是れが納の手に入ると、一つの法器となつて、萬世まで此の南天が嗚り渡るが、如何ぢや納に呉れぬか。」

と云ふと、其の主人は、納の云ふことが解つたとみえて、

「いかさま、仰有る通りぢや。今ま貴僧様の手に渡れば、南天も是れまでに大きくなつた甲斐があるよと云ふもの。ア、よろしい、早速差上げませう。」

と二つ返事で、山鋸を持つて来てサ、ズイコ〜と挽切つて、手頃の棒にして呉れたぢや。納は樹が切られる間も心念して、

「我れ、二百餘年の壽を保つ汝に、大慈悲を爲す。汝の大死一番を活用せずんば措かじ。」  
と、確く誓つた。そして杖つた跡の根株には、大悲咒一卷を懸向したぢや。

ソコデ納は其の南天棒を擔いでサ、鬼の首でも取つたやうな心持ちでからに、主人には厚く禮を述べて出て來ると、待ち疲れてゐた三人は、太い南天に驚きながら、

「貴公は其んなものを何にする積りか。」

と問ふから、納は、

「是れが納の竹篋ぢや。是れで天下の納僧を打出するのぢや。」

と云ふと、

「それぢや貴公は南天棒ぢやなア。」

と、期せずして三人が一處に「南天棒」と叫んだ。それから道中の間も、「大成寺さん」とも「鄧州さん」とも云はず、「南天棒々々」と云ふた。ぢやから「南天棒」の名附親は、彼の議事の三人ぢやつたと云ふても好い。此の南天の棒は、後に三尺五寸の長さに切つてサ、「臨機不讓師」の五文字を刻み付けた。

處で納は此の巡廻申に、こんな形式的の巡廻位して居つたのでは、とても間尺に合はぬ。どうしても此の南天棒を振り廻さなくてはならぬと思ふた。大法の爲め黙止することが出来ぬからぢやつた。ソコデ一旦京都へ歸つて議事の脇坂南谷に委細の旨を含め、納は断然巡廻議事の職を辭



して大成寺へ歸つた。マア南天棒杖出しの一條を知つて居る者も、今は關魯山和尚一人ちやらう。

五三 雲衲時代に遍參の師家二十四人

虚堂和尚の「十病論」——病根は一師一友——入室した師家の連名——土手ツ腹は見抜いてある——衣を更へて師位——眞劍勝負の道場巡り

衲は遊學中サ、虚堂和尚の「十病論」を讀み、

「病は一師一友の處に在り」

と云ふを見て、是りや普く師家の室を叩くべきものぢやと思ふたから、師家に相見すれば、必らず其の室を窺ふ。思へばサ、丁度十八歳の時、石應老漢に附隨して以來、大會ぢや何んぢやと云ふて、參叩した師家が二十四人あるぢや。其の人々の名は斯うぢや。

- 城州八幡僧堂 萬松軒 石應老師 (卓州下) 二ヶ年掛塔
- 濃州天澤僧堂 王桃軒 萬寧老師 (隱山下) 大會中
- 尾州大仙寺 積翠軒 龍水老師 (海門下) 同
- 遠州奥山僧堂 積翠軒 龍水老師 (海門下) 同
- 遠州内野僧堂 牧牛庵 伊山老師 (卓州下) 同

- 濃州虎溪僧堂 養松軒 雪航老師 (同) 同
- 豆州龍澤僧堂 相樹軒 星定老師 (同) 同
- 相州永田僧堂 相樹軒 星定老師 (同) 同
- 江州永源僧堂 枯葉室 海州老師 (同) 同
- 妙心天球院 棲雲軒 薩門老師 同
- 肥後見性僧堂 鷲王軒 蘇山老師 (卓州下) 三ヶ年掛塔
- 濃州梅谷僧堂 瑞道老師 (隱山下) 妙心寺大遠諱中
- 豐後洞明寺 廉州老師 洞明寺大會中
- 豐前永福寺 無住所庵 懶翁老師 梅林留錫中毎制間三ヶ年入室す
- 筑後梅林僧堂 臨川亭 羅山老師 (卓州下) 八ヶ年掛塔
- 同 含輝室 無學老師 (卓州下) 一ヶ年掛塔
- 樹王軒 瑞應軒 瑞應軒 瑞應軒 見性寺大會中
- 豐後多福僧堂 瑞應軒 瑞應軒 瑞應軒 見性寺大會中
- 筑後大生寺 一華庵 惟庵老師 東光寺大會中

筑前聖福僧堂

讃州玄安寺

伊豫長福寺

妙心天授僧堂

肥後見性寺

大阪少林寺

墨溪老師 (卓州下)

馬應老師 (卓州下)

伽山老師 (卓州下)

越溪老師 (隱山下)

葆岳老師 (卓州下)

匡道老師 (卓州下)

聖福寺遺蹟中

梅林留錫中

長福寺留錫中

妙心侍衣中一ヶ年

一ヶ年掛塔

八幡僧堂留錫中

マアざつと斯んなものぢやらう。此の御手の中は、皆な衲の肚裏に諦得したのぢや。つまり土手ッ腹は見抜いてあるぢやが、今度は一つ衣を更へて師位となつて、天下の道場を巡錫して、真劍勝負を試みやうと思ふた。ソコデ道場巡りを始めたのぢや。

五四 南天棒を提げて天下の道場破り

二十五道場——前後二回——衣を換へ南面しての行脚——我慢勝他の念からではない——大法護持の深慮がある——南天棒が眞向から見舞ふ——一本の棒が何本にも見える——行かね先に知つて居る——真平たる威風——南天の棒の黄金時代——一番辛味は文靜——一夏と居る者がない——東山下の左邊亭

衲が例の南天棒を提げてからに、天下の二十五道場破りを造つたのは、三十六歳(明治七年)と三十八歳(明治九年)との前後二回ぢやつた。是れを前に掲げた遍參の二十四家と混合にして見まいぞ。彼れは雲衲時代に參叩した師家ぢやつがサ、今度は衣を換へ南面しての行脚ぢや。所謂辨底ぢやから、實にハヤ一騎打の戦ひぢや。敵の首を取るか、此方の首を渡すか。又た道場の喚鐘を取上げるか、此の南天棒を取られるかと云ふ、武士でなら武者修行ぢや。併しサ、只だ是れ徒らに優勝劣敗を争ふ爲めの我慢勝他の念からではないぞ。眞に大法の衰微したのが慨嘆に堪へぬから、卓州、隱山兩下の各家風を試みてサ、羊頭狗肉の相似禪者を、片ッ端から打ッ叩いて、打ち直さんと云ふ報恩底の外にはない。此の中に大法護持の深慮があるぢや。

ぢやから各處の専門道場では、随分此の南天棒には困つたぢや。中には卑怯にも居留守を遣ふ漢もあつたぢや。併し左様云ふ處では庭詰して動かぬので、とう／＼相見してサ、其の上に南天棒が眞向から見舞ふたこともある。又た一寸先方の鼻を掴んでサ、「佛か魔か」と云へば、ダウの音も出ぬ者さへある。殊に奇々妙々なのは、一本の棒が何本もあるやうに思はれたことぢや。南天棒は手の中の一かと思ふたりや、膝の下にも袖の中にも腰にもあつたなぞと云ふお笑草もあるぢや。衲は手品遣ぢやいなが、眼が眩んだお師家さんにや左様も見えたらうよ。「南天棒がく」

と、叢林ちや大騒ぎす。

明治九年の二度目の時などは、「ソラ又た南天棒が出る」と云ふので、江湖到處で大評判ぢや。今の世なら電信もあり電話もあるがサ、あの頃ちや電信が出来ても田舎までは来ぬ、郵便と云ふても鐵道の悪い時分ぢやから、通信はちよつくらちよんの間に合はぬ。それが面白くないか、何處から如何傳るのか、納が行かぬ先に、ちやんと南天棒が来ると云ふことを先方で知つて居るぢや。是りや怪しからんと思ふたことが度々あつた。其の頃の南天棒の威風は自分ながら凛乎たるものと思ふたよ。相手がドヂグヂしやうものなら、手早く三十棒を喫はせて拂袖して出で去る面影が、今でも眼に見えるやうぢや。三十棒を喫つて、へこたれた者が澤山あつたから、南天棒の名が津々浦々に轟き渡つたのも無理ぢやない。此の時が正に南天の棒の黄金時代ぢやつたらう。是れは今の世には類がないよ。納は法の爲めには喪身失命を避けずぢや。虎穴に入らずんば虎兒は捉へられぬ。此の位の眞劍勝負が出来ぬやうなことで、どうして直下に陣を展べ旗を聞く活作略がならうぞ。

納は前の遍參と今度の道場破りとで、天下所有宗匠に出會ふたが、二三の人は且らく措きサ、矢ッ張り文靜の室内が一番辛辣ぢやつた。叢林では文靜に鬼と冠を被せた位ぢや。鬼の住處は無處ぢや。室號を無住處軒と云ふた。豐前の永福寺と云ふ尼寺を假の住處として學人を接待したが、一夏と居るものはない。それは餘りに辛辣ぢやからサ。併し納はとう／＼三年も通ふたよ。納の隻手の調べは文靜の血滴々ぢや。實にハヤ文靜は東山下の左邊亭ぢや。ウーン左邊亭か。それは悪辣な人を指して云ふたものぢや。五祖法演の法嗣に西川の鄧師波と云ふ人があつたが、東山下の左邊亭と云ふ處に住んで居つて、悪辣無比の接待をやつたから、ソレデ荒ッほい處の人を呼んで、東山下の左邊亭と云ふぢや。左邊と云ふても酒のことぢやないぞ。公案にも此の語があるから氣を付けるが好い。

五五 梅林で初めて「無門關」を講じた

「無門關」の提唱始め——學人の激勵には一番好い——「出帥の表」を讀んで悟つた人——疑團を起して仕舞へ——分別も思慮も無字も入る處はない——疑團を解くのぢやない——疑團其のものになれば疑團は去る——人から得たものぢやない

無學さんが妙心の管長に出られて、梅林が空席になつたものぢやから、納に来て大家の世話をしてくれと云ふので、ソコデ納は同寺へ越錫して、雪安店に「無門關」を講じた。是れが納が「無門關」の提唱始めぢや。翌年の春間、「牛過窓檣」の則で講了した。大家は三十名ばかりぢや

つたが、日々の講座がやかましいのと、例の南天棒がなるのと、大衆は眞氣に遣つた。學人の激動には「無門關」が一番好い。殊に「趙州狗子」の則の無門和尚の評は中々好く出来てをる。是れは讀んだ儘で實修さへすれば好いぢや。禪坊主は毎朝行事がはりに讀むが好いぞ。在家の人でも此の評を讀むと、フト氣の付くこともあるべい。孔明の「出師の表」を讀んで悟つた人もある位ぢやからサ。無門の云草が好い。

「透關を要する底有ること莫し麼。三百六十の骨節、八萬四千の毫竅を將つて、通身より箇の疑團を起して、箇の無の字に參ぜよ。」

と、此處は以前八幡に居つた頃、尾州で萬寧老漢に打ツ突かつた處ぢやから、衲には思出も深い。サー頭の素天邊から足の爪先まで、一微塵も残さず無字になり切れ。即ち疑團を起して仕舞へ。箇の身肉髮毛爪齒、全體無字ならば、一舉手一投足、一言一句、無字でないものはないぞ。さうあらうぞなれば、分別も思慮も無字も入る處はないぞ。サー生死が如何かサ、身心が如何かサ。是れが即ち臨濟の全體作用ぢや。

ぢやから人々、疑團を解かうとすると間違ふぞ。疑團を解くのがぢやない、疑團になり切るぢや。煩惱を斷たうと思ふな、煩惱になり切つてみよ。野心を抱くなら、大野心になり切れ。疑團を解

かうの、煩惱を斷たうの、野心を抑えやうのと思ふ中は、自己の疑團と別ぢや、野心と自己と別ぢや、煩惱と我と別ぢや。それではいかぬ。なんでも疑團なら疑團。煩惱なら煩惱、野心なら野心になり切れ。所謂怪を怪とせざれば其の怪自ら消ゆぢや。支那人が、家に白澤の圖有れば斯くの如き妖怪無しと云ふが、衲に云はせると、是れは「白澤の圖無ければ」の方が好いぞ。各々工夫してみよ、疑團其のものになれば疑團は去るぢや。無の見もない、何んの邪魔もない。邪魔がなけりや清淨ぢや、清淨なりや大自在ぢや。實にハヤ手の舞ひ足の踏む處も知らぬぞ。茲は決して人から得たものぢやない、自知底のものぢや。ぢやから無門も其の次ぎ下の句でサ、

「晝夜提撕して虚無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ。箇の熱鐵丸を吞了するが如くに相ひ似たり、吐けども又た吐き出さず。従前の惡知惡覺を蕩盡して久々に純熟して、自然に内外打成一片ならば、啞子の夢を得るが如く、只だ自知することを許す。」

と云ふたぢや。是れは實に千聖不傳の妙道ぢや、金錢では買はれぬ。それぢやから價値があるぞ。各々大精進して本來の無字を手に入れよ。サー諸人、ムーツ、ムーツとやれ。

五六 勤と云ふ字に二つはない

寺の維持がむつかしい——裏の山林を開墾する——百丈和尚の清規——信施を強要するな——關山の伊深の牛牽き——赤子の喰物を取るより罪が深い——眞の信施が湧いて出る——阿古屋の文句——白隠の訓誡

大成寺は御維新前は好かつたが、いづくも同じ秋の夕暮でサ、其の後、寺の經濟が工合よく行かぬので、塔頭の權隱軒と大成寺とを合併して大享堂と云ふを建てたが、矢ッ張り如何も維持がむつかしい。ソコで衲は裏の山林の開拓を始めたぢや。朝は星を戴いて出で、晩は星を見て入つた。「一日作さざれば一日食はず」の境地を實地の上に行つて、麥を蒔き、豆を植え、それを米や金に換へて、大衆の飯米に充てた残りは皆な積み立てた。

勿論藩内は托鉢も日供も許されて、勸化は自由勝手ぢやがサ、百丈和尚の「清規」にも、「作さざれば食の本願が有る。」

と云ふ通り、信施ならざる信施を強要しては、佛祖に對して面目がない。自己の不徳の爲め眞の信施がないのぢや、眞の信施は求めずして來るものぢやと、衲は學人にも垂誡した。關山國師がサ、伊深の水田で牛牽きをやつたのも、畢竟此の百丈清規ぢや。

斯うして衲は毎日怠らず務めたので、其の骨折り甲斐が有つて、遂に數百金の維持費も得たぢや。衲の開墾した處は今墓場になつて居るが、あれを開く時は、手は豆だらけぢやつた。今時

北海道や樺天へ坊サマ達が行つて、開教して寺を建つと云ふことぢや。誠に結構なことぢやあるが、禪坊主は矢ッ張り百丈流に、自己の手で開拓するで無うては駄目々々。移民などには貧乏人が多い。故郷を離れて行くのには、よく／＼のことがなければならぬ。其等の人知らぬ他國で苦辛して得たものを、いかに坊サマぢやからと云ふて、握り拳丸をしながら、信施として強要するは、赤子の喰物を取るより罪が深いぞ。それよりも新開地の開拓布教でもしやうと云ふ願心があるならば、衲がやうに自分の手に豆を作るまでやつて開墾して看よ。眞の信施が湧いて出るぞ。自己の勤が足りぬと眞の信施は得られぬ。傾城の阿古屋の文句にも、

「責めらるゝが勤の代り、お前方も精出して、お責めなさるが身のお勤、勤と云ふ字に二つはない。」

とあるぢやないか。白隠は「勤」の一字を大書してサ、其の下に、

「天下の英雄、古今の聖賢、只だ此の一字より出頭し來れ。」

と書いて、後昆に示された。衲も平生此の主義ぢや。入室を聴かうが、作務をしやうが、餘念は無いぞ。趙州は、

「粥飯の二時用心の處。」

と云ふたが、何んの雜用心かい。飯になれ、粥になれぢや。眞の勤勉には餘念はないぞ。海外布教師や開教師は勤勉で遣れ。此の勤勉が直に大法丸出しぢや。百丈、關山、皆な此の境ぢや。何んでも實地にお遣んなさい。

五七 デモ主義なら眞平御免ぢや

坊主憎けりや袈裟迄憎い——盲目と盲目との寄合——初めて東京へ専門道場——其の擔任を管長から云付かる——窮屈な身が一時に勝手氣儘——弱の者では取止めることが出来ぬ——無學さんが氣遣はれる——ハッキリ禪堂を置くと云ふなら——留別の一詩

御維新後、明治政府が寺や坊主に對する遣り方は、「坊主憎けりや袈裟まで憎い」と云ふやうに、徳川の恩顧の深かつた寺だけに、随分手酷しいものぢやつた。佛教を排斥しても、それに代るだけの教法を立て、置いてなら好いが、何分にも政府に其れ丈の人がないから無方針ぢや。そこへ以て行つて、坊主共は更に無方針で、つまり盲目と盲目との寄合ぢやもの、恐しいではないか。

それでも妙心寺には、矢ツ張り關山の遺風が存じて居るものぢやから、本山でも種々と協議を重ねて、先づ第一に、皇室の御奠都があつた以上は、東京にも禪學の専門道場を設けて、大いに

宗風を宣揚せねばならぬと議決せられた。ソコで先づ東京の大教院に、議事として釋薩水さんが詰めることになつたので、其の補佐として隨行を命ぜられたのが、今川貞山さんと納ぢや、其の中でも納は専門道場の擔任を管長の無學さんから云ひ付かつたから、毛利家へ請暇して東京へ行くことにした。是れは明治十年ぢやつた。納は三十九歳サ。

前にも云ふ通り、其の頃の政府が坊主を取扱ふのは、まるで機多でも扱ふやうぢや。それに信仰の薄い東京ぢやあるし、殊に純粹な江戸ツ子は、ちりくばら／＼になり、偉ばつた大名や旗本は、國へ歸るか田舎へ引込むかして、新しい東京は無頼漢の集りぢや。とても今からは想像も出来ぬ位ぢやつた。そこへ禪堂を設けると云ふのぢやから、管長さんも随分心配をした。それに地方の末寺なぞでは、大半は坊主が還俗すると云ふ有様。それを又た藩や知事などが勧めると云ふのぢやからたまらない。おまけに女房は持て、魚肉でも牛肉でも、何んでも好きなものを勝手に喰へで、今まで窮屈な身が一時に勝手氣儘になつたのぢやから、修行も何も其方退けぢや。實際一時、佛法は傳道の者の爲めに減却されはせぬかと心配された位ぢや。

ソレで弱の者では、とても取止めることは出来ぬと云ふので、南天棒ならと云ふ處から、東京の専門道場の擔任か納の番に當つたのぢや。尤も納の他に擔任者を四人置いて、宗風挽回の同志

を募集することにした。それは伊豫の伽山、高松の米山、阿波の眉山、駿河の愚庵の四師と納との五人ぢや。管長さんも、此の五人の一行が確かに宗風を挽回するか如何かと、甚く氣遣はれるから、納が管長さんに向つて、

「貴僧が東京に禪學道場を置くと云ふ願心があれば、此の南天棒白崖が必らず置きます。併し若しそれが、禪堂でも置いてみやうかなぞと、デモ主義なら眞半御免ぢや。ぢやから確かに置くなら置くと、ハッキリ云つて下さい。すれば納が引受けます。大法扶起の爲めなら、分らぬ坊主の一正や二正は打ち殺しても、きつと禪堂を建てゝみせます。」

と誓ふと、無學管長も大いに喜んで、

「どうぞ頼む。」  
とのとで藥石になつた時、其の席上で無學さんは左の一詩を賦して、留別の臚にせられた。  
「名利二途に走る人多し、誰れか今ま法の爲めに獨り身を抛つ。衝天の忠膽風雲遠し、龍杖波を鼓して錦鱗を求む。」

### 五八 東京には禪道の跡を絶つたかも知れぬ

究すれば通じ通すれば變ず——禪も明治十年頃が衰微の極——南天棒が禪堂を設ける——手の中に入れて圓める様には行かぬ——萬治年代の禪風——愚堂の拈語——關山幸に愚堂の在る有り——ヤイ大愚が居るぞ——二字を訂正——白隠に至つて復興——此の大倒禪を支持した

其の頃又た一方では、西本願寺の法主の巡教を政府が中止したの、又た許したのと、宗教界は天地引ツくり返るやうな騒動ぢや。併し物と云ふは妙なもので、雨の日もあれば晴の日もあるぢや。所謂「究すれば通じ、通すれば變ず」で面白い世の中サ。梅は寒苦を凌いで清香を放つのが自然の理ぢや。

禪道もサ、明治十年頃は衰微の極ぢやつた。彼の時彼の儘に打ち捨てゝ置いたら、東京には禪道が跡を絶つて仕舞つたかも知れぬ。處が納が是れ、無學さんに誓つて東京へ来てサ。是れは後のことぢやが、頻死の状態に在つた禪界を回春させ、遂に今日のやうに花を咲かせるやうにした。其の頃は加賀では孝顯寺の清拙和尚が還俗して、鴻雪爪となるのなんのと云ふ時ぢやつたから、曹洞にも黄檗にも、選佛場などを設けると云ふ覺悟はなかつた。そこへ納が西京から遣つて來たので、「南天棒が禪堂を設ける」と云ふて、それ〴〵贊成者も出來たぢや。

處が東京へ禪堂を建設すると云ふは、公案と同じやうなもので、中々手の中へ入れて圓めるや

うな譯には行かぬ。一難去れば又た一難で、實にハヤ難透々々。併しサ、一難を歴る毎に一生活面を開くものぢや。禪が日本へ傳つてからも度々浮沈はあつたが、彼の妙心で關山國師の三百遠年諱の有つた頃（萬治三年）は、禪道は全く地に委して仕舞ふた。それは愚堂國師の拈香の語を見ても分明ぢや。有名な偈ぢや。それが如何なればサ、

「二十四流日本の禪、惜しい哉大半其の傳を失す。關山幸に兒孫の在る有り、聯芳を續焰す三百年。」

と。是りや愚堂が七十三歳の時ぢや。此の偈から見ても、二十四流の禪は大半滅したものでぢや。愚堂が是れを唱へる前に衆評に掛けた。スルト第二の承句が、「關山幸に愚堂の在る有り」としてあつたさうぢや。ソコで列席の大愚和尚が、

「ヤイ大愚が居るぞ、解らぬか。」

と遣つたので、流石の愚堂も、二字を訂正して「兒孫」としたと云ふが、愚堂和尚のやうな人があつたからこそ、此の大法を支持することが出来たのぢや。一人が支持した許りに、至道が生れ、正受が生れ、白隠が生れて、衰極の禪道も復興した。それから此の南天棒が生れて、明治初年の大倒禪を支持したのぢや。サ一此の次に生れるのは誰れカナ。今日ぢや禪の大切なことが少

しは解つたやうぢやから好いが、彼の頃と來たら、全くお話にもならなかつたよ。併し今は禪流行に連れて、相似禪や外道禪が多くなつたから、差引勘定をすれば何んにもならぬぢや。

### 五九 越溪さんと入替つて天授を引受ける

事務家と宗師家との間に紛擾——機縁熟せないのか——矢ッ張り駄目——自信力とは自己の信心力——弘濟寺の再建——瓦を運び木を築び土を擔ふ中に——出来上る迄には七ヶ年——本師の遷化——出る息が戻らにや其れが直に他方遊化

東京の専門道場もサ、いくら納が一生懸命になつても、中々思ふやうにや捗らぬ。それに事務家と宗師家との間にも、何んぢややら知らぬが、たゞがあつて、一向に埒が明かない。ソコで天授の越溪さんが東京の方へ廻つて、納に天授の方を遣れと云ふ本山からの命令ぢや。納は東京には未だ機縁熟せないのかと思ふてサ、西だらうが東だらうが、納の願心に變りはない。眞子を打ち出して、佛祖の惠命を全ふするのが本願ぢや。所謂嫌ふ底の法はない。ぢやから管長の云ひなりになつて、越溪さんと入替つて京都へ歸つたぢや。其の時納は、越溪さんが行つても旨くは行かないぢやらうと云ふたが、矢ッ張り其の通りで、越溪さんは苦勞をただけぢやつた。場所も東京市内には適當な處がなくて、野火止の平林寺をと云ふことぢやつたがサ、是れも無論立



消ぢや。

納は本山の天授僧堂を引受けたから、八幡から通つて其の擴張に盡碎したものでちや。何んでも自信力が強くなくては物事は成就せぬ。自信力とは即ち自己の信心力のことぢや。臨濟も、「爾が信不及なるが爲めの故に。」

と始終云はれた。自分に信心力がなくて、他人を信じさせやうとするは、ソリヤ無理な話ぢや。禪堂が建つた建たぬのと云ふも、畢竟それだけの信心力が坊主共にならなからちや。坊主ばかりぢやない。俗人の人々でも此の信心力が足りぬと、萬事にケロ付き廻つて、碌な仕事は一つも出来ぬぞ。一生涯何んの働きも無しに終るぢや。人間は大信心力を以て進まにや駄目ぢや。それに就いて納が寺を一 再建したと云ふ話がある。

其の頃ちやつた。禪柯山弘濟寺が廢寺になつて居るのを見もし聞きもしたので、納の願心は是れを其の儘に捨置きさせはせぬぢや。ソコデ山城國相樂郡上狗村椿井の弘濟へ上つて、是れが再建を謀つた。それは納が四十の歳(明治十一年)ぢや。一寺でも再建しやうと云ふのは、普通大抵なことではない。それに納は、人から無理に金を強請り出すことが嫌ひぢやから、先づ地所があつて、願心さへ弛まなければ、何時かしら其の中には必らず出来ると信じて掛つた。何んにし

ても集めものぢや。「引き寄せて結べは柴の庵なり」ぢや。瓦を運び木を繋ぎ土を築ふ中には出来うぞい。名聞我慢の再建ぢやないから、勸化もせまい。勸化の爲めに四來の雲衲を役するのには間違ひぢや。其の間に入室させれば、一人でも省悟せぬには限らぬ。さうあらうぞならば、弘濟寺の一つや二つは、其の一人の雲衲の手でも出来るぢや。ソレデ納は雲水の中で、お手傳ひしませうと云ふ者があつても、

「お前方は坐禪の方が肝要ぢや。」

と云ふて、一人の雲衲をも使はなかつたが、それでも自然に出来たよ。併し一切が整頓するには明治十一年から十七年まで、七ヶ年を費した。随分氣が長かつたぢやらう。

それから納が天授僧堂の擔仕で眼の廻る程忙しい時に、平戸の雄香寺から急使が有つて、授業師の麗宗和尚が遷化せられたことを報じて來た。併し今は本師の遷化ぢやからとて、大衆を放つて置いて國へ歸る譯に行かぬから、追悼の一偈を送つた。其の偈は斯うぢや。

「月有り花有り無盡藏、此間一段好風月、我が師遷化して今ま何にか在る。李白桃紅春轉た長なり。」

納が師は靈山下で、萬季さんの法嗣ぢやつた。六十一歳で遷化されたとは惜しいことぢや。併

し宿世の因縁は止むを得ぬ。各々是れ、出た息が戻らにやそれが直に他方退化ちや。御用心めされサ。ソコデ納は報恩の爲めに、遙かに西天を仰ぎ、香一柱を焚いて三拜をし、坐をした。後住か。後住としては納の師兄釣叟和尚が師蹟を嗣いでくれた。此の和尚は羅山老漢の處にも居られて、修行事も大半は了した人ぢや。それ以來、師の法は綿々として續いてをる。

六〇 禪堂建立を怒鳴つたが聞入れぬ

建仁寺に臨濟各派の大會議——大教校を設置するのが議題——我が佛心宗が教乗で知れうかい——學問などは俗人でも出来る——大方の世捨人には心せよ——魔王の誓ひ——獅子身中の蟲——棒頭に奪命の神符を添へる

納が四十一歳の春か。ぢやから明治十二年ぢや。京都の建仁寺に臨濟各派の大會議が有つたので、納は防長二ヶ國の代議士と云ふ資格で出席した。處で當日の議案は、東京湯島の麟祥院と八幡の圓福寺とに在る大教授を打ち超えた一大教校を設置したいと云ふのぢや。

ソコデ納の意見は、禪宗の大教校は取りも直さず専門道場ぢや。元來我が宗は佛心宗ぢや、教校なんと云ふものが要らうかい。我が宗が教乗で知れうかい。ぢやから大乘を修得した者でも知らぬぢやないか。況してや聲聞、緣覺の者に於てをやぢや。教乗が明らかでも佛心が無きや駄目

ぢや。學問などは俗人でも出来る。俗人は金があるから、金に飽かせて學問させるぢや。そんな學問なんかで俗人と競争をせんでも好い。又た他宗のやうに、學問で佛を賣る商賣なら致し方もないが、我が宗は佛心是れ宗ぢや、何んの人、學問などが要らうかい。それよりも一大禪堂を建て、眞の納僧を打出し、以つて國家の爲めにするに越したことはない。

抑臨濟禪は正宗ぢや 釋尊が迦葉に傳へて以來、一糸紊れず的々相承して來た。恰も我が皇統の連綿たるやうにサ、一器の水を一器に移し來つた。他宗にや其の類を見ない。我が正宗なら、他は權宗ぢやないか。今ま權宗の眞似をして、教者法師などを濫造して何んになるかサ。教相を看よ、釋迦滅後千年、而も龍樹が悟らぬ前の論說を基礎として建立した宗旨ぢやないか。眞に龍樹の心を知る者は迦那提婆一人ぢや。それが禪の系統ぢや。實にハヤ禪は佛法の總府ぢやないか。

處が今ま此の總府を捨ちようと云ふ會議ぢやから、それではならぬと、納が正義の下に禪堂建立を怒鳴つたが、解らぬと云ふは詮ないものぢや。兎角代表の議員となつて出て來せても無知無眼ぢやから困つたものサ。

「何の報か、報土の大日本國を暗黒世界にせうと掛つて居る。之れをしも忍ぶべくんば、終た

何をか忍ぶ可からざらんぢや。」

と、衲は舌が爛れるやうに説いたが、一向に聞入れぬ。それも其の筈かい。眞の佛子が一人も居ないぢやもの。外道の使奴をして居る者ばかりの集會ぢやつたからサ。實に大徳の大綱が、

大方の世捨人には心せよ

衣は着ても狐なりけり

と詠んだ、全く其れぢや。會議に列した坊主の中、一人として自己の宗旨の爲めに働かうと云ふものはない。

昔、魔王が佛に向つて誓を發して云ふのにサ、

「他日汝が家に入り、汝の衣を着、汝の食を喰ひ、汝の道を學び、汝の教を説いて、以つて汝の法を滅さん。」

と、即ち坊主に化けて佛法を滅すと云ふたが、建仁の會議も丁度其の通りで、黒衣圓頂の坊主が、自分から自分の宗旨を滅して居る。これこそ、

外からは手も付けられぬ要害を

内から破る栗のいがかな

ぢや。實に禪を滅す者は坊主なりぢや。佛が、

「魔、化して沙門と爲る。」

と云ふたも茲ぢや。是れを獅子身中の蟲と云ふぞ。今ま日本には此の蟲が十七八萬もはびこつて、眷屬を領して居る。恐ろしいこと此の上なしぢや。是れを見れば見る程、我が悲願を廣大ならしめ、如何しても此のバチルスを退治せねばならぬと、倍々棒頭に奪命の神符を添へた。

### 六一 眞正の師家なら舌を噛んで死ぬ

普賢寺で「臨濟録」の提唱——衆寡敵せず——身が八ッ裂になつても——臨濟のやかましく云ふたは人惑——大燈も云ふた——臨濟の説法——祖師の文句を知らぬ臨濟坊主は無い筈ぢやが——一人が惑されて其の道連れ——思想界の動搖

次いで衲は周防の室積港の普賢寺で「臨濟録」を講ずることになつた。京都の會議でこそ、衆寡敵せず、教相坊主等の爲めに勝を占められたが、衲は身が八ッ裂になつても、宗旨を立せねば措かんと、「臨濟録」の會に於て、説法の段を提唱した。

臨濟のやかましく云ふたは人惑ぢや。眞正の見解をした者は人惑を受けぬがサ、其の見解の無い者は人惑を受けらぢや。今ま日本國中にある十七八萬の僧侶の中、禪宗以外は兎に角、禪坊主

で而も臨濟正宗の學人が、人惑を受けるやうで何んとする。大燈も云ふた。

「真正の見解に参じた者は、袖の振り廻しでも知れる。」

と、禪坊主は人境にも佛祖の境にも惑はされてはならぬぞ。全體惑を受けるのは、獨脱せないからぢや、截斷を用ゐないからぢや。

臨濟は云ふのに、

「今時佛法を學する者は、且らく真正の見解を求めんことを要す。若し真正の見解を得ば、生死に染まず、去住自由なり。殊勝を求めんと要せざれども、殊勝自ら至る。道流、祇だ古より先徳の如きんば、皆な人を出す底の路有り。山僧が人に指示する處の如きんば、祇だ個人惑を受けざらんことを要す。用ゐんと要せば便ち用ゐよ、更に遲疑すること莫れ。」

と。是りや説法の段の初一聲ぢや。實にハヤ、親切なものぢや。此の祖師の文句を知らぬ坊主は無い筈ぢやがサ、建仁の會議には、一人も言茲に及ぶ者はなかつたぢや。

當時の政府の人等は、自分の國に住する念が薄かつたから、随つて外國人に惑はされたぢや。所謂政府は外惑を受けたのぢや。政府が左様ぢやからとて、坊主共は又た政府に惑はされたのぢや。一犬嘘に吠え、萬犬實を傳ふと云はうか。一人が惑はされて其の道連れぢや。又た癩兒、件

を牽くぢや。

禪宗坊主がサ、他宗の惑を受けるとは、真正の師家なら舌を嚙んで死ぬるのが當然ぢや。看よ、彼の時禰の云ふ通り太禪堂を起して、天下の雲衲や居士を修養させて看よ、今時のやうな思想界の動搖にも、ビタともせんで好いぞ。何んでも人々、己れの職分を信じて、人にも信ぜさせなくては人惑を受けるぞ。

### 六二 圓福の廣庭で學校道具を燒拂ふ

惟庵さんの病氣——眞の僧堂のやうにやるなら——圓福へ普山——桂巖和尚も辟易——山の様に積んで火を掛ける——徳山の燒經——餅屋の妻に一間浴せらる——龍潭に参ず——紙燭吹滅の端的——十八年掛つた「金剛經」疏——諸の支辨を窮むるも一毫な太虚に救くが若く——南天棒で大掃除が出来た

圓福寺の惟庵さんが病氣の爲め退かれたに就いて、八幡の門中から、禰に世話をしてくれと云ふて来た。禰は、

「圓福は七僧堂の一つぢやから、禰の僧堂のやうに遣るなら引受けても好いか、然も無ければお断りぢや。」

と云ふたら、總べて僧堂の規矩通りに遣ると云ふので、それならばと引受けて圓福へ晋山した。それは明治十二年、衲は四十一歳の時ちやつた。

圓福には西部の大教校が有つてサ、其の教頭を桂巖和尚がして居つたが、衲は晋山するや否や、猛烈な勢ひで大教校の打ち壊しに掛つたのちや。ソコデ先づ、氣の毒ぢやあつたが桂巖和尚に向つて、

「お前さんぢや此の改革は遣れぬから、早速お退きなさい。」

と、單刀直入にやつたものぢや。桂巖さんも餘人なら如何か知らぬが、右手に三尺五寸の大南天を握つて、玉禱を取つた衲の姿にや辟易したとみえて、何も云はず、直に退いたから、

「サー有りツ丈の教校道具を表の廣庭へ持出せ。」

と云ふもので、持出した道具を廣庭へ山と積み上げ、火を付けて片ツ端から焼いて仕舞ふた。イヤハヤ小氣味の好かつたことツたら。

衲が此の學校道具を焼いたのはサ、丁度千年前の徳山が焼經と同じぢや。龍潭の廣庭で徳山が「金剛經」の疏抄を焼いたのは實に面白い。此の徳山と云ふは、十八年間も掛つて「金剛經」を疏注した位ぢやから、其の頃南方に即心即佛の宗旨が流行ると聞いて、

「ソリヤ魔道ぢや、佛道ではない。それを即心即佛なぞとは怪しからん。聲聞や緣覺になるにも、三生六十劫も掛るぢや。それを此の世で直に佛に成れるとは以ての外ぢや。」

と、大いに憤つてからに、自ら南方へ赴いて此の魔者を打ち破つて呉れうと、「金剛經」の入つた重い荷物を脊負ひ込んでサ、エツサラ、オツサラと出掛けたものぢや、其の志の勇らしさ、實にハヤ勇猛精進の漢ぢやがサ、惜しいことには誇大妄想ぢやつたから、途中餅屋へ寄つて餅を買はうとしたら、却つて其の餅屋の婆々に一問浴せられたぢや。即ち、

「金剛經の十八章に、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得と有るが、お前様が今ま此の餅を喰ひたいと云ふ心は何の心か、サー道ふて看よ。道ひ得たら餅を進んぜうが、若し道ひ得なければ、例へ何百萬金を積んでも賣り申さぬ。」

と出られて、周金剛と迄云はれた流石の徳山もグツと行き詰つた。佛法は講釋だけでは自由が利かぬから、剛情我慢の徳山も大いに閉口して仕舞ふた。ソコデ婆々に教へられて龍潭の處へ行つてサ、相見問答があつた。徳山が夜分に入室して、何時までも話し込んで居るものぢやから、龍潭が、

「モウ夜が更けたから歸られよ。」

と云ふと、徳山は、

「是れはゑらう長坐をして済みませぬ。」

と、暇乞ひして表へ出て見たが、外は眞暗ぢや、鼻を掴まれて分らぬ位ぢや。ソコデ徳山が再び方丈へ取つて返して、

「外が餘りに暗う御座る。」

と云ふと、龍潭が紙燭を取つて與へた。昔は随分枯淡なものぢやつた。ソコデ徳山は紙燭を得て、

「有り難う御座る。」

と、手に取らうとした一刹那、龍潭が、フツと其の紙燭を吹き消した。オヤと思ふ間もない、此の時、此の場に於て、徳山正に本悟した。モウ「金剛經」も無ければ即心即佛も無く、萬事勦絶して仕舞ふた。徳山、思はず三拜した。まるで重荷でも卸したやうぢや。實にハヤ嬉しかつたらうサ。ソコデ徳山も、十八年も掛つた「金剛經」の疏抄ぢやあるが、是れ盡餘ぢや、物の役に立つものぢやないと、遂に其の疏抄を、法堂前の大庭で火を付けてポウ〜と焼き棄てた。其の時徳山が云ふのにサ、

「諸の玄辨を窮むるも、一毫を太虚に救ぐが若く、世の樞機を竭すも、一滴を巨壑に投するに似たり。」

と。衲も此の意氣ぢやつた。それから僧堂を本規矩にして、二十人の掛錫を許したが、其の時に人々が、

「南天棒で大教校の大掃除が出来た。」

と云ふたものぢや。あの儘學校にして置いたら、今頃は如何なつたかサ。今ま八幡が盛んなのも、一つは彼の時の大改革が効いたのぢや。處で其の雪安居には、「無門關」の提唱をして、「久響龍潭」の則でウンと大衆をこき上げたぢや

### 六三 辨慶と日蓮と鄧州和尚とは

小ッぼけな鎌は衲の腕にこたへない——普通の鎌の五倍程——人の五人分や六人分——大徳の管長程州老漢——日本佛教中の豪傑の三幅對——是りや見本ぢやらう——南泉鎌子——「我れ使ひ得て甚だ快なり」——南泉の鎌子と南天棒の鎌子と衲は晋山早々教校具の焼拂を遣つた後は作務もし、何も彼も遣つたぢや。大衆が銘々持つて居る鎌を、

「ドリヤ納にも一寸借せよ。」

と、取つて見ると、何んぢやい、赤錆になつた小ッほけな鎌ぢやないか。こんな物では納の腕にはこたへぬから、早速八幡の清水町の鍛冶屋へ云付けて、普通の鎌の五倍程に造れと誂へたら、直に打つて来たから、納は常に其の鎌を持つて作務をした。ぢやから確に人の五人分や六人分は働いたので、大衆等も驚いて居つたわい。大方の師家なりや、作務の日などは隠寮に引籠つて居るか、茶でも呑歩く位なものぢやが、納は大衆の作務の日は、屹度自分も括り禪に尻繫で、大衆と勞苦を共にしたものぢや。

或る作務の日もサ、納が例の鎌を持つて草撈りをして居ると、大徳の管長ぢやつた穆州老漢が来られた。老漢は納の作務を見てからに、

「昔の辨慶と日蓮と鄧州和尚とは、日本佛教中の豪傑ぢや。精力な處と云ひ、豪膽な處と云ひ、今昔の三幅對とも云ふべしぢや。」

と云ふて、狂歌を詠まれたことがある。今ま其の鎌は八幡の僧堂に置いてあるが、何時の世にか彼の鎌を遣ふ者が出るぢやらう。今時の雲納は彼の鎌を見たら、

「是りや見本ぢやらう、實際遣つたものぢやあるまい。」

と云ふに違ひないぢやらう。「葛藤集」を見た者は知つてぢやらうが、南泉が南泉山に在つて作務をして居ると、或僧が問ふた、

「南泉の路、何れの處に向つてか去る。」

と。スルト南泉は鎌子を拈起して云ふのに、

「我れ、此の茅鎌子を三十錢に買ひ得たり。」

と。僧云く、

「茅鎌子を問はず。南泉の路、何れの處に向つてか去る。」

南泉云く、

「我れ、使ひ得て甚だ快なり。」

と。此の南泉の鎌子と南大棒の鎌子と、同か別か。サー看よく〜。

#### 六四 茶見世の腰掛で一寸飲み五升

モウ納の役は濟んだ——惟庵さんも病氣全快——八幡を引上げる——天王山の茶見世——下地は好きなり御意は好し——暫くの間にケロリと——要らぬと云ふ迄飲んだ事はない——飲んで酒に呑まれぬ——飲む段には飲む三昧——新聞の評

舞——納は酒に執着はない

八幡の僧堂を眞規矩にする、大教核も廢する。モウ納の役は濟んだと云ふものぢや。ソレに病氣ぢやつた惟庵さんも全快したから、惟庵さんを再住させて、翌年（明治十三年）の二月十五日、「無門論」を講了せるを合圖に、納は八幡を引上げることにした。

ソコデ例に依つて、袈裟行李に草鞋で、サツ／＼と天王山の茶店迄來た。先づ一休みと思ふて、茶店へ腰を掛けて見ると、茶店ぢやあるが酒もあるぢや。下地は好きなり御意は好し。ドリヤー献傾けんと、豆腐を肴に、グビリ／＼と始めたが、暫くの間に五升の酒と三丁の豆腐とを盡して仕舞ふた。茶店の亭主を初め、店先に休息して居つた人々が驚くまいことか。

「禪宗の坊サマは喰物は能く召上がると聞いたが、お酒も随分飲むものですなア。菅笠片手に草鞋掛で、一寸の間に五升とは驚いた。座敷で御悠り召上つたら、何程位飲りますか。」と云ふから、納は、

「サ—何程飲めるか、モウ要らぬと云ふ迄飲んだことはないが、さうサ、一斗や二斗は飲めやうよ。酒は随分飲むがサ、まだ酒に呑まれたことはない。飲む段には飲む三味ぢや、別に餘念はない。酒は飲むなら何程でも飲むが好いが、只だ酒に呑まれぬやうに要心するが好い。」

と、勘定を拂ふて、

「ハイ左様なら。」

と、茶店を出た時の心持の好き。譬へのない位ぢやつた。

スルト翌日の大阪の「毎日新聞」や、京都、神戸の新聞にサ、「腰掛で酒五升を飲み、寸歩も亂さぬ禪僧、是れぞ日本全國を歴巡つた南天棒」と評判して有つた。納も若い時は随分酒豪ぢやつたサ。

諸君もサ、酒を飲むなら三味に飲め。古來大業を成就した者は。斗酒猶ほ辭せなんだぞ。そりや酒に呑まれぬからぢや。酒に呑まれぬ酒を飲め。酒も呑めぬ奴が、何程のことをするかい。併し納は酒に執着はない。何時でも止めると云へば止すよ。何にも飲まにやならぬとするには及ばぬ。又た飲んでではならぬとするにも及ばぬ。是れでも酒ぢや羅山老漢の印可があるからなア。

### 六五 招魂祭を遣つたのは納が始め

山崎天王山の關所——眞木和泉守以下十六人の殉死——水天宮の神主——「お蔭祭り」——友禪縮緬の肌脱ぎ——寶寺の大法會——先づ靈魂を招いて——招魂祭と納が命名した——三四人の參詣者——納を助けてくれた人——山師坊主とも



云はれた

山城の山崎天王山は、人も知つて居る關處の有つた處ぢや。表街道にも裏街道にも、兩方に關門があつたが、眞木和泉守以下十六人の烈士が、元治元甲子の年に其の天王山で國事に殉死した。此の和泉守は元久留米の水天宮の神主で、納も能く知つて居る。それが長州の騎兵隊附になつたぢや。ソコデ此の關門でござ〜が起つたのぢや。

是れは丁度「お蔭祭り」の有つた時で、今ま納の住んで居る西の宮あたりぢや大神宮のお札が降つたと云ふので大騒動ぢやつた。松村源一さんなぞの話を知ると、何處の娘も婆さんも皆な氣違ひのやうになつて、友禪縮緬の襦袢を肌脱ぎにしてサ、夜も晝も騒ぎ廻るやうなお祭り騒ぎぢやつたさうな。年寄の人なら知つてぢやらう。其の騒ぎの中を眞木等は船で西の宮へ着いて、それから山崎の關門へ掛つたのぢや。其處で、とう〜殉死を遂げたが、別に吊ふて遣る者もない。納は常々武士でも町人でもサ、國難に殉じた者を其の儘捨て置くべきではないと思ふて居る。眞木等は國家に對して、立派に武士の本分を盡したのぢや、追吊せなくてはならぬと、ソコデ明治十三年は殉死後十七年に當るので、七月二十一日から、天王山の寶寺で三日三夜の大法會を遣つたぢや。

其の時サ、此の追吊會を法會と呼ぶも妙なものぢや。彼の戦死者は未だ引導を受けた譯でも無いし、又た葬送の典禮を行つた譯でも無い。すれば謂はゞ未だ佛果を得ざる者ぢやから、先づ彼等の靈魂を招き、國難奉公の正義の行爲を稱揚して後、法に依つて無差別境に誘導し、以つて修羅の苦限を脱せしめなくてはならぬから、招魂祭とするが好いと納が命名したぢや。

ソレデ誠忠の殉難者に對して參拜する者も無論多かつたが、又た、招魂祭とは如何なものかしら、と思ふ人々も參集して、大層な群集ぢやつた。新聞などは三四千人も集つたと云ふて居つた。其の時は法會の外に、古人の遺墨を陳列したり、又た書畫、茶道、擊劍、劍舞、三曲の合奏と云ふやうに、種々の餘興を催し、參詣者の好き〜に任せて見たり聞いたり、其の道々を楽しむやうにしたので、皆の者も、「向上の精神をも養ふて、是れは誠に好いことぢや」と大いに満足したぢや。

それから招魂祭の名が日本全國に盛んになつたが、明治時代で招魂祭をやつたのは納が始めぢやさうな。彼の祭會には納も大分懐中をいためたが、納の願心を賛成して、種々援助を與へてくれた人の重なるは、

山口 素臣、和田 正邦、中村 義一、大庭 景一、友安治平延、中村 正雄、南 小四郎

國傳	音聞	大野	直輔	藤原	芳尚	福原	夫人	伊勢	小湊	谷口	梅宇	國重	正文
加島	菱州	小野	湖山	松田	雲外	澤井	石芸	調子村山川	橋川	正友	宮原	積	
可兒	玉浦	杉原	春江	大船	南山	三宅	芳郊	掠湖	道人	鳥尾	小彌太		

などと云ふ人々で、何れも衲の爲めに骨折つてくれた。衲もサ、此の祭會を遣るまでには、随分大阪へもお百度を踏んだものぢや。中には山師坊主ちやなぞと云ふ者もあつたが、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らうやと放つて置いたら、招魂祭の實行でビシャツと鳴を静めた。世の中と云ふは斯んなものよ。

### 六六 石の塔婆を天王山へ建つ

招魂記念碑——篆書は鳥尾得庵居士の筆——是れも因縁因果——百丈の野狐身——死者を直に祭つた神には解脱がない——生前に自己本地の面目を透徹した者——禪宗の引導の一喝の妙——忠は徹底的——忠即ち禪ぢや——永離三惡道

招魂祭が動機となつて、此の殉難者の芳名を永く傳へ、勤王の志を國民に知らしめんが爲め、招魂記念碑、所謂石の塔婆を建てたが、其の高さは一丈五尺餘に、幅は六尺餘りぢやつた。そして篆書は陸軍中將子爵鳥尾小彌太得庵居士の筆に成つて、十七烈士の名を刻したものでちや。衲が

鳥尾さんに篆書を請ふたのも所謂のあることで、得庵さんは矢張り此の天王山の關の裏を通つた松田さん等と一つ組ぢやつたから、其の因縁で書いて貰ふたのぢや。何事も因縁因果と云ふは怖ろしいもので、百丈も不落因果で五百生野狐身に墮し、不昧因果で野狐を脱した。ぢやから鳥尾さんの篆書で、元治甲子の殉難死者は成佛したのぢや。

全體戦死とか變死とか云ふものを、直に神に祀つたりするが、あれは不可ぬ。さう云ふ神には解脱がないから、随つて神の道たる清淨がない。楠公や乃木大將のやうに、生前に自己本地の面目を透徹してサ、忠魂義魄の凝つた者ならば、死處に懸障がないがサ、生前其處まで行かぬ者は、遂に修羅場裡の苦患を其の儘に續けて巢籠せぬ。ソコデそれを打ち切つて淨裸々赤洒々とするのが禪宗の引導ぢや。一喝の妙は其處にあるぢや。

畢竟、禪の修行を確かにしたものでないと、眞の忠義と云ふことが明瞭せんぢや。何故ならば、忠は徹底的なものぢやからサ。眞似や理窟ぢやないぞ。始と終を全ふするが忠ぢや。禪の本領は根底を盡さねば息まぬ。所謂高々たる山頂に立ち、或は深々たる海底に行く。ぢやから忠即ち禪ぢや。

招魂祭を造つて招魂の碑も建てた。是れで先づ天王山の忠魂供養は永久に遣つて呉れうぞ。石

燈籠に淨水器、それに燈油料も添へて置いた。

「一見卒塔婆、永難三惡道、何況造立者、往生安樂國」  
ぢや、看よ〜〜。

六七 管内を廻つて日供を申込む

用が多くて他行勝——大衆の横着——喰ふ米もないのにグツラ〜——托鉢の代りに日供——禪坊主は托鉢が眞箇——托鉢には二つの解釋——修行の方法も時と共に變遷——立處に應じてくれる——米の飯と太陽は付いて廻る

此の時分納は用が多くて他行勝ぢやつたから、徳山の大成寺の大衆が横着になり腐つて、托鉢にも出居らぬ。喰ふ米もないのに、グツラ〜して居るものぢやから、納は詮方なく、托鉢の代りに日供を附けることにしたが、全體禪坊主は托鉢が眞箇ぢや。釋迦時代から行乞したもののぢや。「金剛經」を讀んでも、

「城中を乞食し終つて坐に還る。」

とあるぞ。併し此の托鉢には二つの解釋があつてサ、鉢を持つて他人に布施させるのも托鉢ぢやが、又た一つには鉢盂を擎けて二時の粥飯に僧堂に上るをも云ふぢや。即ち、

「徳山、一日托鉢して堂に下る。」

と云ふ徳山の托鉢の如きは是れぢや。兎に角、坊主共に願心が足らぬから、止むを得ず日供米と云ふやうなことになるぢや。修行の方法も時と共に變遷るのかなア。

ソコで納は堀田直右衛門と、他た三人の居士を連れて、管内を廻つて日供を申込んだ處か、有り難いものぢや、立處に應じて呉れて、雲納の三十人や、寺の維持位は何んでもないやうになつた。法有れば食有りぢや、俗に云ふ、米の飯とお太陽さまは付いて廻るとは此のことぢや。何んでも正道を歩いて、其の道〜に三昧になれば、遣れぬことはない。各々三昧にならぬから、半ら半熟の者ばかり出来るぢや。

六八 物の命を取る丈が殺生ぢやない

伽山さんの頼み——是非にと云されて再び八幡入り——大衆が物を粗末にする——道念を養ふ者は——大には方處を絶し細には無限に入る——一々紙の始末をする——役に立つのを役立てずに捨てる——飯粒を拾ふ平將門

八幡の惟庵さんもと〜遷化されて、後へは伽山さんが直つた。處で其の伽山さんが伊豫の長福寺で「臨濟録」を講ぜられて納も隨喜したが、日多窟は此の會終ると、直に支那へ行くと

云ふぢやないか。ソコテ衾に八幡を世話してくれと云ふ。再三断つたが、日多窟は、

「お前の他に彼れを遣る者はない。」  
と、白羽の箭を立てたものぢや。衾は又候八幡へ行くのも如何かと思ふたが、伽山さんが是非にと云はれるので、再び八幡入りをやつたのは衾が四十五歳の春ぢやつた。

ソレデ雨安居には「毒語心經」を提唱したが、どうも大衆が物を粗末にしてならぬ。庭の塵捨場へ行つて見れば、紙の切や布の切が散ばつて居る。又た典座寮あたりでも、米が二粒三粒とこぼれて居る。是れぢやならぬと、提唱の折に大衆に向つて小言を云ふたぢや。それが如何あらうぞなればサ、道念を養ふ者は第一に物を粗末にせぬとぢや。世の中には何一つとして不用ぬと云ふものはない。所謂大には方處を絶し、細には無限に入るぢや。衾は平素美濃紙の切屑でも何んでも、生紙でさへあれば必らず保存して置く。さうすれば紙縫にもなれば、物を縛る紐にもなる。それをあつたら手の中に入れて丸めて仕舞へば、何んの役にも立つものでない。五分の紙が入るにも、一枚の紙を切らねばならぬ、不経済千萬ぢや。第一、紙が泣くぞ。例へ一枚の紙でも一分の紙でも、人が幾多の手敷を盡して居るのに、それを亂りにするのは、畢竟紙の殺生をするのぢや。物の命を取るだけが殺生ぢやないぞ。立派に役立つべきものを、役立てずに捨て、仕舞ふの

が殺生ぢや。米でも左様ぢや。米のことは前にも云ふた。或時平將門が、飯粒を拾ふて喰ふたら、それを見て居つた誰れやらが、

「飯粒を拾つて喰ふやうな者は、共に語るに足らぬ。」

と云ふたさうぢやが、それは道念から云へば喰ふが當然ぢや。喰ふべき物で無かつたら喰ふには及ばぬ。喰へる物を捨て、顧みぬのが即ち殺生ぢや。一升の米は八萬粒ばかりぢやと云ふ。併し一粒位、二粒位と云つて居れば一升の米も何時しか散り失せる。恐ろしいものぢや。ぢやに依つて、米や紙の殺生をしてはならぬと垂誡を與へた。

### 六九 警策でスツバリ遣られて落命

二度實見した罰策——普明國師五百遠年諺——不品行な坊サマ——裏門の脇の堺を乗越え——看門も見通す譯にはいかぬ——中へ飛込んで来る處を——今時なら殺人罪——山門前に活埋めにする罰策——それが厭なら骨折れ——叢林も近頃は香水の匂がする

今時の雲衾の中には、罰策など云ふことは知らぬ者があるが、衾が是れ八十年間の中に、二度罰策を實見したぢや。最初のは兼ても云ふた衾が十九の時、遠州奥山の半僧坊の罰策ぢや。そ